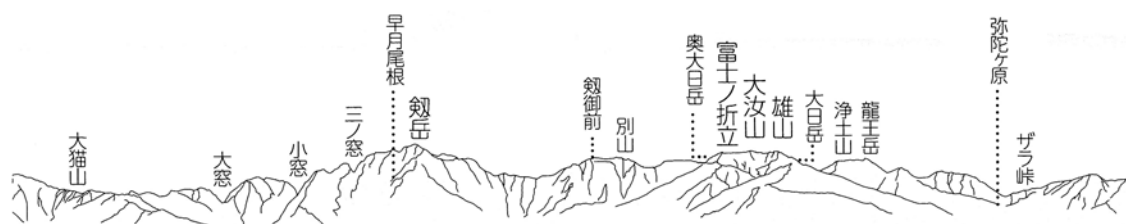


成 助 改 善 營 經
成 助 研 究 題 課

実 践 報 告 集

— 令 和 4 年 度 —



立山連峰

— 夢ひろがる富山の子どもたちのために —

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部

はじめに

「書いてまとめる」ことが自分の考えをまとめることになり、それが子供たちへの指導につながっていると感じました。」この言葉は、教育振興奨励助成贈呈式での受賞された先生方の感想でした。

課題研究奨励助成報告を提出された若手教職員たちの「…手立てを考えていきたい」「…実践を通じて学んでいきたい」「…効果を高めていきたい」等の言葉から、子供たち一人一人を見つめ育てたいという熱き想いを感じました。

経営改善奨励助成の論文や教育助成の報告では、富山県教育委員会が重点としてきている「子供の可能性を引き出し、才能や個性を伸ばす教育の推進」に沿った、手間暇をかけ、ぬくもりのある継続した取組みの実践が報告されています。

どの学校でも活用できる論文であり、教職員に参考となる報告でありますので各学校では是非生かしていただき、これまで以上に活力ある教育活動を展開していただければ幸いです。

今後もより実践的な指導力を高め、本県教育の発展と学校(園)の教育目標の実現に向けた日々の教育活動に生かしていってもらうことを心から願い、各事業に取り組んでまいりたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

令和5年2月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
支部長 青木正邦



励ましのことば

令和2年度より教育振興事業選考委員会委員長を拝命しております神川と申します。今年度の「教育振興奨励助成」贈呈式にあたり、ご挨拶と励ましの言葉を述べさせていただきます。

改めて、弘済会の歴史と理念を確認しましたところ、昭和27年の創立以来「明日を担う子供たちのために」という理念を掲げ、教育に携わる全ての方々を支えてこられました。弘済会事業のおかげで、本県教育の今日があることに気づくとともに、「人生100年時代において、創立当時に誕生したり、子供だったりした私どもの世代が、皆様と一緒に現在や未来の子供たちのために、できる事を考え続け、そして次の世代にバトンを渡し続けていきたい」という気持ちにさせていただきました。

今年の「経営改善奨励助成」では学校部門に43件、個人部門に11件の合計54件の応募があり、最優秀賞1件、優秀賞2件、優良賞3件、個人奨励賞2件を選考しました。

最優秀賞の富山県立新川みどり野高等学校では『生徒個々の実態に即した支援（指導）体制の構築を目指して』を研究主題に、卒業後の就労を見据えて1年次の段階から学校全体としての体系的な支援・指導体制を充実させる取組でした。個々の生徒の課題に応じて個別的教育支援や指導計画を作成し、関係職員や機関が連携して対応することにより、課題と改善点が明らかになり、保護者の理解や生徒本人の自己理解も高まったとしています。今後は生徒のライフスキルが向上する更なる支援・指導体制の構築が期待できると思いました。

個人部門で優秀賞に選考された富山市立蜷川小学校の濱田幸恵先生は、『思考ツールを活用して、主体的・対話的な学びのある授業を目指す』として、児童一人一人の主体的で対話的な学びのある授業を実現するために「思考ツール」を用いて、考えを深め、対話を充実させ、子供自身が思考ツールを選べるようにしました。そうすることで、子供の意識に変化が現れ、自分の考えを持ち、発表したり書いたりすることを得意とする子供が増えて、友達の考えもより理解できるようになるという効果が見られたことから、「思考ツール」が有効であったとしています。

同じく個人部門で優秀賞に選考された高岡市立志貴野中学校の竹嶋和裕先生の取り組みは、『数学の学力向上を目指して』として、全国学力学習状況調査の結果から記述式問題に対する正答率が低いという課題を改善するために、基礎的・汎用的読解力を指す「リーディングスキル（RS）」に焦点を当てました。そして、理論コミュニケーションや読解力向上のための授業を工夫して行っていくことで「リーディングスキル（RS）」が高まり、数学的な思考・判断・表現の向上が図れるとしています。

また、優良賞や個人奨励賞を受賞された研究の一つ一つが、研究の背景に、予想外に長引くコロナ禍の危機においても、一人一人の子供たちの成長を願って、学びを止めないように様々な配慮と工夫がなされています。真に子供を愛し、学校現場が中心となってこれまで以上に楽しく、児童・生徒も教員も安心して学び合い、保護者からも信頼される場所となるようにという熱い願いが、理論的で冷静な研究展開の中にも端々に感じられました。

選考委員の皆様からも、どの研究論文も学校運営や授業研究、子供たち一人一人の成長に挑戦的に取り組む姿勢が窺え、読み応えがあり、甲乙つけがたく、審査をさせて頂きながら、多くの刺激を受け、力を頂いたという共通の声を頂きました。私も同感で、コロナ禍のみならず、社会情勢や自然環境も厳しい中、子供たちの学びのために、新しい技術を活用し、できる事を考え続けて、校長先生、教職員の皆様、そして児童・生徒たちが多様な課題に、怯むことなく積極的に挑み、学校全体が協働する喜びを実感しながら、創造的な姿勢で取り組まれていることに、富山県の教育の未来に大いなる希望と明るさ、力強さを確信いたしました。

今後も弘済会の教育振興助成は、変化の著しい社会環境の中で押し寄せてくる様々な教育課題に果敢に立ち向かい課題解決を目指す学校や団体、グループや個人を応援し続けて頂きたいと思います。そして本県の教育に携わる全ての皆様には教育の振興、発展、質の向上のために、お力を発揮して下さいを心より期待しております。

県内の教育現場のみならず日本全体や世界の子供たちが、コロナ禍に代表されるような変化が激しくリスクの予測しにくい人生100年時代を、夢を持ち続けて生き抜く力を育成するために貢献して下さいを願ひまして、お祝いと激励の言葉とさせていただきます。

令和5年2月

富山大学名誉教授
教育振興事業選考委員会委員長
神川 康子

教育振興奨励助成の主旨

公益財団法人日本教育公務員弘済会富山支部

弘済会の教育振興事業は、子供たちの健やかな成長を願い、研究・研修を実践されておられる、教育関係者及び団体等を支援する事業です。

ここに、本県教育の充実発展に寄与するため、次の助成を行います。

1 経営改善奨励助成

経営改善・工夫を研究テーマに掲げて取り組む学校や学年・教科等の部会に対し助成を行い、さらに優秀な報告(論文)に対して奨励金を給付します。

- ・最優秀賞(1件)、優秀賞(2件)、優良賞(3件)、個人奨励賞(2件)

2 課題研究奨励助成

学校経営の一翼を担い、今日的な課題を掲げて研究実践に取り組む30歳以下(31歳以上の新規採用教職員は3年次まで)の教職員からの申請(668件)に対し助成を行い、さらに昨年度の報告(644件)のうち優秀な報告(研究)に対して、奨励金を給付します。

- ・優秀賞(20件)
- ・優良賞(30件)

3 教育団体研究助成

本県教育の一層の振興を図るため、幼・小・中・高校(園)長会をはじめ、教頭会、教育研究会などの団体に対して、助成を行います。

- ・教育団体研究助成(13件)

目 次

はじめに 支部長 青木正邦

励ましのことば 富山大学名誉教授 神川康子
教育振興事業選考委員会委員長

教育振興奨励助成の主旨

◇ 経営改善奨励助成受賞論文

- ・生徒個々の実態に即した支援（指導）体制の構築を目指して
富山県立新川みどり野高等学校 校長 高島由順 …… 1
- ・思考ツールを活用して、主体的・対話的な学びのある授業を目指す
富山市立蜷川小学校 教諭 濱田幸恵 …… 5
- ・数学の学力向上を目指して
高岡市立志貴野中学校 教諭 竹嶋和裕 …… 9
- ・コロナ禍における、子供たちの健康づくりや体力づくりはどうあればよいか
滑川市立田中小学校 校長 玉木彰治 …… 13
- ・子供たちの非認知能力をはぐくむ学校経営
富山市立保内小学校 校長 長谷川泰久 …… 17
- ・自らの在り方・生き方を見つめ、成長に向けて努力する生徒の育成
富山市立芝園中学校 校長 池永美子 …… 21
- ・「主体的に学ぶ子供の育成」を目指して
富山市教育センター 指導主事 篠田美希子 …… 25
- ・心と体の健康づくりを主体的・協働的に実践していく子供の育成
富山市立藤ノ木小学校 養護教諭 岡田奈菜 …… 29
- *令和4年度経営改善助成申請一覧 …… 33

◇ 課題研究奨励助成報告「優秀賞」

- ・タブレット端末を活用した社会科授業の工夫
黒部市立中央小学校 教諭 小川陽平 …… 37
- ・理科における深い学びを生み出す教材開発
滑川市立田中小学校 教諭 武田佳樹 …… 38
- ・豊かな経験を通して自分の考えや思いをもち、表現していく子供たちの育成をめざして
富山市立大広田小学校 教諭 太田風紗 …… 39
- ・「考え、議論する道徳」の実現に向けた具体的手立てについて
富山市立八幡小学校 教諭 高野昌幸 …… 40

・児童が外国語を用いて生き生きとコミュニケーションを図ろうとする授業づくり 富山市立新庄小学校	教諭 上野友里愛	41
・身体全体を使って造形活動に取り組むことで、主体的に学習する子供の育成 富山市立堀川小学校	教諭 長谷川仁義	42
・必要感の高まりから、学習の本質に迫る子供の育成を目指して 富山市立堀川小学校	教諭 杉本茉由	43
・子供たちが主体的・対話的に話し合うための教師の手立て 富山市立速星小学校	教諭 嶋津弘文	44
・大切な仲間と一緒に伸びる学級づくり 富山市立八尾小学校	教諭 永原枝里子	45
・聴き合いを通して、学びを深める子供の育成 富山市立新保小学校	教諭 小澤昭吾	46
・互いのよさを認め、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成 富山市立古沢小学校	教諭 麻生有希	47
・伝えること、聞くことを通して、コミュニケーションを楽しむ子供の育成を目指して 富山市立奥田小学校	教諭 中村麻裕	48
・聴き合い、伝え合って自ら学ぶ子供の育成を目指して 富山市立東部小学校	教諭 田村優奈	49
・自信をもって自分の思いや考えを伝えられる児童の育成 射水市立歌の森小学校	教諭 中山麻優	50
・主体的に社会的事象に問い続けていく学習過程の工夫 高岡市立川原小学校	教諭 柳澤紗也佳	51
・一人一台端末を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方 富山市立芝園中学校	教諭 岡本奎一	52
・外国語科における音読・スピーキング指導の工夫 富山市立楡原中学校	教諭 宮井杏理	53
・柔道の授業における安全で効果的な投げ技の指導の工夫 高岡市立福岡中学校	教諭 竹内優香	54
・主体的な態度を育てるためのICTの効果的な活用法の模索 富山県立中央農業高等学校	教諭 橋本樹	55
・GISを用いた地理Aの授業展開 富山県立中央農業高等学校	教諭 大井裕介	56

◇ 課題研究奨励助成報告「優良賞」	57
-------------------	----

*令和4年度課題研究奨励助成報告一覧	59
--------------------	----

◇ 經營改善獎勵助成受賞論文

生徒個々の実態に即した支援(指導)体制の構築を目指して

富山県立新川みどり野高等学校 校長 高 島 由 順

1 はじめに

本校は、昼間I部・昼間II部・夜間の3部制及び前期・後期の2期制をとり、普通科と福祉教養科からなる定時制単位制高校である。全校生徒は113人で、男女比及び卒業後の進学・就職は概ね半々である。本校に在籍する生徒のうち、不登校経験や発達障害を抱える割合が近年顕著な増加傾向を示しており、学校全体として生徒個々の実態に即した組織的な支援(指導)体制の構築が課題となっている。平成30年度から開始された通級指導については、本年度から専任の通級指導員が配置され、きめ細かい指導が行われているが、通級対象生徒以外にも困難を抱える生徒は多数在籍している。

近年、特に問題となっているのは、就職した本校卒業生の職場への定着度である。高卒で就職した生徒の離職率について、富山県の平均が20%(就職後3年以内の数値～富山県キャリア支援教育アドバイザーの調査による)であるのに対し、本校の卒業生は就職後3年以内で32.3%、就職後5年以内では42.6%(本校進路指導部の調査による)と高い数値を示している。

本校生徒の就業状況について、就職先企業等から本校進路指導部に報告のあった内容を踏まえると、

- ・ 少人数集団での学校生活に慣れているため、一般的な集団生活での経験不足が見られることがある
- ・ 対人関係の構築スキルが乏しい生徒の割合が比較的大きい
- ・ 社会人として働く上での基本的なスキル(例えば無断で遅刻しないなど)が欠如しているケースがある

といった本校生徒の実情が、離職率の高さに影響を及ぼしている可能性も十分考えられる。

2 研究主題

本校ではこれまでに、生徒の抱える個々の課題の把握、卒業後「働く社会人」として必要な基本的スキルの定着、体験活動の充実等に取り組んできた。本研究に取り組むに当たって、まずは、これまでの支援内容について効果を改めて検証し、有効な内容の充実を図りながら、一方で課題を明確化しなければなら

ない。検証結果を踏まえて、生徒個々の実態に即した支援(指導)体制の構築をどのように目指すべきかについて考察し、改善の端緒とすることが本研究の主題である。

3 これまでの取組の概要

昨年度及び本年度にかけて、本校の生徒支援(指導)に対する取組の概要は、以下の通りである。

3.1 生徒の実態把握と情報共有及び研修

前述の通り、本校の生徒の実態は、不登校(中学校以前の経験含む)、低学力、発達障害を抱えている等広範に及び、その支援(指導)内容も多岐に渡る。こうした状況に対応するためには、生徒の正確な実態把握と教職員の共通理解が重要である。そこで、以下の①と②に取り組んだ。

- ①特別支援対象生徒の「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」に関する様式及び情報共有の改善
- ②教職員全員を対象にした研修会や共通理解の場を多く設定

①に関して、「個別の教育支援計画」については県統一書式を使用しているが、「個別の指導計画」については、当該生徒に関わる全ての教職員で活用方法を見据えて検討した本校独自の様式を作成し使用してきた。担任・年次主任・授業担当者・ホームルーム活動担当者・スクールカウンセラー・通級担当者等は、対象生徒の活動内容に即した指導計画並びにその成果や課題を、学期毎に意見交換し記録している。

昨年度は、生徒の個人情報を整理し、実態把握の際の効率化を図った。本校はこれまで、保健室・年次・担任・保健厚生部など、それぞれが関係する情報を個々に保管してきたが、それらの情報を統一した様式で電子データ化し、教職員が共有しやすくなるように改善した。データは、「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」、「(中学校時の)個別の教育支援計画」、「服薬状況」、「カウンセリング記録」、「健康面における配慮事項」、「ケース会議記録」、「個別の実

態把握表(学習面・行動面・対人関係・進路希望)」、「プロフィールカード(入学時に調査する心と身体の状態)」等である。これにより、支援(指導)に結びつく情報を、必要とする教職員がすぐに知ることができるようになった。また、貴重な情報が活用されないまま埋もれてしまうことが顕著に減少し、教職員の業務の短縮化にも繋がった。

②について、本校では特別支援に関する知識や支援方法に不安を抱える教職員が多かったため、全教職員を対象にした研修会等を多く設けた。以下は、昨年度から本年度にかけて実施した研修会等の一部である。

- ・『今年度のケース会議の実施方法について』(保健厚生部)
- ・『「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の記入方法について』(保健厚生部)
- ・『今年度の特別支援対象生徒について～実態把握と支援内容、共通理解事項の確認等』(保健厚生部)
- ・『合理的配慮について』(外部講師)
- ・『発達障害の理解』(本校スクールソーシャルワーカー)
- ・『特別な支援を必要とする生徒の就労支援について』(通級担当者)
- ・『発達障害を抱える生徒の社会的コミュニケーションの問題と困難』(外部講師)

このように、研修機会が充実するにつれ、教職員全体の情報共有も円滑になった。その結果、特別支援教育に関する教職員の意識が高まるとともに、ある生徒の学力や不登校の原因に発達障害が関係しているのかといった議論や、ある生徒の支援で可能な合理的配慮についてなどの情報交換が、職員室内で日常的に行われるようになりつつある。

3.2 生徒が自分の実態を把握する取組

本校の生徒は、集団生活におけるさまざまな経験が不足している等の理由により、自分の能力を客観的に把握できない傾向が見られる。このような状況では、教職員やスクールカウンセラーなどから指導を受けても何のための指導なのか理解できず、効果も減少してしまうと考えられる。そのため、実態把握の場面では、教職員だけでなく生徒自身が自分の実態を客観的に捉える必要がある。自己理解の低さを生徒自身が客観視し見つめ直す取組として、本年度「みどり野ライフスキルチェック」を試験的に作成した。このチェックは、「生活リズムと規律」、「自己信頼とセルフケア」、「対人関係」、「問題解決」、「感情対処」、

「目標設定と自己成長」などの分野における全30項目で構成され、本校のスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・通級担当者等の意見を取り入れた。項目は難易度順にステップ1からステップ3までの3段階とし、卒業時までには全てのスキルを習得することで、ようやく社会人として必要なライフスキルが整う事に繋がっていくよう構成されている。

本年度は生徒1人1台タブレット端末が配備されたこともあり、生徒がタブレットを使用しながら手軽に回答及び集計できるよう改善し、いくつかのクラスで試験的に実施した。以下は、本年度試験的に実施したライフスキルチェックの集計結果である。

～「みどり野ライフスキルチェック」の実践例～

本年度は1年次の2クラス(計17名)、3年次の1クラス(4名)の合計21名に対し、30項目のライフスキルについて試験的に実施した。集計では、年次が進むにつれて低くなるスキル、あるいは年次に関わらず低いスキルなど興味深い結果が得られた。ただし、1年次と3年次で比較する人数に大きな差があり、特に3年次は母集団が4名と少ないことから、本格実施に向けた参考の域を出ない点は考慮しなければならない。

以下の数値は、各項目において、「できる」・「まあまあできる」と回答した生徒の集計結果である。なお「スキルが高い・低い」の基準は概ね50%を目安とした。

年次進行につれて伸びるスキル項目		
1年次・3年次とも	0項目	
年次に関係なく高いスキル項目	1年次	3年次
他者への感謝を表せる	88%	100%
素直に謝ることができる	82%	100%
自分の感情を理解している	88%	75%
怒っていても感情を抑えて相手と話ができる	88%	75%
自分の乗り越えるべき課題を知っている	65%	100%
自分の感情の変化やその原因がわかる	82%	100%
自分で休みを確保できる	82%	100%
年次に関係なく低いスキル項目	1年次	3年次
様々な職業を知っている	53%	50%
欠席や遅刻をしない	47%	25%
職業や進路先の適性を考えている	65%	50%
欠席は年間5日以内である	41%	0%

年次進行につれて低くなるスキル項目	1年次	3年次
係や行事に参加している	82%	25%
身だしなみを整えている	82%	50%
自分の気持ちを他者に伝えられる	81%	0%
失敗しても再び挑戦できる	65%	25%
自分の間違いを許せる	94%	50%

集計結果から、本校生徒の特長や課題として、

- ・ 在学中のソフトスキルの向上が見られない
- ・ 自分自身の感情や克服すべき課題を理解している
- ・ 職業に関する知識に乏しく、勤労意欲も低い
- ・ 一度失敗すると再挑戦する意欲が低くなる

というケースがあるのではないかとと思われる。

次年度は、全校生徒を対象により細かい比較検討ができるよう、実施環境を整えていきたい。いずれにしても、生徒自身が何に困難を感じ、どこで躓いているのかという実態把握を的確に行い、自律又は自立しようとする意欲を高めるような取組を、学校全体として支援（指導）していくことが重要である。

3.3 ケース会議の充実

日々変化する生徒の実態を教職員で共有し支援（指導）方法を検討するため、ケース会議の実施回数を増やすよう調整を図った。ケース会議の参加者は、担任・年次主任・スクールカウンセラー・授業担当者・通級担当教員・進路指導部・保健厚生部（特別支援担当）等であり、必要があれば参加範囲を広げる拡大ケース会議という形をとることもある。1回のケース会議は1人の生徒を対象に30分程度で実施し、様々な立場からの多角的な視点に基づいてケース会議の回数を重ねることにより、一定の成果が見られた。ただし、支援対象生徒の増加もあり、当初目標としていた月1回以上の実施には至らず、運営面が次年度以降の課題となった。

～生徒Aの実践例～

生徒Aは自閉症とADHDであり、対人関係や家庭内での日常生活における困難を抱えている。支援目標と手立ては、「日常生活で有効なコミュニケーション能力を身に付けられるよう、様々な場面のシミュレーションを通じて理解すること」である。

生徒Aの対人関係の問題は、「特に高校に入学してから、友人とのコミュニケーションの中で、今まで経験

したことの無い困惑を感じる場面が増えた。その際、自分の考え方がおかしいのか、相手に常識がないのかが自分では分からない」という内容であった。そこで、スクールカウンセラーによるSST（ソーシャル・スキル・トレーニング）を継続的に行った結果、過去のほとんどの場面で生徒Aは間違った判断をしておらず、相手側に問題があったことが分かってきた。それと並行して生徒Aは、「人には様々なものの考え方があり、それらを少しずつ受け入れる意識を持つようにする」ことを心掛けるようになった。半年程度こうしたSSTを繰り返したことで、現在では日常生活ではほぼ問題がない程度に他者とのコミュニケーションがとれるようになっている。

3.4 支援室の環境整備

昨年度までは、特別指導のための専用教室を固定的に確保していないなど環境整備が不十分であったが、本年度改善に着手した。まず、通級担当者など特別支援を担当する教職員が常駐する支援室の整備を図り、通級指導教室とした。また、通級の授業でICTを活用できるようネットワーク環境を整備した。こうした改善により通級指導の運営が効率化すると共に、通級指導員の常駐により、生徒が都合の良い時間に支援室に来て、相談したりSSTを行ったりすることが可能になった。ただし、担任との連携は必ずしも円滑であったとは言えず、運用面で改善を図る必要がある。

3.5 「模擬作業体験」や「就業体験」の充実

本校では働く社会人として必要なハードスキルの向上を目指して、地元の企業と連携して就業体験を実施している。特に昨年度は、県内の就労支援センター（以下、支援センター）と連携して、「模擬作業体験」を1年次の全員及び他年次の希望者を対象に実施した。

この体験では、「ピッキング（指示書を見ながら指定された品目を速く正確に袋詰めをする）」、「領収書作成（リストを見ながら宛名や日付等を速く正確に記入する）」、「電卓計算（リストを見ながら金額を計算し、所定の用紙に記入する）」等の作業を行い、様々な作業能力を数値化することができる。作業能力は、「正確性」、「スピード」、「指示理解」、「集中力」、「報告連絡相談」の5項目を、それぞれ10段階の数値で評価する。

以下は参加した一部の生徒の評価を表にまとめたものである。

生徒	正確性	スピード	指示理解	集中力	報連相	総合
A	5	8	6	6	7	32
B	6	9	8	6	6	35
C	8	4	7	8	7	34
D	5	5	6	6	5	27
E	9	8	10	8	10	45
平均	7.7	8.0	8.0	8.5	7.9	40.1

※平均は、本校生徒の平均値

この評価結果を知ることで、生徒自身が自分の得意な分野や課題を知ったり、ハードスキルそのものの高さを知ることができたりする。また、教職員にとっても生徒の実態把握に大きく役立つ。作業能力は学力と必ずしも比例するものではなく、教職員が漠然と予測していた当該生徒の作業能力とは全く異なる評価（高評価あるいは低評価）が多くみられた。

なお、実施後は支援センター職員による保護者面談も実施した。体験に参加した生徒や保護者の事後アンケートからは、

- ・今まで気付かなかった自分の得意又は不得意なスキルを知ることができた（生徒）
- ・今後進路を選択する上で、評価表の数値を参考にしたい（生徒）
- ・「自分の子に対する困り感」を専門家に相談できた（保護者）
- ・就労支援に関する知識が高まった（保護者）

等の感想が寄せられた。また、面談の際には、教員から保護者にうまく説明できない生徒の実態についても、支援センターの職員は専門的な立場から明確に伝えることが可能なケースも見られ、保護者の子に対する理解という面でも大いに役立った。今後もこの体験活動を継続して実施すると共に、同じ生徒が継続して体験した結果の分析等も年次進行で蓄積を図り、ハードスキルの向上の変容等について調査していきたい。

4 成果と課題

昨年度から本年度にかけて、生徒の実態を的確に把握し情報共有する体制の構築、生徒理解のための研修会等の充実、生徒が自分を客観的に認識するためのライフスキルチェック、各種体験作業の分析結果を本人及び保護者と共有するなど、教職員が生徒の抱える困難をできるだけ的確に把握し共有する取組は着実に前進している。

昨年度から実践してきた様々な方策の効果を上げるためには、周囲だけでなく生徒自身が自分の実態を把握している必要がある。実態把握のために作成した「みどり野ライフスキルチェック」は、本年度は少人数での試行にとどまったが、高いスキル項目と低いスキル項目を洗い出すことができたため、身近の弱点克服などの指導に生かせることがわかった。しかし「年次進行につれて伸びるスキル項目」については測定できず、年次とともに何がどのように伸びていくかを捉えるまでには至らなかったことが残念である。

様々な課題を抱える本校生徒にとって、入学から卒業まで一貫した指導が重要であると考え本校としては、全校生徒を対象にしてライフスキルチェックを実施し、過年度比較を踏まえた指導を行うことにより、これまで実施してきた取組、具体的には、

- ①生徒の実態を的確に把握し情報共有する体制の構築
- ②生徒理解のための研修会等の充実
- ③本人及び保護者との各種体験作業の分析結果の共有

がより効果的になるものと確信している。

一方、生徒の抱える複雑な問題の解決には、学校内の特定の分掌や年次が個々に対応していたのでは限界があり、その克服が課題であると明確になった。

その解決方法として、本校としては、

- ・校内の各分掌組織を必要に応じて横断的に連携させ、きめ細かく支援（指導）できる体制の構築を図る
- ・特別支援学校と連携した研修等を模索し、指導上参考になりそうな取組内容について、意見交換の場を設ける
- ・外部機関、特に就労支援施設等との連携を充実し、生徒の支援について専門的な立場からの助言を得られるよう連携を進展させる

等が挙げられると考えている。

本校に在籍する全ての生徒が、本校卒業後も就職先や進学先、また、地域において自分の力で人間関係を適切に構築し、社会の一員として生活していけるよう、支援（指導）体制の構築を継続的・計画的にさらに前進させていきたい。

参 考 文 献

梅永雄二 (2014) . 『自立をかなえる! <特別支援教育> ライフスキルトレーニングスタートブック』. 明治図書出版.

思考ツールを活用して、主体的・対話的な学びのある授業を目指す

富山市立蛭川小学校 教諭 濱田幸恵

1 はじめに

平成29年に告示された新学習指導要領（文部科学省,2018）の改訂では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。

本学級では、「主体的・対話的な学び」を実現させている姿が見られる一方で、課題に対して自分の考えをもてなかったり、友達の考えが理解できなかったりするために、学ぶ楽しさを感じることができていない児童も見受けられる。

〈5月アンケート〉	はい	いいえ
自分の考えを発表するのは得意ですか	64%	36%
自分の考えを書くのは得意ですか	84%	16%

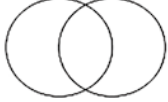
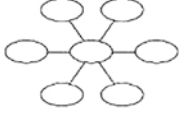
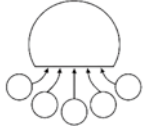

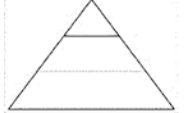
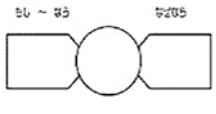

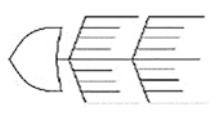
「いいえ」と答えた児童は理由として、主に「考えをもつのが難しいから。」「考えをうまくまとめられないから。」という意見が出た。このような学びに苦手意識をもつ児童が、学ぶ楽しさを感じられるようにするためには、思考しやすくしたり、理解しやすくしたりする手立てが必要だと考えた。

そこで、本研究では、思考スキルを実現する枠組みを与える「思考ツール」を用いて、児童一人一人の主体的で対話的な学びのある授業につなげたいと考えた。思考ツールを使用することで、情報が可視化され思考が方向付けられる。そして、ねらいとする思考スキルが実現され、子供一人ひとりの学びの楽しさにつながると考えられる。思考ツールの活用がどのように子供たちの学びに効果があるのか検証を進めていきたい。

2 使用する思考ツールとその思考スキル

比べて考えることや分析すること等を子供に指示をしても、子供にとっては難しい行程である。どのようにすると比較できるのか、どのような学習活動を行うと分析できるかを明らかにし、それを学習活動として用意することが欠かせない。ここに必要となるのが思考ツールである。（参考「思考ツールの」授業）

数ある思考ツールの中で、子供たちに紹介したのは以下の8点である。

思考ツール	思考スキル	枠組み
(1)ベン図	比較する 分類する	
(2)イメージマップ	アイデアを出す 広げる 関連付ける	
(3)クラゲチャート	理由付ける 関係付ける 要約する	
(4)Yチャート・Xチャート	多面的に見る 多角的に見る 焦点化する	
(5)ピラミッドチャート	焦点化する 構造化する	
(6)キャンディチャート	仮定する 予想する 推論する 見通す	
(7)バタフライチャート	広げる 変化を捉える 関連付ける 推論する	
(8)フィッシュボーン	分析する 構造化する 関連付ける	

【資料1 本学級で使用した思考ツール】

3 研究の視点と研究内容

視点1：考えを深めるための目的に応じた思考ツールの活用

視点2：思考ツールの活用による対話の充実

視点3：子供自身で思考ツールを選びとることでうまれる主体的な学び

主体的・対話的な学び

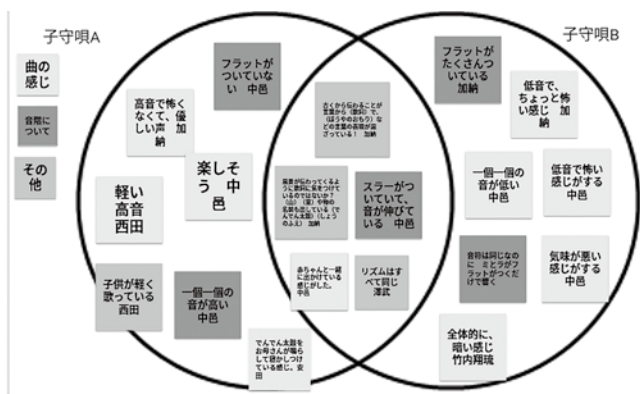
4 研究の実際

視点1: 考えを深めるための目的に応じた思考ツールの活用

思考ツールには、比較や分析、焦点化など、それぞれに思考スキルがあるため、子供たちは思考ツールを活用することで、ねらいとする思考に方向付けられる。1時間の授業の中でどのような思考をすればよいのかが明確になり、見通しをもつことができるため、子供たちは自ら学びに向かうようになる。また、教師自身も、単元のねらいにせまるためにどのような思考活動が必要になってくるのかを、思考ツールの活用を意識することで、考えることができる。

実践①音楽科: 子守唄Aと子守唄Bを比較し、2つの旋律のひびきの違いを感じ取ろう〈ベン図〉

本単元は、旋律の異なる2つの子守唄を聞き、それぞれのひびきの特徴を捉えることで日本の曲のよさを感じることをねらいとする。それぞれの曲の特徴を捉えて言語化するには、その違いを感じるのが苦手な子供やどう表現すればよいか分からず考えがもてない子供がいるのではと考えた。そこで、班で1枚のベン図をクロムブック上で配布した。曲の特徴のちがいを記入するそれぞれの円には何が入るのか、共通点である中心には何が入るのかと、子供たちは自ら相談しはじめた。このように、思考ツールの枠組みを与えるだけで、子供たちは自ら2つの曲を比較してひびきのちがいや共通点を感じ取り、自分の考えをもつことができた。



【資料2 ベン図を活用した比較】

実践②社会科: 身近な情報の生かし方を多角的にみて、そのよさや危険性を見つけよう〈バタフライチャート〉

本単元は、日常的に活用されている情報(ネットの活用)には便利さがある一方で問題点もあることを掴み、両面を理解することで、これからの情報との関わり方について考えることをねらいとしている。子供たちは、調べ学習やSNSによるやりとりの中で、普段から便利さ

を感じている。その一方で、ニュースや他教科の学びの中でネットトラブルなどの危険性も感じていると考えられる。そこで、バタフライチャートを活用し、便利さと危険性について度合い別に整理しながら記入していけるようにした。



【資料3:バタフライチャートを活用した分析】

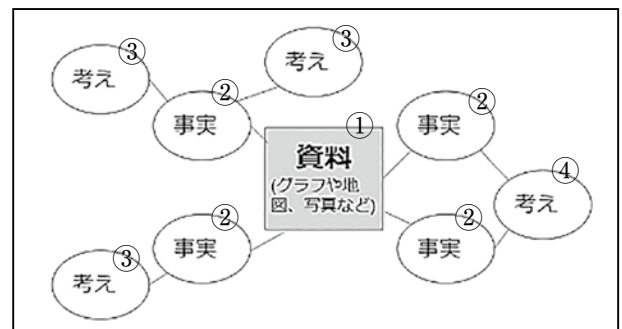
バタフライチャートを活用したことで、「情報の活用について多角的に考える」という活動が明確になり、子供たちはねらいに合った自分の考えをもつことができた。また、危険か便利かだけでなく、度合い別に整理できたことで、視覚的にも情報との関わり方について考える大きな手助けとなった。

視点2: 思考ツールの活用による対話の充実

○イメージマップを活用した資料のよみとり〜社会科「食糧生産とわたしたち」〜

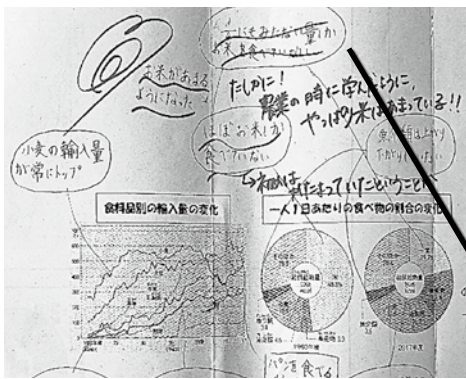
社会科の学習では、資料の読み取りを通して、ねらいに迫る活動が多い。2学期からは一貫して、思考ツールのイメージマップを活用して資料の読み取りを行った。使い方は以下の通りである。

- ① イメージマップの中心に、資料を提示する。
- ② 資料から読み取った「事実」は、中心にある資料から線で結び記入する。
- ③ 事実から生まれた「考え」は、②で記入した「事実」から線で結び記入する。
- ④ 複数の「事実」を関連づける場合は、両方向から線を結びつなげる。



【資料4 社会科でのイメージマップの活用の仕方】

資料5は、社会科「食料生産とわたしたち」の学習で、「食料品別の輸入量の変化」を示した折れ線グラフと「1人1日あたり



【資料5: 児童(W児)が記入したイメージマップ】の食べ物の割合の変化」を表した円グラフを読み取った時のW児のワークシートである。資料から読み取った「事実」と「考え」が視覚的にも明確に分けられ、自分の考えを整理することができた。

更に、イメージマップは「関連付ける」という思考スキルにも役立つ。子供たちは、イメージマップによりたくさんの「事実」を読み取っていく中で、複数の事実を関連付けて「考え」を生み出すようになった。資料4で示した④の過程の線がつながれていることから、複数の「事実」を関連付けて考えていることが分かる。

また、資料5で示したワークシートをもとに話し合った実際の授業では、以下のように発言する児童の姿が見られた。

T	この2つのグラフから、どんなことを読み取ったかな?	「事実」と「考え」を分けて、考えを述べている。
A児	アのグラフから、1960年から2017年にかけて、米以外の割合が全て増加したことが分かりました。そこから、昔に比べてお菓子とかお寿司が増えたのかなと考えました。	
B児	私は、割合が増加した食品の中でも畜産物の割合が増えていることを読み取りました。イのグラフで輸入が増えてきていることが分かるので、輸入によってお肉などを食べられるようになったのかなと思います。	2つのグラフそれぞれから読み取った「事実」を関連付けて「考え」をもっている。
C児	私もBさんと同じで、畜産物が増えていることに気付き、他にも油脂類も増えているので、そこからトンカツ等の料理が増えていると考えました。	
T	事実を細かく読み取って、考えを出しているね。	友達を読み取った「事実」に共感し、新たな「考え」を付け加えている。
D児	※賛成のハンドサインをあげる。 1960年にはなかった食べ物や料理が、今はたくさんあると考えました。	
E児	肉とか小麦が特に増えているから、そういうのをを使った新しい料理のアイデアがどんどん生まれたんだと思います。	
T	新しい料理って?	自分たちで自由にとって使用できるように、ポケットの中にワークシートが入っている。
つぶやき	(パン、うどん、タピオカとか?)	
F児	輸入量が全体的に増えていることが分かります。食生活が変化しているから、輸入量も多くなっていると思います。	

資料の読み取りをもとに話し合いを行うと、「事実」と「考え」が混在し、子供も何を発言し、どういう視点で聞けばよいのかが分からなくなる。しかし、資料5のイメージマップを活用することで、「事実」と「考え」を明確にし

て発言することができた。他にも、C児のように友達の見解を理解した上で自分の意見をつなげる子供もいた。

また、この後H児の「輸入に頼ってばかりだ」というつぶやきから、「輸入量が増えたことは、いいことか悪いことか」という話題に焦点化されていった。

G児	アのグラフを見ると、昔から今にかけて小麦の食べている量は変わらないのに、イのグラフを見ると小麦の輸入量が増えています。輸入の割合が増えたということだと思います。
H児	一輸入に頼ってばかりじゃん。よくないな。
T	輸入量が増えたのはいいことか悪いことか考えてみよう。(グループ活動)
Y児	国産の方が安心安全じゃない?輸入品は心配だな。
X児	でも外国の新しい味に出会えるよ。
Y児	お互い外国の文化分かち合えるよね。これは、よいことだ。
W児	でもこれ見て。(イのグラフを指す。)輸入品がたくさんあるといろいろなもの食べられるけど、お米を食べる量が4分の1になったよ。日本のお米が余ってしまう。

子供たちは、輸入量が増えることの利点や問題点を、自分がプリントに書き込んだことを参考にしながら考えていた。イメージマップを活用することで、授業前半の多様な考えを出し合う時間に子供が発言しやすくなるだけでなく、話し合いが焦点化された際にも、もう一度自分が書き込んだ考えを見返してさらに考えを深めることができた。

視点3: 子どもたちが自由に思考ツールを使用することである主体的な学び

1学期から、学習活動で思考ツールを使い、子供たちに思考ツールのよさを提示してきた。2学期には、子供たちが自分で思考ツールを自由に使用できる場を設けた。8種類の思考ツールのワークシートとそれらの思考スキルの説明を、教室の壁面に掲示した。子供たちは、グループでの話し合い活動や家庭での自主学習で、自ら思考ツールを必要とし、自分たちで用いて学習に取り組むようになった。



【資料6: 壁面に掲示した思考ツール】

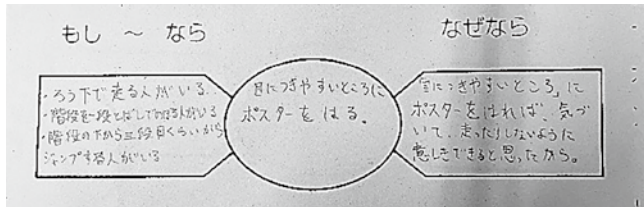
使用例①国語科「よりよい生活のために」

国語科「よりよい生活のために」の学習では、実際に自校の学校生活の中で課題を見付け、班ごとに話し合いを通してその解決策を出すという学習活動を行った。班ごとの話し合いの中で、教科書に提示された話し合いの型だけでなく、思考ツールを活用したいという

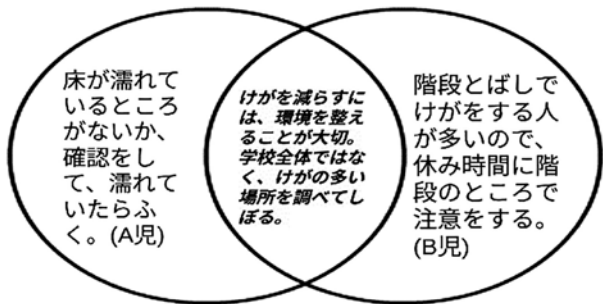
班が複数出た。「仮説をたてて解決策を出したい」という班はキャンディチャート（※資料8）、「まずは一人で解決策を考え、それぞれの意見を比較して共通点から解決策を出したい」という班はベン図（※資料9）、「解決策のアイデアを広げたい」という班はクラゲチャートなど、思考ツールが掲示された壁面を見ながら自分たちで考え、どの思考ツールを活用するのかを決めていた。どの思考ツールにどんなよさがあるかを十分に感じる段階を経て、自分たちで選びとり活用する場をつくったことで、主体的に学びに向かう姿につながった。



【資料7:壁面を見て思考ツールを選び、思考ツールを活用して話し合う子供たち】



【資料8:キャンディチャートを活用した推論】

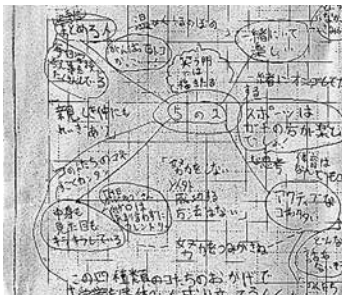


【資料9:ベン図を活用した比較】

使用例②家庭での自主学習

家庭での自主学習の際にも、子供たちは自分のしたい学びを思考ツールをもとに考えるようになった。「ベン図を使えば昔と今の農業の比較が簡単にできるな」「5の2のよいところを整理したいからイメージマップでまとめよう」

(※資料10) など、思考ツールとその思考スキルが視覚的にも明確になっていることで、それらを見ながら子供たちは、その日の自主学習ノートの内容を考えるようになった。今までは、算数の教科書のまとめや漢字練習が主流だった自主学習ノートであったが、学習内容の幅が増えた。思考ツールが主体的な学びにつながると感じた。



【資料10:学級のよさをまとめたイメージマップ】

5 実践からわかったこと

思考ツールの活用が、子供の意識の変化に現れた。

	はい		いいえ	
	5月	64%	5月	36%
自分の考えを発表するのは得意ですか	2月	75%	2月	25%
	5月	84%	5月	16%
自分の考えを書くのは得意ですか	2月	89%	2月	11%

【アンケート①:学習に関するアンケート】

質問	とても	まあまあ	あまり	全く
思考ツールは考えをもつのに役に立ちますか	77%	20%	3%	0%
思考ツールは考えを深めるのに役に立ちますか	80%	20%	0%	0%
どんなことに役立ちましたか	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい考えを出したり、関連付けたり、膨らませることが簡単にできる。 ・考えが出しやすい。 ・頭の中の考えを整理することができる。 ・たくさんの視点で考えを出すことができる。 ・友達の考えを聞くときに、思考ツールがあると理解しやすい。 ・自分でノートを作る時に、自分のわかりやすいノートをつくることができる。 			

【アンケート②:思考ツールに関するアンケート】

アンケート①から、思考ツールを活用する前の5月に比べて、思考ツールの活用を続けた2月には、考えを発表すること、考えを書くことのどちらの点においても、得意とする児童が増えたことが分かる。アンケート②からは、思考ツールが考えをもち、更にその考えを深めることに役立つと感じた児童が、9割を超えていることが分かる。

このように、思考ツールは子供たちの思考の手助けになっている。情報が可視化され思考が方向付けられることで、考えがうまれるだけでなく、その枠組みを利用して整理しながら考えを述べることができる。共通した枠組みであることから、聞き手にとっても、話し手の考えが理解しやすい。①自分の考えをもち、②分かりやすく考えを伝え、③友達の考えを理解する、という3つの行程に効果が得られ、これらは主体的で対話的な授業につながると考える。

6 終わりに

毎日の授業が、主体的で対話的な学びに近づく、子供たちは考えをもったり仲間と話し合ったり深めたりすることを楽しいと感じられるようになるだろう。自級の子供たちが、毎日の授業を楽しいと感じられるよう、教師としてできることを考えていきたい。

数学の学力向上を目指して

— 読解力が与える影響について —

高岡市立志貴野中学校 教諭 竹 嶋 和 裕

1 はじめに

全国学力量学習状況調査の調査結果から、「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある」と指摘されている。学習指導要領にあるより質の高い「深い学び」の実現のためには、記述による説明の障害になっているものは何であるかを明らかにする必要がある。授業では、説明する活動だけでなく、レポート作成にも取り組ませている。しかし、「どうすればよいか分からない生徒」が非常に多くいることが課題として分かってきた。問題解決の方法を数学的に説明することやレポート作成が苦手である背景として、そもそも問題文にある情報を読み取ることができないのではと考えるようになった。

そうして知ったのが、RST（リーディングスキルテスト）である。RSTで測ることができる読解力（基礎的・汎用的読解力）こそ、数学の文章題や記述式問題を攻略するためのキーになる力と考え、研究を進めていくことにした。

2 研究主題設定の理由

「数学の文章題が解けない生徒は、そもそも問題を正しく理解できていないのではないか」という問いの答えを模索するため、RSTで測ることができる読解力とは何か、目の前の生徒たちにはどのくらいの読解力があるのか、そして、その結果は数学の学力にどのような影響を及ぼしているのか、県中教研学力調査や計算問題を集めた高岡市計算コンテストとの相関関係から考察してみたいと考えるようになった。

また、高岡市が実践している「論理コミュニケーション」の遠隔授業や新井紀子氏（国立情報学研究所教授、同社会共有知研究センター長）が提案する読解力向上のための授業実践により読解力向上のための手立てについても、考察してみたい。

3 仮説

研究主題に迫るため、次の3つの仮説を設定した。

(1) 【仮説1】について

RSTの結果と県中教研学力調査での「思考・判

断・表現」の得点率には高い相関関係がある。

→仮説1では、RSTの結果と数学の「思考・判断・表現」との相関関係をみる。読解力と数学的な「思考・判断・表現」との相関関係が示されたなら、一見遠回りと捉えられそうだが、数学的な「思考・判断・表現」の向上のためには、どうやって読解力を付けさせるかをまず考えなければいけないということになる。RSTの結果と県中教研学力調査との相関を調べることで、今後の授業における指針を導き出したい。

(2) 【仮説2】について

基礎的・基本的な知識・技能の習得についてはRSTの結果に依らず、身に付けることができる。

→仮説2では、RSTの結果と数学的な「知識・技能」との相関関係をみる。

高岡市では例年10月に計算の技能等の習熟度を確認するための計算コンテストを行っている。高岡市計算コンテストとRSTの結果との相関関係を考えることで、数学の学力についても考察していきたい。なお、基礎的・基本的な知識・技能の習得とRSTの結果との相関について、できるだけ確かなものにするため、生徒には計算技能の習得を目的とする課題を一定期間毎日出した。プレテストや補習等も行い、高岡市計算コンテストに対する意欲や技量を高めた上で本番を迎えさせた。

(3) 【仮説3】について

RSTの実施による読解力の意識付けと「論理コミュニケーション」の授業、読解力を培う授業の実施は、文章を正確に読み取ろうとする態度や読解力の向上につながる。

→仮説3では、読解力の向上のための実践に対する効果の検証を行う。高岡市では、慶応義塾大学SFC研究所の協力により、市内中学校において「論理コミュニケーション」の遠隔授業を行っている。これらの取組は、論述力の習得を書くことを中心に行い、書く力を身に付けることで読解力の向上を図っている。全7回の授業と、新井氏が提案する読解力向上のための授業の実践により、実際に生徒の読解力や読解力に対する意識に変化があるかどうかについて調査を

行う。

今回実施するRSTは、実際のテストの一部を用いた簡易的なもので行う。全国でこれまで実施されたRSTの結果と本校の中学1年生で行った簡易的なRSTの結果を比較することで、本校の調査結果が信頼をおくことができるのかが見えてくると考える。まずはその検証を行う。

4 研究実践の内容

仮説の検証を、以下のスケジュールにて行った。

	実施内容	時期	関連仮説		
1	RSTの実施とアンケート調査I	9月中旬	①	②	③
2	計算練習開始	9月21日		②	
3	論理コミュニケーションの遠隔授業開始	10月5日			③
4	市計算コンテスト実施	10月29日		②	
5	県中教研学力調査実施	11月5日	①		
6	論理コミュニケーションの遠隔授業終了	12月9日			③
7	読解力の向上のための授業実践	12月上旬			③
8	RSTの実施とアンケート調査II	12月中旬	①	②	③

5 実践結果と考察

(1) 実施したRSTの結果の妥当性について

今回実施したRSTの内容の一部は【資料1】にある。2回の調査結果を単純比較するために、同じ問題を出題した。また、できるだけ難易度が偏らないように選び、出題した。そして、これまでの膨大な調査結果による正答率が公開されている問題をいくつか選ぶことで、本校の1年生の読解力がどの程度あるのかを把握する指標とした。

【資料1】

8
仏教は東南アジア・東アジアに、キリスト教はヨーロッパ・南北アメリカ・オセアニアに、イスラム教は北アフリカ・西アジア・中央アジア・東南アジアにおもに広がっている。

(1点)
この文章において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適切なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

オセアニアに広がっているのは()である。

正答率

第1回(9/14~16)	70.3%
第2回(12/23)	77.7%
参考値	62.7%

※参考値は、
「プレジデントファミリー2021冬」
プレジデント社
小6～社会人のデータ分析結果

ヒンドゥー教
 キリスト教
 イスラム教
 仏教

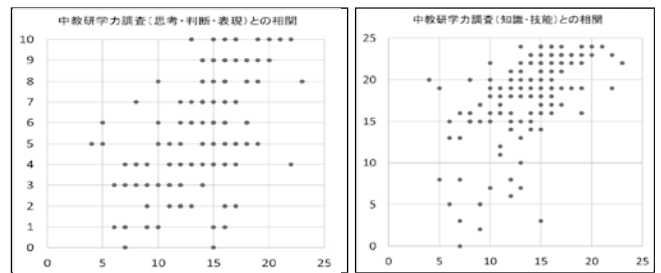
今回の調査では、全国規模の調査結果と比較できる設問すべてにおいて、本校生徒の正答率が上回った。比較できる問題が多くはないのでどれくらいの信頼性がおけるか疑問は残るが、本校生徒の読解力はある程度高いとして考察を進めてもよいのではないかと結論に至った。また、分野ごとの正答率でも、多くの分野において本校の生徒の結果が良かった。以上のことから、今回のRSTの結果はある程度信頼できるものとし、仮説についての検証を進めることとした。

(2) 仮説の検証

★仮説1

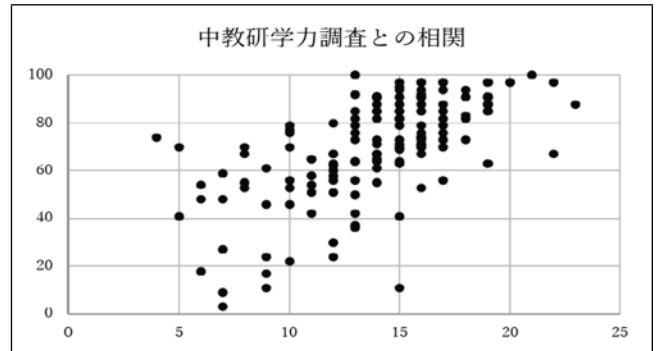
この検証を行うにあたり、RSTの結果と①県中教研学力調査(思考・判断・表現)との相関関係及び、②県中教研学力調査(知識・技能)との相関関係を調べることにした。【資料2】は、それぞれの相関関係を示す散布図と相関係数である。

【資料2】RSTと県中教研学力調査との相関について



$r=0.54$ ($p<0.00001$)

$r=0.58$ ($p<0.00001$)



$r=0.61$ ($p<0.00001$)

※縦軸は中教研学力調査結果、ただし、上の2つは正答数で下は点数。横軸はRST結果(24点満点)

※相関係数は小数第3位で四捨五入

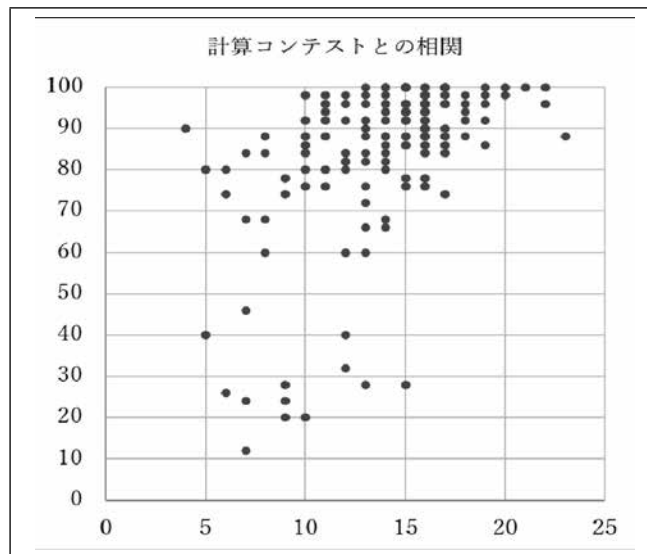
この結果から、RSTの結果には県中教研学力調査での「思考・判断・表現」だけでなく、「知識・技能」に対しても中程度の相関があることが分かった。また、「思考・判断・表現」においてより強い相関があると考えたが、「知識・技能」の方が若干相関係数が高い結果となった。観点別の相関では、それぞれの正答数との相関を調べたが、RSTと県中教研学力調査の点数(100点満点)との相関係数を調べたところ、

$r=0.61$ となり、これらの相関係数の中で一番高い結果となった。これは、RSTで測ることができる読解力が数学の学力調査テストの結果にも影響を与えていることを示している。

一見関係ないと思われる数学的な「知識・技能」にも読解力と中程度の相関があるのは意外であった。また、今回の調査は中学1年生を対象に行ったが、中学3年生を対象にすることで、読解力が高校入試に与える影響についても考察できると感じた。

★仮説2

【資料3】RSTと高岡市計算コンテスト結果との相関



$r=0.52$ ($p<0.00001$)

※縦軸は高岡市計算コンテストの結果（100点満点）、横軸はRSTの結果（24点満点）

【資料3】から、数値的には中程度の正の相関があることが分かる。中教研学力調査との相関には及ばないものの、0.5を超える相関係数であったことは意外であった。ただし、散点図を見ると、RST結果が最下位だった生徒が市計算コンテストでは90点とっていた。更に調べると、この生徒は計算コンテストのプレテスト結果が悪く、再テストの対象になっていた。同じ内容のテストを繰り返し実施し、この生徒自身努力することで計算では飛躍的に点数を伸ばすことができたが、現在学習している平面図形では大変苦勞をしている実態がある。計算の技能に限定すると、必ずしもRSTの結果との相関が見られるとは断言できなかったが、計算問題だけに限定しない、広い意味での数学的な「知識・技能」と読解力とは、ある程度の相関が見られると言ってもよいのではないかと思う。

以上のことから、読解力と数学の学力には相関が見られることや数学的な「知識・技能」と「思考・判断・表現」の能力はそれぞれ独立したものではなく、相互に関係し合っていることが示された。

★仮説3

今回RSTを実施するにあたり、普段の新聞や読書の習慣等を問う様々なアンケートを同時に行い、その相関関係を調べたが、あまり相関関係を示すようなデータが得られなかった。この結果は、県中教研学力調査や高岡市計算コンテストと中程度の正の相関を示す読解力が、読書や新聞を読むことだけでは向上しないということを示している。では、どのような取組を行えばよいか。

2回目のRSTでは、前回より平均4ポイント正答率が上昇した。その間には「論理コミュニケーション」の授業を計7回、そして、数学の授業や定期考査では、文章で正確に表現するよう求める工夫を行ってきた。また、単元ごとにレポートを作成することも生徒に求めた。「あなたは、論理コミュニケーションの授業を通じて、根拠をもとに文章を構成する力や、文章を正確に読み取ろうとする力が高まったと思いますか?」という設問では、約85%の生徒が肯定的な回答をしている。この質問自体、RSTの結果と弱い正の相関しか見られなかったため断言できないが、分かりやすく、正確に伝えようとする態度が、文章を正しく読み取ろうとする姿勢につながり、正答率を上昇させた可能性がある。なお、第2回RSTの直前に2クラスにおいて新井氏が提唱する読解力向上のための授業を行ったが、授業後「論理コミュニケーションや今日のような授業を受けることで、文章で正確に表現する力が付くと思いますか?」とのアンケート結果では、90%以上の生徒が肯定的な回答をした。そして、この2クラスではRSTの正答率の上昇率がそれ以外のクラスより大きかった。論理コミュニケーションや新井氏が提唱する授業が学力に影響する読解力向上に効果的であったと言える。

(3) 読解力を培う授業について

読解力を培うために、文章で正確に表現するための授業を実践した。

【課題】正しく伝えよう

目標：無駄なく正確に文章で伝える

① 黒玉3つと白玉3つを横1列に並べよ

→ ●●●○○○、○○○●●●、○●●●●● 等

② 黒玉3つと白玉3つを交互に横1列に並べよ

→ ○●○●○●、●○●○●○

③ 答えが「○●○●○●」にただ1つに決まるように指示しよう

※矢印は、実際の生徒の回答例。③における回答例は、後で触れる。

この授業案は、新井氏の著書にあるもの(*2)で、単文で表現された事実を全員がきちんと理解するところから始め、最後には文章で正確に表現することを目指し、さらに他者の書いた文章が正しいかどうか、無駄がないかどうかを考察することで「同義文判定」や「推論」の能力を培うことを目標としている。この授業を行って驚いたのは、③における生徒の回答だ。意図的指名により3名の生徒に前に出てきて黒板に書いてもらった。

- ・ Aさん「黒玉3つと白玉3つを白玉から交互に横1列に並べる」
- ・ Bさん「白玉3つと黒玉3つを横1列に並べる時、白玉を奇数番目、黒玉を偶数番目に並べる」

ほとんどの生徒はAさんと同様の内容であった。そこでBさんを指名し、黒板に書いてもらったところ、何人かの生徒が「すごい」と声をあげていた。理由も含めてこの回答について全員で協議していると、「交互」という言葉の定義が不十分であったことが分かった。「交互」とは、「1つおき、互い違い、代わる代わる」ということであると事前に補足してはいたが、一部の生徒には分かりにくかったようだ。それらの生徒にとっては、Bさんの奇数番目と偶数番目という表現によって、「交互」という定義が明確になった。このことを通じ、改めて言葉の定義や事実を丁寧におさえて授業していく大切さを感じた。教師の当たり前が生徒にとって当たり前であるかどうかは分からない。だからこそ、今回のように表現させ、全員で検証し、納得していく作業が必要である。この授業で特筆したいのは、次に挙げるCさんの回答だ。

- ・ Cさん「黒玉3つと白玉3つを白玉を左端にして、交互に横1列に並べる」

念のため理由を尋ねると、玉の並べ方は左からと決まっているわけではないので、左端からという言葉が必要なのではとのことであった。この回答には、「あ〜」、「そうか」、「すごい」などの声が教室のあちこちから聞こえてきた。私自身この回答は予期していなかったものであったので、生徒とともに正確に文章に表現することの大切さを感じるようになった。文章を正確に読み取ったり、表現したりすることの大切さを感じたり、実践したりするためには特別な授業を行うことも必要かも知れないが、普段の授

業から意識する必要があることを感じた。

6 成果と課題

今回の教育実践からRSTの結果と数学の学力との相関は間違いなくあることが分かった。しかしながら、一部の生徒にとっては文章の正確な読み取りよりも教科書の問題やワークで問題量をこなすことによって経験的に点数がとれること（これにより向上するのは計算コンテストに代表される基本的な計算の技能）を学習しているため、文章の正確な読み取りの必要性については意識が薄いのかも知れない。これでは、一向に数学的に考える資質・能力を育成することはできない。

今回分かったのは、一見遠回りと思えられそうだが、数学的な「思考・判断・表現」の向上のためには、数学の授業の中でどのように読解力を付けさせるかをまず考えなければいけないということだ。5

(3)の実践では、学習で得られる力とは、教えられることで身に付くのではなく、間違いも含め、表現をすることで身に付く力であると改めて認識した。今後の授業では、以上の点を意識し、言葉の定義を丁寧に行うことから始めていきたい。例えば、数と式の領域では、偶数や約数といった数学特有の言葉について、別の表現で置き換えさせることで、その言葉の理解がより一層深まるようにする。図形の領域では、二等辺三角形や正三角形等の作図を通して、それらの違いや共通点に注目させ、その図形の定義や定理をおさえる。そして、定義と定理の違いについても作図という表現の中でしっかりと理解させていきたい。

7 おわりに

数学における確かな学力の育成のため、上記のように普段の授業から言葉の定義や文章から読み取れる事実を丁寧におさえていくだけでなく、しっかりと表現させ、また、その検証を他者の視点も交えることで確かなものにし、正確に表現することの大切さや学習内容の確かな理解につなげたい。今回学んだRSの視点を持ち、目の前の生徒たちのRSの向上、数学の学力の向上に一層努めていきたい。

(*1) 出典「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」

東洋経済新報社（新井紀子著）

(*2) 出典「AI に負けない子どもを育てる」

東洋経済新報社（新井紀子著）

コロナ禍における、子供たちの健康づくりや体力づくりはどうあればよいか

— 田中健康運動(発育・発達運動)を通して —

滑川市立田中小学校 校長 玉 木 彰 治

1 はじめに

本校は、児童数210名の小規模な学校である。校舎は新しく、廊下も広い。グラウンドも改修され、広々と運動ができる環境にある。しかし、一昨年までの新体力テストの結果からは、特に秀でる運動種目はなく、昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響から、テスト自体を行わなかった経緯がある。

子供たちは、明るく素直でのびのびと学校生活を送ってはいるが、新型コロナウイルス感染症が流行してからは、運動することに億病になっている児童や学校生活の形態の変化から、運動自体に積極的に関わろうとしない児童が見受けられるようになった。また、担任教諭に子供たちの休憩時間の観察をしてもらったところ、25分ある大休憩の時間に「何かしら体を動かす児童は1/3」、「誘ったら運動をする児童は1/3」、「運動を嫌がる児童は1/3」となることが分かった。この傾向は、教職員にも当てはまり、子供と一緒に体を動かそうとする教職員の割合も1/3以下となっている。

そこで、令和3年度の学校教育目標、「よりよい生活を目指して、自ら学び、ともに高めあい、たくましく生きる子供の育成」の具現化に向け、学校運営方針の一つに「健康づくり・体力づくりの推進」を掲げ、以下の目標を立てた。

- 心とからだの健康状態や体力の状態を調べ、個の課題を設定する
- 健康な体とするために生活習慣を整える
- 環境や場を考えて運動することができる主体性を養う
- あきらめずに続けることができるように、仲間を励ます言動ができるようにする

また、本校の教職員は、20代・30代の若手の教員とベテランの教員(50代)と2極化している。まずは、教職員自身が健康づくりに取り組むことから進め、新たな取り組みをすることで出てくる意見を共有し、共に学び合うことを通して、教職員の仲間意識を醸成し、連携することの大切さを再確認できるように、本研究を進めた。

2 研究の視点と研究内容

【視点1】教職員が子供の健康づくりや体力づくりへの意識を高めることができる研修体制の構築

【視点2】子供たちが健康づくりや体力づくりへの意識を高めて行う「田中健康運動」の取り組み

【視点3】教職員がともに学びあい、教職員の連携を活性化する取り組み

3 研究の実際

(1) 【視点1】教職員が子供の健康づくりや体力づくりへの意識を高めることができる研修体制の構築

① 目指す児童の共通理解

本校には、平成4年度から「目指す児童」があり、田中小学校の「た・な・か」に合わせ活動している。

- ・ たくましく行動する子ども(体) 自立
- ・ なかよく行動する子ども(徳) 共生
- ・ かんがえて行動する子ども(知) 自律

子供たちの健康づくりや体力づくりを行うためには、まずは、教職員が目指す児童を具体的に共通理解することが必要であり、知や徳の領域を支え、安定した活動とするためにも、成長期である子供たちに「体」の領域を具体化して指導していくことが必要である。

そこで、子供たちの学校生活の様子を「健康づくりや体力づくり」での視点で意識して観察すると、これまで教職員が何気なく見過ごし、気付かなかった下記のような点が出てきた。

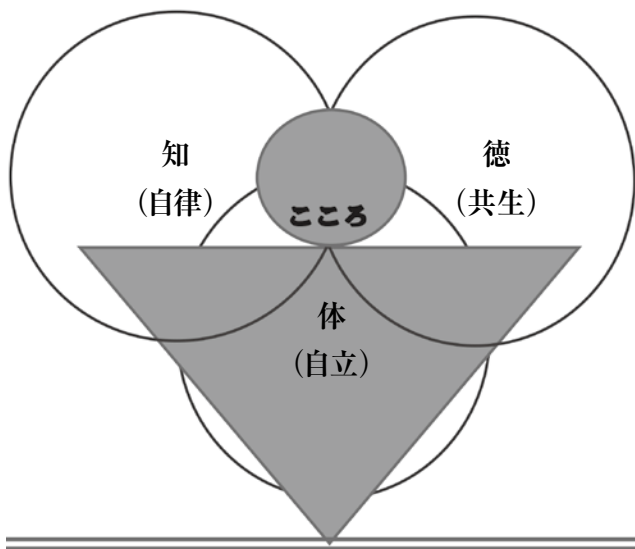
- ・ 腰を下ろして靴を履く・脱いでいる
- ・ 座位姿勢で腰の位置が前に出ている
- ・ 背筋が伸びず、机に肘を着く
- ・ 休憩時間内に運動しない児童と誘われないと運動しない児童の割合が 2/3
- ・ 給食の摂取量が低くなっている
- ・ 雑巾がけの足運びが悪い

コロナ禍となり、学校生活や家庭生活の様式も変化し、これまでできていたことができないようになっていたり、教職員が意識しないと「コロナ禍」という少しの距離感で見過ごしてしまっている「子供の変化」があることが分かった。また、現在の環境では、仕方がないと諦めてしまうことが多いことも、話し合いで分かった。

②「健康づくり・体づくり」への意識改革

田中っ子の「健康づくり・体力づくりモデル」を提示し、教職員の考えを整理

田中っ子の「健康づくり・体力づくり」モデル



児童は不安定な心身の状態であることを理解する

- ・ 成長期であること
- ・ 家庭環境がそれぞれ違うこと
- ・ コロナ禍であること
- ・ 生活環境が乱れてきていること

子供たちは、地にしっかり足を着け、バランスよく立つことで、知性や徳性も安定して生まれ、心が豊かになっていく

教職員は、できていないことを直ぐに指導するのではなく、「できない原因がある」ことを常に意識して子供たちの様子を捉えることを意識する。

教職員のからは、本校の子供たちは、

- ・ 自分を支える力が不足しているのではないか
(椅子の座りで腰が前が出る・肘を着く)
- ・ 重心がどこにあるか分からないのではないか
(不安定な動き)
- ・ うまく体を使えていないようである
(運動に苦手意識)
- ・ 体を動かさないことで食欲がでてこない

という意見が出てきた。そこで、この様子が乳児や高齢者の状況に似ていることから、介護や乳幼児期の発育・発達に詳しい前坂宣明氏（富山医療福祉専門学校介護福祉学科専任教員）を招き、教職員で研修会をもった。（5回）

- ・ 乳児が立ち、歩くまでの姿勢が、一番バランスが取れていること（姿勢・重心）
- ・ 子供は、無意識のうちに得た乳児の頃のプログラムを「脳」は覚えている。それを呼び起こして体を整える運動をすることが大切であること。
- ・ 乳児が泣き叫ぶことで腹圧が生まれ、体が動くようになること
- ・ 寝返りやうつ伏せ・四つ這いの期間が背筋の周りの筋力を作り、重い頭をしっかりと支えて立てるようになること

講師の話をもとに、児童に照らし合わせて考えることで、「今やるべきこと」や「やれること」の見通しがもつことができた。また、教職員が「健康づくり・体力づくりモデル」を常に意識することで「不安定な子供たち」を見て話す内容に変化が生まれ、教職員の意識改革につながった。

(2) 【視点2】子供たちが、自己の身体の状態を知り、体や健康への意識を高め「田中健康運動」を実践することで学校生活や家庭生活への効果を促す

①田中っ子 心とからだのアンケート

コロナ禍で学校生活や家庭生活が変容し、子供たちがどのような状況になっているかを知るために、アンケートを行った。（4～6年生）

【心の面】 そう思う+少し思う

- ・ 怒りっぽくなった 49%
- ・ イライラするようになった 52%
- ・ 家で注意されることが多くなった 37%
- ・ さみしいと感じる時がある 35%
- ・ 今楽しいと思えている 83%

【学校生活】 そう思う+少し思う

- ・学校に行くのが楽しみである 87%
- ・自分の体力は落ちている 46%
- ・学校で汗をかかなくなった 36%
- ・体を動かすことが減った 42%
- ・体を動かすことが嫌いになった 15%



アンケートを行った結果、子供たちは、自分の変化をある程度感じているようである。心の面では、ストレスを発散する場所がなくなっているように感じる。また、学校では体を動かす機会も減り、体を動かすこと自体を嫌いになり始めている子がいる。子供たちは予想以上に現状を把握しており、自分の心や体を見つめてくれている。現在の状況であっても、学校に行くことが楽しいと思えている児童や体を動かすことが嫌いになった児童が少なかったのが幸いであった。

②田中っ子 体の状況調査

4年生から6年生までの抽出児童22名を検査した。

【検査項目】

- ・片足立ち 20秒
- ・閉眼片足立ち 20秒
- ・その場歩行閉眼 30秒
- ・風船ふくらまし
- ・閉脚抱え込み姿勢
- ・20m歩行 (ビデオ撮影)
- ・閉眼20m歩行 (ビデオ撮影)
- ・起立姿勢 前 (写真撮影)
- ・座位姿勢 横 (写真撮影)
- ※重心位置、バランス、柔軟性
姿勢保持状態、腹圧を測定



【できない児童の割合】

- ・風船ふくらまし 18%
- ・閉脚抱えこみ姿勢 13%
- ・閉眼片足立ち 36%
- ・その場閉眼歩行のずれ **平均51cm**

田中健康運動を取り入れる前の結果では、姿勢が悪く、重心がとれていない児童が多く出た。

③田中健康運動の実践 (発育・発達運動)

乳幼児期の発育・発達運動を参考に、田中健康運動を作成した。(約10分)



【種目内容】

- ・横臥位運動 (仰向けでおなかふくらまし・泣く動作)
- ・側臥位運動 (寝返り)
- ・伏臥位運動 (うつ伏せ・飛行機姿勢)
- ・四つ這い運動 (ワニ歩き)
- ・座位歩行 (お尻歩き)
- ・高這い歩行 (チーター歩き)
- ・膝立ち→立位→歩行

これらは赤ちゃんの「出生から立つ・歩く」までのプロセスを運動に置き換え作成したものである。

この運動の特徴は

- ・小スペースでできること
- ・簡単な動作であることである。

田中健康運動は、体育の準備運動として全校で取り組んだ。初めは、股関節の硬さや体幹の弱さが顕著で、体のバランスがとれずに転倒する児童が多かった。

学校では、週に3回休憩時間に行い、チャレンジ3015と合わせて集計した。冬季休業中には、家庭でも行い、タブレットに記録した。また、子供の健康づくりや体力づくりには、保護者の協力も必要であることから、育友会（PTA）に、親学び講座として代表役員に講義受講と実際の運動をしてもらい、その様子を動画撮影でホームページにアップした。他の保護者には、動画を観て子供と一緒にいき、アンケートを記入していただいた。

【アンケート結果】 よかった+まあまあよかった

・動画を観て、やってみてよかった 87%

【感想】

- ・最近、子供の姿勢が悪いのが気になっていた
- ・簡単な運動なので、長続きしそう
- ・子供に励ましてもらえてうれしかった
- ・姿勢や呼吸法が論理的に理解できてよかった
- ・子供が寝る前に自然とやっている

など、どの保護者も高評価であった。

(3) 【視点3】教職員がともに学びあうことで、教職員の連携の活性化

今年度は、授業研究やスキルアップ研修を一同に学び合うことはあっても、子供たちが実際に行うプログラムを教職員が体験して学び合うことはなかった。コロナ禍となり、教職員間もマスク越しのコミュニケーションとなり、これまでとは違う集団形成の環境にある。また、懇親を深める場も少なくなっている。特に若い教職員にとっては、繋がりを求める機会が少ないため、自ら積極的に関わりを求めようとするのが少なくなっている。教職員自らの健康と直結するこの運動は、非常に盛り上がり、自然と教え合いや学び合いが生まれ、笑顔があふれていた。また、子供の現状を一番に見ている教職員だからこそ、その必要性が十分に感じ取れ、指導に生かしやすかった。



4 研究のまとめ

(1) 成果

子供の成果は、検査によって実証された。約3か月間の田中健康運動の実施による検査の比較である。

●達成できなかった児童の割合の変化と達成率

検査項目	運動前	⇒	3か月後	達成率
風船ふくらまし	18%	⇒	9%	91%
閉脚抱えこみ姿勢	13%	⇒	0%	100%
閉眼片足立ち	36%	⇒	5%	95%
その場閉眼歩行	51cm	⇒	36cm	*15cm

※歩行の「ずれ」が平均15cm修正された

●立位姿勢 (3か月後)



●座位姿勢 (3か月後)



①コロナ禍の健康づくり・体力づくり

姿勢が悪いことを直接指導するのではなく、姿勢保持ができない状態であることを認知し、脳内にプログラミングされている発育・発達過程の動作を運動化していくことは、重心位置の矯正や姿勢保持の負担軽減につながり、運動効果が表れることが分かった。また、教室での座位姿勢の適正化により、集中力の持続にも効果が期待できる。

②教職員の意識改革によって

誰もが経験済みのプログラムであるため、行いやすく発展形も考えやすい。子供たちと共に学び一緒に進化できることが、教職員の学びあいにつながり、コミュニケーションの向上につながった。教職員自身が健康づくりや体力づくりへの意識を変えることで、子供を見る目も変わり、笑顔が生まれ、子供たちの笑顔にもつながった。

③課題

子供たちは、成長期にあるため、走ることだけでも心肺機能が向上し、筋力も付く。田中健康運動は、幼い運動のようで敬遠されそうであるが、体幹を整え、正しい姿勢を作るためにも、焦らず丁寧にやり続けることが大切である。今後は、現在の「静的な運動」から「進化した動的な運動」の「田中健康運動2」の作成をし、更なる健康づくり・体力づくりを目指したい。

子供たちの非認知能力をはぐくむ学校経営

— 非認知能力をはぐくむ教育を進めるための評価の改善と協働体制づくり —

富山市立保内小学校 校長 長谷川 泰 久

1 はじめに

本校は平成29年度からコミュニティ・スクールとなり、地域とともに、「明日も来なくなる学校」を目指してきた。特徴の一つとして、「保内小学校グランドデザイン」に学校教育目標や目指す子供像の達成に向けて育てたい資質や能力を「元気全開ダイヤモンド(6つの力)」として掲げていることが挙げられる。今年度で5年目を迎えた。

近年、自分の内面にかかわる「非認知能力」を育む教育が改めて注目されている。本校では「学力向上」を喫緊の課題としているが、超加速度的に変化する時代を生き抜く「確かな学力」を身に付けるためには、知識・技能に代表されるような「認知能力」だけでなく、意欲や主体性、自制心といった「非認知能力」を育てることが、課題解決のために重要だと考えている。

そこで、非認知能力をはぐくむ学校経営の在り方を考えるために本研究に取り組むことにした。

2 研究の方向性及び研究の視点

これは、着任初年度の「元気全開ダイヤモンド」(6つの資質と能力)である。

令和2年度 「元気全開ダイヤモンド2020」

- ① 目当てを立て達成する力
- ② 進んで学習に取り組む力
- ③ 自分の考えを伝える力
- ④ 身の回りの環境を整える力
- ⑤ 自ら運動に親しむ力
- ⑥ 望ましい生活習慣を身に付けていく力

この6つの力は、

- ・決められた物事に真面目に取り組む良さを生かしつつ、もっと積極性や主体性を育てたい。
- ・より良い自分、より望ましい習慣の定着に自ら取り組もうとする態度を育てたい。

という教職員の願いや児童の実態等から決めたものである。

令和2年度は、図1のように学校のグランドデザインを示し、学校経営に取り組んだ。令和2年度末の「元

気全開ダイヤモンド」に掲げた資質・能力の達成率は、①89% ②86% ③90% ④90% ⑤89% ⑥85%となり数値目標(達成率85%以上)を達成した。

達成率は、年間数回行う「元気全開がんばり週間」で子供が自己評価した結果を数値化して出している。結果の数値は申し分なく高い値なのだが、釈然としない思いが残っていた。



<図1>

- ・調査等で捉えた達成率(自己評価)は、実態に近い値を表しているのだろうか。子供たちは自分自身の力が伸びたと実感できているのだろうか。
- ・学校教育目標、元気全開ダイヤモンド等の目標達成を教職員は本気で目指しているのだろうか。達成率や評価は、教育活動のPDCAサイクルに生かされているのだろうか。

こうした思いから、令和3年度は、「学校教育目標の達成を教職員だけでなく、学校全体で心一つにして目指したい」「元気全開ダイヤモンドみがきをもっと子供たちのための取組にしたい」という願いが一層強くなった。

そこで、「元気全開ダイヤモンドを形づくる6つの力」が付いたと自信をもって言うことができるような、子供たちの非認知能力をはぐくむ学校経営を目指し、次の視点で経営改善に努めることにした。

【視点1】

教育目標等の達成が、教職員・児童の「自分事」になるようにする。

【視点2】

「子供発」を大切に、協働して実現させる。

3 研究の実際と考察

(1) 【視点1】

教育目標等の達成が、教職員・児童の「自分事」になるようにする

「進んで取り組む」「自他を大切にする」といった非認知能力は、自分の内面に関わる力である。誰かが付けさせるという表現よりも、自分で伸ばしていくものという捉え方をし、まず、教職員と子供たちが、伸ばしたい力を「意識する」ことが重要だと考えた。

①「元気全開ダイヤモンド」等の目標の共有

本校で目標とされていることはすべて子供たちに育てたい力、実現したい姿ではあったが、まず、教職員で話し合い、「目指す子供像」と「元気全開ダイヤモンド」を「知徳体」のバランスのとれた目標になるように整理した。

令和3年度 「元気全開ダイヤモンド2021」

- ①進んで学習に取り組む力 … 知
- ②互いに学びを深め合う力 … 知
- ③自他を大切にする力 … 徳
- ④より良い学級・学校づくりに参画する力…徳
- ⑤運動に親しむ力 … 体
- ⑥より良い生活習慣を身に付ける力 …体

次に、掲げた「元気全開ダイヤモンド」の力を発揮している子供の姿を教職員で話し合いながら、具体的に書き出した。そして、1～6年生の成長過程を考えて整理した。この話し合いを通して、次のように、学校として考える「①進んで学習に取り組む」力が明らかになっていった。

- 進んで学習に取り組むとは・・・、
- ・自ら学習の準備をする。時間を見て動く。
 - ・課題に興味を持って取り組んでいる。
 - ・自分の苦手を把握し克服しようと取り組む。
 - ・自分で計画を立て、家庭学習や自主学習に取り組んでいる。 など

こうして教職員は、「元気全開ダイヤモンドみがき」の先にある子供の姿を共有することができた。

②児童との目標の共有

学校の元気全開ダイヤモンドをもとにして「学級の元気全開ダイヤモンド」を作成した。例えば「③自他を大切にする力」を1年生は「自分や友達の良いとこ

ろを見付ける」と表現し、さらに、1学期は「友達から言われて嬉しかった言葉を紹介しよう」、2学期は「友達の良いところをたくさん見付けよう」と、行動指標にして示した。

この「学級のダイヤモンド」は教室に常時掲示すると共に学級経営案に位置付け、学校運営協議会や学級懇談会でも公表した。

このように、発達段階や学級の実態に応じた元気全開ダイヤモンドを作成したことで、「ダイヤモンド」は、学校だけでなく学級としても目指す目標として、児童と共有することができた。

③評価を「自分のこと」にするためのカードの改善

元気全開ダイヤモンドをみながく強化週間として「がんばり週間」を設け、子供たちは自分の取組を図2のようなチェックカードで自己評価(○×)していた。縦欄には学校の元気全開ダイヤモンド①～⑥が書かれている。

2月 がんばりしゅうかん チェックひょう		1年 ねえ							
※ できた○ 残念なできごと△ できなかった×		14日(月)	15日(火)	16日(水)	17日(木)	18日(金)	21日(月)	22日(火)	23日(水)
1	自分の学習の準備を(しゆんじゆ) しっかりする。								
2	自分の話を最後まで聞く。								
3	自分や他人の話を最後まで聞く。								
4	より良い学級・学校づくりに参画する。								
5	運動に親しむ。								
6	より良い生活習慣を身に付ける。								

<図2>

しかし、「評価の根拠が曖昧である」こと、「子供が何をがんばれば良いのか、意識できないままに取り組んでいる」という反省からチェックカードを見直すことにした。

今年度は、子供たちが具体的な評価基準をもって振り返りができるように、例えば、1年生では、学校のダイヤモンド「②互いに学びを深め合う」の欄に、学級のダイヤモンド「②友達の話を最後まで聞く」という具体的なポイント(行動基準)を示し、「学級毎」のチェックカードに作り替えた。(下表)

②	互いに学びを深め合う【学校】
	(友だちの話をさいごまで聞く)【学級】

この形式をとれば、さらに詳しく子供一人一人が自分なりの振り返りポイント(下表<>)を書き入れることも可能になるため、個に応じた評価カードにすることもできるようになった。

	互いに学びを深め合う【学校】
②	(友だちの話をさいごまで聞く)【学級】
	<話している友だちのほうを見る>【自分】

こういった改善により、子供は、「今、何をがんばろうとしている自分なのか」を確認でき、また、具体的な行動や気持ちを根拠にして自己評価できるようになった。カードに示された○×を点数化して求めていた達成率は、より子供の思いや実態に近いものとなり、「自分のこと」を表す数字になったと考えている。

目標の達成を「自分事」にすることを目指して改善を加えた令和3年度12月時点での「元気全開ダイヤモンド2021」の達成率は、①90% ②86% ③86% ④89% ⑤80% ⑥79%となった。今年度の数値目標87%にはまだ達していないが、「①進んで学習に取り組む」「④より良い学級・学校づくりに参画する」は、高い達成率を示した。

また、昨年度と同じ項目で比較すると、

「進んで学習に取り組む力」	86%→90%
「運動に親しむ力」	89%→80%
「生活習慣を身に付ける」	85%→79%

となった。運動と生活習慣の数値は下がったが、学校評価アンケート(保護者・教職員)との差はむしろ縮まったことから、子供たちの自己評価が、実態により近いものとなったと捉えている。

今年度、非認知能力を育てることを目指して取り組み、改めて分かったのは、子供たちの能力(認知能力も非認知能力も)を育てるということは、「意識する」こと「個に応じている」ことがとても重要だということである。元気全開ががんばり週間を進める際に最も重要視しなければならなかったのは、教師が子供一人一人と向き合うことだった。その子がどのような思いや願いをもって、目当てを立て、自分自身を評価したのかを聞き、見取り、見届けることを意識したことで、「印」だけでは分からないことを知ることができた。

また、機を逃さずにその子のがんばりを励まし、賞賛することができた。教師のしっかりとした見届けは、子供の達成感や自信につながっている。教師が子供に育てたい力を意識し、評価の在り方を問い続けながら子供と向き合う努力をしたことで、元気全開ダイヤモンドみがきは、教職員と児童双方にとっての「自分事」になったと感じている。達成率という数値は以前より意味をもつ数字となり、教育活動の改善(PDCAサイクル)に機能するようになった。

(2) 【視点2】

「子供発」を大切に、協働して実現させる

令和2年6月。新型コロナウイルス感染症による臨時休業が明けた際、「コロナに負けない学校になる」「コロナに負けずに自分をみがく」を合い言葉とした。特に学校行事に関しては、「子供たちの思いや願いを、できる工夫をし、できる限り実現させたい」というのが教職員の一致した思いであった。

コロナ禍で迎えた令和3年度は、次のような意識をもって教育活動を進めていくことにした。

- ・「子供発」を大切にする。
- ・教職員が「協働」し子供たちを後押しする。

①「子供発」を大切にしたい委員会活動

子供たちは、これまでの4年間継続して元気全開ダイヤモンドみがきに取り組んでおり、達成率アップを目指した委員会活動も行われていた。しかし、特別活動(児童会活動)のねらいは「自発的、自治的な活動で学校生活を楽しく豊かにする」ことである。子供たちが、非認知能力とされる様々な力を発揮し、主体的に活動できる場として大切にしたいと考え、令和3年度は、委員会活動における教師の働きかけ方を次のように改めた。

- ・ **2年度** : 教師から、委員会が担当する「力(ダイヤモンドの番号)」が割り当てられる。子供たちは、その力を付けるには、どんな活動をすればよいかを考える。始まりは教師。
- ・ **3年度** : 子供たちが、より良い学校づくりを目指してやりたい委員会活動を考える。教師は、サポートに徹しながら、「この活動をすれば(したこと)、元気全開ダイヤモンドの○○の力や△△の力を伸ばすことにつながるね」と、活動を価値付ける。始まりは子供。

このように教師のスタンスを変え、主体的な活動が展開するように意識して活動を支えた。

②教職員が子供たちと協働して進める教育活動

委員会活動があった日には必ず「経営部会」をもち6つの委員会の活動状況等を把握することにした。この部会をもったことにより、委員会活動や縦割り活動、学校行事等は、担当者や高学年担任だけでなく、教職員全員で進める教育活動だという意識が強まった。子供たちと共に学校づくりに参画するという協



働意意識を教職員がもてたことで、学校には「全校みんな」で物事に取り組んでいこうという雰囲気が広まった。教師と児童で協働体制がとれたこの成果は、元気全開ダイヤモンド「④より良い学級・学校づくりに参画する」の達成率89%に反映されたと、実感している。

最後に、先述した「元気全開ダイヤモンド」の「①進んで学習に取り組む力」に達成率が、86%から90%に上がった要因の一つと考えている委員会活動を紹介したい。子供たち発で巻き起こった「自学（自主学习）ブーム」である。

9月末の「元気全開がんばり週間」に合わせて、元気全開委員会が「秋の自学スペシャルウィーク」と称して、「自主学习をするとこんないいことがあるよ集会（写真左）」と、自学ニュースの放送（写真右）を行った。



この取組は子供たちの「宿題は嫌いだけど自学は面白い」という思いが、ダイヤモンドの「①進んで学習に取り組む」力みがきにつながった活動である。集会や放送では、「自主学习をすると授業が分かるようになる」「苦手教科が好きになれる」などの、子供たちが考える自学の良さや、「教科書の補充問題を使う」「ノートにキャラクターを登場させて授業のポイントを吹き出しに書いてまとめる」などの、自学の取組例や楽しく行う工夫等が紹介された。

教職員もこの流れに乗り、「自学お薦めテーマボード」の提示や「自学ノートの紹介」、「宿題選択制の導入」等、授業や家庭学習に新しい試みを取り入れ、積極的な声掛けや丁寧な見届けを行った。アンケート調査では、この活動をきっかけにして、「宿題以外の自学に毎日取り組む」児童が53名（170名中）から90名に増え、「全く自学をしない」児童は36名から16名に減った。

元気全開委員会からの働きかけが単なるイベントで終わらなかったのは、子供たちの「やってみよう」という意欲を支え、継続へとつないだ教師の意欲付けや見届けの成果もあったと考えている。自主学习を行うことが習慣化したり、授業への積極性が出てきたりした児童が学年を問わず増えた。「①進んで学習に取り組む」力は、子供から子供への意識付けと、子供たちと教師が思いを一つにして協働したことにより、確実に伸びたと考えている。

4 取組の成果とまとめ

(1)協働体制づくり

下表は、2年間、教職員に向けて行った「学校経営に関する評価」の結果（一部）である。

評価項目 <4点満点>	R2	R3
A この学校では、学校教育目標に向け、創意工夫された教育活動が企画・実施されている。	3.3	3.9
B この学校の教育目標や目指す子供像、アクションプランは、教職員・児童・保護者に理解されている。	3.0	3.5
C この学校では、教育活動の目標や方針をはっきり示し、共通理解して取り組んでいる。	3.6	3.8

これらの評価が高くなったのは、学校教育目標、子供の非認知能力をはぐくむ教育の実現に向け協働できた成果の現れと捉えている。

(2)非認知能力をはぐくむ教育

非認知能力のような見えにくい力は、感覚的で抽象的で、何をどうがんばって伸ばせば良いのかが分かりにくくなる。これは教師も子供も同じであった。目標達成がどこか他人事になっているように感じたのはこの曖昧さからだと改めて気付いた。非認知能力をはぐくむ教育を目指す過程に必要なのは、

- ・目標達成を「自分事」にするために、目指すことを、関わる者（教師・子供）が願いを込めて共に作り上げていく過程をもつこと
- ・目標達成のために、目指す姿のイメージをはっきりと言語化（具体的な姿や行動で表す）し、教師と子供がそれを価値あることとして「意識」し、「共有」すること

ではないかと、本研究を通して考えた。

一方、目指す子供の姿を具体的に絞り込むことで評価の数字に信憑性をもたせようとしたことや、評価を自己評価に頼っていることに課題を感じている。人の内面にかかわる非認知能力は数限りなく、本来、子供一人一人の中に豊かに、個別に存在するものである。それを抜き出して共通の目標にしたり、共通のレベルを設けたりすることが、子供たちに無理がかかったり、適切な支援につながらなかったりする可能性があることを私たちは忘れてはならないと感じた。

この研究を通して、非認知能力をはぐくむ教育・学校経営の在り方を考え直すことができた。今後も真摯に研鑽を積んでいきたい。

自らの在り方・生き方を見つめ、成長に向けて努力する生徒の育成

— 生徒が意欲的に学びに向かう質の高い集団づくり —

富山市立芝園中学校 校長 池 永 美 子

1 はじめに

本校の生徒は全般的に明朗で、創造性やアイデアに富み、学習や文化・スポーツ活動に意欲的に取り組む。特に、学習に対する生徒の意識は高く、基礎的・基本的な知識・技能が定着している生徒が多い。

平成25年頃から、朝の自主学習「SKIP」を取り入れ、生徒が個々の目標をもち自主的に学習することを推奨してきた。また、令和元年度から「芝園プライドの継承～芝蘭の室に入る如し～」を掲げて、学習に向かう質の高い集団づくりに取り組んできた。さらに、令和2年度と3年度には、「SKIP」に学年を超えた縦のつながりを仕組んだ。

どちらの取組も、「学びに向かう先輩の姿を手本とする」ことを元としている。コロナ禍により活動に制限はあるものの、すべての生徒をエンパワーする学校づくりに努めたい。

2 研究の視点と研究内容

(1) 研究の視点

本校の学習に対する関心の高さや、学力の定着状況は、本校が富山市中心部の文教地区に立地することや、創校当時の宣言「本校をして県下第一の模範中学校たらしめん」によって醸成されたものと考えられる。一般に、中学校における校風や伝統は、部活動や学校行事での学年を超えた活動を通して受け継がれると考えられる。本校では、孔子の言葉「芝蘭の室に入る如し」を引用し、「意識の高い人と学校生活を共にする中で、自然に、いつのまにか自分も人間として成長している」ような環境づくりを目標としている。その

実現のために、学習面での質の高さを継承する仕組みづくりを進め、「よいモデルを見せることで、学習に向かう姿勢を受け継ぐことができ、よりよい学習環境を自分たちで創り上げていこうとする雰囲気高めることが、さらなる学力の伸長に結びつく」という仮説のもと、学校改善に取り組んだ。

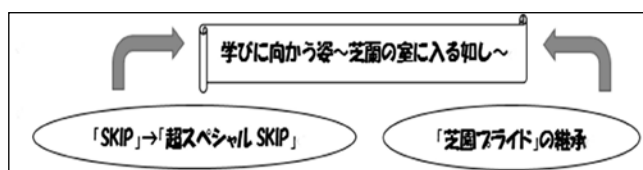
(2) 研究内容

①朝の自主学習「SKIP」を発展

平成25年頃からは行われてきた朝の自主学習「SKIP」に、学年を超えた縦のつながりをつくることにより、「学びに向かう姿」を引き継ぐ。

②「芝園プライド」の継承

本校の「生徒が学びに向かう姿」は、創校以来、先人たちが長い年月をかけて醸成してきたものである。そのため、生徒たちは「学びたい」「成長したい」という雰囲気の中で学習できている。故に、常々、そのようなすばらしい雰囲気の中で学習できることに感謝し、誇りをもってほしいと話してきた。生徒たちは、それを「芝園プライド」と呼んでいる。その「芝園プライド」をもって学びに向かう先輩の「授業に臨む姿」を後輩が実際に見ることによって、「集中して授業に取り組む姿」「生徒同士が互いに学び合う姿」からよい環境の中で学ぶことの大切さに気づかせる。



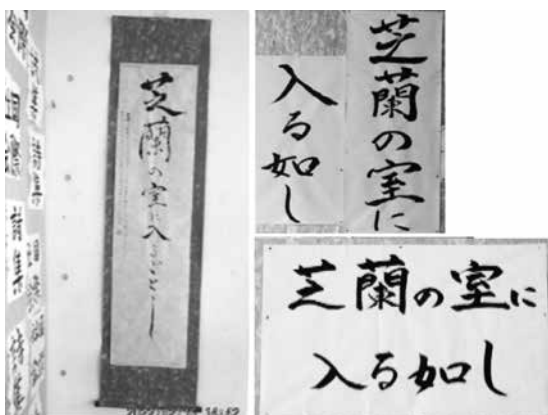
【「学びに向かう姿」構想】

3 研究の実際

(1) 朝の自主学習「SKIP」を発展

①令和2年度の取組

平成25年頃から、朝の自主学習「SKIP」を行い、生徒が個々の目標をもち自主的に学習することを推奨してきた。本校4階にあるランチルームには、早朝から自主学習の教材（各教科のワークや検定の問題集等）を持った生徒が、学年を超えて集まり、集中して学習に取り組んでいた。しかし、新型コロナウイルスの感染予防のため、令和2年度ははじめからは、学年を超えて集まることを中止した。そこで、「どこでも



【芝蘭の室に入る如し（各学年での掲示）】

SKIP」と称して、各自が1か所に集まらず、教室等思い思いの場所での自主学習という形態で開始した。しかし、これでは「先輩が学ぶ姿」を見ることができなくなってしまうという問題が生じた。

そこで、体育大会の団編成での「縦割り」の関係を利用することとした。体育大会の団編成は、他校ではクラスを解体して編成する場合が多い。しかし、本校では各学年4クラスあるので、クラスを一つの団として「赤」「白」「青」「黄」に分けている。団は、各学年で同じ色になったクラスを「縦割り」で編成するため、「縦割り」のクラス同士で9月の体育大会の後、10月に行われる「合唱コンクール」までの準備期間において、互いの練習の成果を披露し、アドバイスを送り合う伝統があった。また、行事が終わるとメッセージを送り合う温かい関係もあった。これを自主学習である「SKIP」に取り入れることにした。それを「スペシャルSKIP!」と呼び、体育大会の団ごとに日を設定して、ランチルームで「スペシャルSKIP!」を実施した。そこでは、久しぶりの団員との再会を学ぶ姿や、親しみのある先輩に質問をする姿が見られた。行事の場面とは異なる「学習に向かう先輩の姿」を見て刺激を受けていた。これによって「SKIP」の校内での縦のつながりができた。

次に、本校には「芝園小中一貫的連携教育」という小学校との連携のスタイルがあるが、これを隣接する高校とも連携することができないかと考えた。そこで、隣接の富山中部高校へ「SKIP」に本校卒業生の派遣を依頼した。それを「超スペシャルSKIP!」と呼び、中学3年生を対象にして、12月に実施した。高校生は2学期末考査後の補習の時期であったが、講師として、受験を目前に控えた中学生に、熱心に指導してくれた。5日間で延べ50人の卒業生が協力してくれた。



【中高連携プログラム】

高校生の学ぶ姿を見ることは、中学生にとって刺激となるとともに、自己の進路を考える上でも大いに参考になったようであった。これによって、「中高連携プログラム」を軌道に乗せることができた。

②令和3年度の取組

昨年度構築できた「中高連携プログラム」をよりよい取組にするために、次の2点を加えた。

- ア 対象を全学年とする
- イ 学習に対する苦手意識をもつ生徒も参加しやすいプログラムにする

ア 対象を全学年とする

受験を目前とした3年生を対象とすることには意義があるが、1、2年生が高校生の姿を見ることも、進路に対する展望をもつことにつながると考え、参加しやすい夏季休業中に「超スペシャルSKIP!」を開催した。在校生の参加が多数見込まれたことから、富山高校にも卒業生の派遣を依頼した。5日間で、延べ70人程の富山中部・富山高校に通う本校卒業生が参加してくれた。伝統の「SKIP」が行われてきたランチルームは、久しぶりに活気を帯び、在校生の参加は、延べ530人程であった。



【超スペシャルSKIP!】

イ 学習に対する苦手意識をもつ生徒も参加しやすいプログラムにする

「超スペシャルSKIP!」と聞いても、上位層に目を向けた取組だと考え、自分には関係ないと思っている生徒もいた。そこで、学び残しや学びのほころびがある生徒が、学び直せるきっかけとするために、「今まで、分からないと言えなかった」「やり直したいと思っていた」という生徒も参加できる「どこからでもSKIP!」も同時に開催した。高校生も基本的な問題の解説や丸付けに協力し、参加生徒も自信をもって問題に取り組めるようになった。高校生の中には、「中学生に、どのように説明

したらよく分かってもらえるか考えることができ、自分たちにとってもよい経験となった」と語ってくれた生徒もいた。

また、「高校生への質問コーナー」を設置し、誰でも気軽に高校生と話せる工夫をした。日替わりで「自由研究や課題作文の進め方」「高校での部活動」「進路選択」等、テーマを示して話題提供をした。

(2) 「芝園プライド」の継承

どこの中学校にも見られる光景だが、中学3年生の学習態度に比べると、1年生では学習規律が確立しておらず、集中力に欠ける面がある。本校では、「学年が上がれば落ち着くだろう」という「待ちの姿勢」ではなく、「先輩の学びに向かう姿を積極的に学ぶ機会」を設定した「『芝園プライド』の継承」の取組を令和元年度に始めた。ここでは、体育大会での団編成の「縦割り」の関係を活用した。体育大会で共に活動し、その後の合唱コンクールでも、練習を見せ合いアドバイスをしてきた関係である。学校行事での学年を超えた関係を学習の場面に活用できないかと考えた。

①令和元年度の取組

- ア 12月 1年生が3年生の授業を見学する。
→ 見学後、1か月後の達成目標をクラスで考え、授業の受け方を見直す。
- イ 1月 3年生が1年生の授業を見学する。
→ 授業の受け方について、アドバイスをする。
- ウ 3月 3年生が1年生に「芝園プライド」を語る。

ア 12月 1年生が3年生の授業を見学する。
1年生には授業を見る視点を与え、この取組の趣旨を伝えて協力を求めた。

〈授業の視点〉

- 1 時間と生徒の動き
- 2 リーダーの声かけ
- 3 授業の準備
- 4 号令時の様子
- 5 授業への取組

1年生は、見学後各クラスに戻って話し合いをした。3年生のあまりに真剣な授業態度に驚いた様子だった。「どうしたら先輩たちになれるのだろうか」「あんな雰囲気の中で授業を受けてみたい」と

いう声が聞かれた。1か月後、3年生に自分たちの授業を見せることを目標に、具体的な計画を立てた。「チャイム前着席」を意識するために、早速タイマーをセットするなどの具体的な行動も見られた。



【3年生の授業を見学する1年生】

イ 1月 3年生が1年生の授業を見学する。

1か月の取組の成果を3年生に見てもらった。3年生からは、できているところをほめてもらい、できていないところは「伸びしろ」だとアドバイスをもらった。例えば、号令のかけ方を3年生から手本を見せてもらった。アドバイス通りに実践すると、自分たちのあいさつが格段に向上したことを1年生自身も実感することができた。3年生は受験を終えたら改めて、「芝園プライド」について話することを約束した。

ウ 3月 3年生が1年生に「芝園プライド」を語る。

全国的な新型コロナウイルス感染拡大により臨時休業に入ったため、実施できなかった。

②令和2年度～3年度の取組

昨年度の取組に加え、次の2点を加えて実践した。

- ア 3年生が1年生にアドバイスする場面を2年生も見学する。
- イ 3年生が「芝園プライド」について語る時間を設定する。

ア 3年生が1年生にアドバイスする場面を2年生も見学する。

昨年1年生として取り組んだ2年生は、異なる視点からこの場面を見学した。成長した自分たちを実感するとともに、先輩のアドバイスのすばらしさと「芝園プライド」を受け継いでいくことの責任を感じていた。そして、来年は自分たちが、1年生に3年生として授業に臨む姿を見せる番だと志を新たにしている姿が見られた。

イ 3年生が「芝園プライド」について語る時間を設定する。

受験を終えた3年生が、卒業式2日前に1年生の教室へ行き、学習や学校生活について実体験を踏まえて思いを語った。「中学校生活はあっという間、時間を大切にすること」「中学1年生で学ぶ内容を大切にすること」「集団を向上させるために、自分が心がけていたこと」など、後輩に伝えたいことは、それぞれの「芝園プライド」だった。1年生からは「貴重なお話に感謝している」「これからは、自分たちが『芝園プライド』を受け継いでいく」などという前向きな言葉を伝え、温かい雰囲気包まれた。



【「芝園プライド」を語る3年生】



【1学年だより】

4 成果と課題

(1) 成果

折に触れて「芝蘭の室に入る如し」と語り、各学年フロアにもその言葉を掲示し意識させるとともに、「よい環境の中で学ぶことが、学力の伸長につながる、そしてその環境は自分たちで創り上げていくのだ」と伝えてきた。その仕組みを作る取組を始めて3年になる。現在、本校はどの学年も、非常に落ち着いて学習に取り組んでいる。始業のチャイム前に授業の準備をして、チャイムを待って授業を開始することが定着している。今年度から導入された「一人一台端末」もルールを守って活用し、学習のツールとして有効に使っている。

12月に実施した「学校に関するアンケート」では、どの学年も8割以上の生徒が「学校へ行くのが楽しい」と答えている。また、「学校独自の特徴」として、「芝園プライド」や「SKIP学習」について挙げる生徒が多い。保護者からも、「3年生や卒業生から学ぶ取組」が評価されている。

定期的実施している「家庭学習時間調査」では、各学年の目標時間を超えた生徒の割合が、7月には60%程度であったが、1月には80%を超えた。校内での取組が、家庭学習に対する意識も変えたと推察する。

現在の3年生にとっては、この「芝園プライドの継承」の取組を始めて3年目となる。授業に臨む姿勢が変化しただけでなく、自身が後輩たちのモデルになるのだという自負が生まれた。また、中教研学力調査や富山市中3学力調査等の各種調査の結果は、学年が進むにつれて向上し、現在では、各調査の平均点を大幅に上回ることができるまで成長した。

身近なよいモデルである先輩の姿や卒業生の姿を意識的に見せる機会をつくり、学びに向かう環境づくりに努めたことが、成果となって表れたものと考えている。

(2) 課題

新型コロナウイルスの影響により、当初考えていた活動が十分行えず、形や内容を変えながらの実施となった。例えば、今年1月に実施した「1年生が3年生の授業を見学」した際には、廊下からガラス越しの見学となったり、3年生が1年生にアドバイスする活動では、Meetを使ったアドバイスとなったりした。本来であれば、face to faceで直接、表情や雰囲気を感じて欲しかったところではあるが、今後も「どう工夫すれば、活動が実施できるのか」「生徒の心に響くのか」ということを常に考えながら、実践していきたいと考えている。

また、少子化により、生徒数が減少しつつある。本校は、学校選択制により4クラス編成を維持してきたが、今後、3クラスになる学年も想定される。そうなった場合も想定し、「縦割り」の実施の仕方を考えていきたい。

現在は、コロナ禍でも学習に意欲的に取り組み、前向きな学校生活を送る生徒が大半だが、学校は「築城3年、落城3日」とよく言われる。これからも気を抜くことなく、生徒たちに学ぶ喜びをもたせ、学力向上を図り、すべての生徒をエンパワーする学校を目指していきたい。

「主体的に学ぶ子供の育成」を目指して

— 子供の「よりよくありたい、よりよくなりたい」と願う心に寄り添う —

富山市教育センター 指導主事 篠田 美希子
(R3 富山市立針原小学校での実践)

1 はじめに

「主体的な学び」とは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」と定義されている。(文部科学省「主体的・対話的で深い学びの実現(「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善)について(イメージ)」引用)私は、「子供は常によりよくありたい、よりよくなりたいと願い、求め、学び続けている存在である」と考えている。その思いが目には見えにくい子供もいるが、子供一人一人には主体的に学びたいという思いや願いがあると捉えている。子供と関わる多くの人々が、その思いや願いを見だし、寄り添い、認めていくことで、子供の自己肯定感や自己有用感を引き出し、更には温かい関わりや安心できる環境で学ぶことができるよう支援を続けることで、子供は主体的に学ぶことができるようになると思う。

本研究では、子供が関わる身近な存在の中から、**①教師 ②仲間 ③家族**の3つを挙げ、子供が主体的に学ぶための関わり方やその内容について考えていきたい。

2 研究の視点と研究内容

【視点1】 教師との関わり

- ・ 子供の生活経験や取組の様子を丁寧に捉えた単元(題材)構想と支援の継続

【視点2】 仲間との関わり

- ・ 子供が仲間との関わりの中で互いのよさや成長を感じることができる場の設定

【視点3】 家族との関わり

- ・ 子供が家族の支えを実感し、よりよい自分を目指していく取組の工夫

3 研究の実際

(1) 【視点1】 教師との関わり

- ・ 子供の生活経験や取組の様子を丁寧に捉えた単元(題材)構想と支援の継続

①子供の姿を基にした単元(題材)構想

子供の主体性を育むためには、まず私たち教師が目の子供をよく見て、理解しようとするのが大切であると思う。特に授業においては、子供のこれまでの経験や実態を丁寧に捉え、子供一人一人に合わせた支援や手立てを考えることにより、子供自らが意志をもって学んでいこうとするのではないかと考えた。

本校は今年度より、富山県小学校教育研究会 図画工作科部会 研究推進校として、上・下学年の部会研修会を中心に研修を進めている。各部会で題材を構想する際、次のような流れで進めていった。

【子供の姿から授業を考えよう】

- ①学級の子供のよさや課題、更に願う子供(学級)の姿を考える。
- ②観察対象児を選び、子供の思いや願いを捉えながら、教師が願う子供の姿を考える。
- ③子供の思いや願い、教師が願う子供の姿を実現していくことができる単元(題材)を考える。
- ④子供の思いや願いに寄り添って、単元(題材)の展開や具体的な支援を考える。

このように授業を考えていくと、子供一人一人の日頃の生活の様子や行動等も想起することとなる。そうすることで、子供のよさや課題に改めて気づき、子供の思いや願い、教師が願う子供の姿を明らかにすることができると思った。子供の姿に寄り添った単元(題材)構想をすることが、主体性を引き出す契機となるのではないかと考え、以下のように実践に取り組んだ。

○子供のよさを見だし、更なる可能性を引き出す題材の選択

下学年部会では、1学年 図画工作科「すきまちゃんのすきなすきま」に取り組んだ。この題材は、普段は気付かないような隙間に目を向け、様々な形に親しみながら造形的な見方・考え方を広げていく学習である。

本題材を決定するまでに教師は、子供たちの生活の様子を丁寧に想起し、今の子供たちの実態を捉えた。その中で、子供たちが生活科の学習において、毎日アサガオの様子を1人1台端末を活用して写真に撮

り、観察を続けている姿を取り上げた。アサガオの大きな葉を中心に写真を撮る子供もいれば、背丈全体が入るように構図を考える子供もいる。教師は、写真1枚にも子供一人一人の思いや意図が働き、各自の見方や考え方が表れることに気付いた。そして、このような取組を積み重ねていることを子供たちのよさとして捉えたのである。このよさを図画工作科の題材にも生かすことができなかと考え、本題材を考えるに至った。

1年生の子供たちもつ形に対する柔軟な感覚を大事にしながら、仲間と互いの見方や考え方を共有するには、写真に撮って紹介し合う活動がとても有効である。この活動を中心に据え、教師が願う子供の姿を「造形的な見方・考え方を広げていく子供」と掲げ題材を構想していった。下学年部会研修会では、教師全員が1年生の子供になったつもりで身の回りの隙間を探したり、その隙間を写真に撮ったりしながら、子供が感じる楽しさや学習を進めていくうちに感じるであろう課題について出し合った。また模擬授業を通して、その子供の形の見方や考え方が、聞き手の子供たちにより分かりやすく伝わるように、支援や手立て、切り返し等を繰り返し話し合った。実際の授業では、

子供が自分の見付けた隙間を写真に撮って仲間に提示する際、1人1台端末のペイント機能を生かして隙間の形を枠線で示し、短い言葉も添えて表してい



(自分の見付けた隙間を1人1台端末で写真に撮る子供)

た。子供は、互いの見方や考え方を交流する中で、仲間と同じような場所の隙間を選んでいても、異なる見方をした自分のよさに気付いたり、仲間が見付けた隙間の形から新たな発見を増やしたりしていた。このような子供の姿を引き出すことができたのは、教師が子供のよさを見だし、題材選択に生かして子供に寄り添った支援を工夫し続けてきたからだと考える。

○子供の不安や課題を捉え、思いや願いに寄り添う題材導入の工夫

上学年部会では、6学年 図画工作科「思いをこめてつくって、使おう～1まいの板から～」に取り組んだ。この題材は、1枚の板から自分の作りたいものを想像し、目的や使い方を考えて自分にとって意味のあるものを作り上げていく学習である。

教師は、子供たちに願う姿として「子供一人一人が自信をもって作品に表す」ということを掲げた。これは、日頃の学習において想像力を働かせることや、自分の


思いや考えを表すことに消極的な子供の様子が担任として気になっており、「もし自信がもてずにいるのならば、その理由を明らかにして手立てを考えたい。子供には自分の思いを大切に自信をもって学習に取り組んでほしい」と願っていたからである。そのような教師の願いを部会全体で共有し、研修を進めていった。

上学年部会研修会ではまず、図画工作科の学習において自信をもつことが難しいと感じる子供の背景について出し合った。「技能面において困難さがある、発想が思い浮かばない、友達にどう思われるかが気になる」など、様々なことから自信がもてなくなるのではないかと考えた。そこで、子供が抱える不安を少しでも軽減させながら「表現してみよう」と思えること、一人一人がかけがえのない存在であると実感することができることを土台に、子供の思いや願いが直接作品の工夫として表れやすい本題材を取り上げることにした。

初めに、上学年部会の教師全員が1枚の板から作品を作るという実技研修に取り組んだ。これは、どのようなことが子供の「表現してみよう」という思いを引き出すことにつながるのか、子供の立場になって考えるためである。実際に作ってみると、子供が直面する技能面の難しさを実感することができ、その後、板を切ることや釘を打つことを楽しみながら試行することができる場の設定へとつなげることができた。一方で、教師が製作に取り組む中で、一人一人の思いが工夫やアイデアに生かされ、製作者の個性として表れることに改めて気付いたのである。そこで、題材導入時、教師が製作した作品と、作品への思いを併せて子供たちに提示してはどうかという提案が挙がった。このことにより、発想が浮かびにくい子供にとっても、学習の見通しやイメージをもつ契機となるのではないかと考えたのである。

【子供たちに提示したA先生の作品と作品への思い】

〈作品への思い〉
 「癒しのスペースがあったらいいな。トイレが今より少し心地のよい場所になったらいいな。トイレトーパーや掃除グッズを置くスペースがあったら便利そう」
 〈誰が使う？〉 家族
 〈どんなふうにする？〉
 下の段にはトイレトーパー、上の段には植物や自分の好きな小物を置きます。トイレが狭いので、角に置くことができるデザインにしました。色を青のグラデーションにすると、癒しの雰囲気が出るかなと思い、色の塗り方を工夫しました。



(トイレのコーナーラック)

題材導入で子供たちに教師の作品と思いを併せて提示すると、子供たちは驚きながらもとてもうれしそうに一つ一つの作品を見ていた。そして作品に込められた製作者の思いを真剣に捉えようとしていた。また、

身近な先生方が自分たちの学習に関わってくださっていることに喜びを感じていたことも伝わってきた。

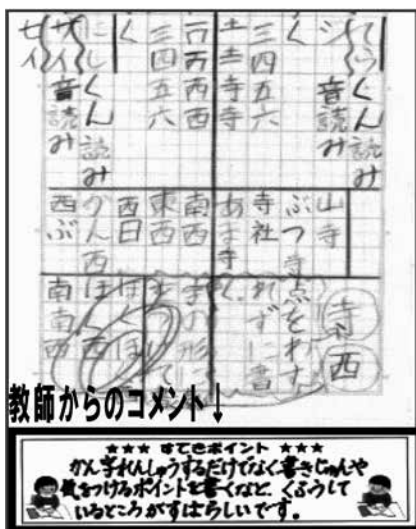
【題材導入後の子供のワークシートから(抜粋)】

- ・家の中を見回して、困っていることを見つけて、思いをこめて作りたいです。(A児)
- ・まだ作りたい物は思いつかないけど、生活で使える物を作りたいと思いました。(B児)
- ・先生方も思いをこめて作っているから、ぼくも思いをこめて作りたい。自分の作りたい物をがんばって作る。(C児)

教師が子供の思いや願いに寄り添いながら、教師としての願いを明確にして題材導入を工夫することで、子供は自ら学習に向き合い、歩み出そうとするのだと実感した。

②子供一人一人の取組のよさを認め、励まし続ける「自主学习ノート」の取組

本校では、家庭学習の一環として、毎日自主学习ノートに取り組んでいる。子供たちが自分なりの工夫を生かしながら学習が進められるように、学級では子供同士が自主学习ノートを見合い、互いのよさや工夫を認め合う場を設定している。また、昨年度より全校の子供たちの目に触れる場所に、各学年においてよさや工夫が見られる自主学习ノートを掲示し、毎月更新している。下学年の子供においては、上学年の子供の取組を見ることで、憧れや目当てをもつことにつながっている。また、日々教師が心がけていることの一つ



〈子供の自主学习ノートと教師からのコメント〉

に、「取組のよさを具体的に認め、励ます」ということがある。自主学习ノートを掲示する際、教師がよさや工夫を認めるコメントを添えている。「何ができていて、何を工夫しているのか」を具体的に子供に伝えることで、掲示されている子供は自分の取組のよさを自覚することができる。また、それを見る子供たちは教師が認める「すてきポイント」を参考に自分の取組に生かしている。教師が子供のよさを具体的に認め励まし続けることで、子供は自分のよさを自覚できるようになり、自己肯定感を高めながら次の取組への意欲につながっていくのだと考える。

(2) 【視点2】 仲間との関わり

- ・子供が仲間との関わりの中で互いのよさや成長を感じることができる場の設定

①子供が仲間との温かい心のつながりを感じ、自己有用感を高めていく「縦割りなかよし班活動」

本校の特徴的な活動の一つに「縦割りなかよし班活動」がある。子供たちはこの活動を通して、他学年の仲間と力を合わせたり、支え合ったりしながら、仲間の優しさや思いやりに触れ、共に活動に取り組む喜びを感じている。現在、新型コロナウイルス感染症



〈縦割りなかよし班活動に取り組む子供たち〉

予防のため、活動においても制限が続いている。そのような中、安全を確保して行われた「全校なかよしオリエンテーリング」では、子供たちが仲間との距離を保ちながらも存分に楽しめる内容が工夫されていた。上学年の子供たちは、班の仲間が安全に活動できるように責任を果たしていた。また下学年の子供たちは、上学年の子供たちが自分たちの活動を支えようと真剣に取り組んでいると感じ、声を出すことは難しくても拍手を送り、全身で仲間を応援していた。活動の最後に「今はみんなで活動できないことが多いけれど、今日は班のみんなで活動できて楽しかった」と話す子供がいた。このような子供の姿から、どのような状況であっても子供は仲間との温かい心のつながりを求めていることが伝わってきた。双方向の関わりを日々積み重ねる中で、子供は自分や仲間のよさを認め、更には自己有用感を高めていくことにつながるのだと考える。

②仲間の姿や支えを自分の目指す姿につなげていく「あいさつボランティア」

研精委員会（運営委員会）が中心となって毎朝行っている挨拶運動では、「あいさつボランティア」を募って活動を進めている。登校後、「あいさつボラン



〈「あいさつボランティア」の活動〉

ティア」に参加する子供たちが児童玄関に集まり始める。子供たちに「あいさつボランティア」に参加する理由を聞いてみた。

〈「あいさつボランティア」に参加している理由〉

- ◆僕は、大きな声で挨拶すると、とても気持ちがいいから「あいさつボランティア」に参加しているよ。(1年)
- ◆僕は、友達と挨拶をするのがとても楽しい。たくさんの友達から挨拶が返ってくると、とってもうれしくなるから「あいさつボランティア」をしている。(2年)
- ◆私は、今いろいろなことにチャレンジしたいと思っている。今まで自分から声を出すことをしてこなかったけれど、友達と一緒に「あいさつボランティア」にチャレンジしてみて、やってみると楽しいなと思った。(4年)

このような子供たちの姿から、目当てに向かって取り組むことができる喜びや、全校の仲間と挨拶を交わす心地よさを味わったり、「あいさつボランティア」を新たなことに挑戦することの一つとして捉え、自分の成長を感じ始めたりしていることが分かってきた。仲間の頑張る姿や、一緒に頑張ろうとそばで励まし支えてくれる仲間の存在も大切であり、このような日常的な取組の中で、子供は目指す自分の姿を明確にしていき、主体的に学ぶ姿へとつなげていくのだと感じた。

(3) 【視点3】 家族との関わり

- ・子供が家族の支えを実感し、よりよい自分を目指していく取組の工夫

●家族の支えにより、粘り強く活動に取り組むことの大切さに気付く「メディアコントロール週間」

本校では、毎学期メディアコントロール週間を設定している。特に今年度は、子供自身が目当てを意識し、目当てに向かって取り組み続ける自分のよさや伸びについて実感することを大切にしている。また、子供の姿を家族の皆様から認め、励ましていただくことを願い、年度当初に年間計画を立て継続的に実施してきた。

この取組で活用するカードは、1～3学期の取組が一覧になっている。子供や家族の方が各学期の目当てや振り返りを一目見て、前取組を生かしながら目当てを立てたり、自分の取組を振り返ったりできるように工夫した。「第2回メディアコントロール週間」を終え、家族の方が子供たちの取組の様子を温かく見守ってくださっていたことが伝わってきた。

〈「第2回メディアコントロール」を終えて

～家族の方からのコメント～

- ◇時計を見てテレビを見る時間を決めて、守ることができていました。夕食後のお皿をほとんど洗ってくれたのは初めてでしたが、きれいに洗えていて助かりました。
- ◇食事中も座る場所をかえて、テレビを見ないように工夫したり、読書の時間を増やしたりしていました。
- ◇自分で決めたルールを自分で意識して守ることができるように頑張っていました。

2学期は、1学期に比べて目当ての達成に向けて取り組む子供の姿が多く見られるようになった。子供は、日々取り組んでいた自分の姿やその過程を家族から認められることに喜びを感じ、次もあきらめずに取り組もうと意欲を高めたのだと考える。子供自らがメディアをコントロールするには、自身の意志の強さが大切である。その意志の強さを育むためには、家族の協力、環境づくり、そして、伸びを認め続ける温かい関わりが不可欠だと考える。本校では校区の中学校におけるテスト週間に合わせてこの週間を設けている。本取組が子供が家族の支えを実感し、よりよい自分を目指して取り組んでいく契機となれば、子供は自分の意志で判断し、実行する力を付けていくのではないかと考える。

4 研究のまとめ

(1) 成果

とやまゲンキッズ作戦や学校評価アンケートの結果から、子供の意識に次のような変化が見られた。

〈とやまゲンキッズ作戦での質問に「はい」と答えた子供の割合(%)〉

質問	1学期	2学期
学校へ行くのは楽しい(全校)	73.9	76.9
自分にはよいところがある(3～6年)	58.0	76.3

〈学校評価アンケートにおいて「当てはまる・少し当てはまる」と答えた子供の割合(%)〉

質問	令和2年度	令和3年度
学校での勉強は分かりやすく楽しい	88.0	92.7
難しい問題を解こうと努力している	90.0	93.0

このような変化につながった要因について子供が関わる身近な存在【①教師 ②仲間 ③家族】から次のように考えた。

①〈教師との関わりから〉

教師が様々な事実から子供の思いや願いを捉え、一人一人に寄り添った支援を続けることにより、子供は自分のよさや可能性を感じ、自己肯定感を高めながら学習に取り組もうとする。

②〈仲間との関わりから〉

仲間との双方向における温かい心のつながりを、日々様々なかたちで積み重ねることにより、子供は自分や仲間のよさを認め、自己有用感を高めながら取組を進めようとする。

③〈家族との関わりから〉

取組の過程を家族の方から認め、支えていただくことで、子供は安心して、よりよい自分を目指し続けようとする。

今後も「よりよくありたい、よりよくなりたい」と願う子供の姿を大切に、温かい関わりのできる在り方を探りながら、主体的に学ぶ子供を育てていきたい。

(2) 課題

子供一人一人の置かれている環境や抱える不安等、多岐に渡っている。今後も様々な立場から関わる際の連携の在り方について考え、研鑽を積んでいきたい。

心と体の健康づくりを主体的・協働的に実践していく子供の育成 感染症予防対策を継続しながら、創意工夫を生かした教育活動の充実を目指して


富山市立藤ノ木小学校 養護教諭 岡田 奈菜
(R3 富山市立水橋西部小学校での実践)

1 研究主題について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、社会全体の生活様式が大きく変化している中、多種多様な情報が散乱している。このような現状において、感染防止に必要な情報を収集し、適切な意志決定や行動選択を行うことができる力を養うことができれば、アフターコロナの時代となっても、備わった自主性は今後の人生に生かすことができるのではないかと考えた。

昨年度の学校保健委員会では、児童が感染症予防対策について主体的に取り組み、対話を繰り返したことで、水橋西部小学校独自の感染症予防「天瀬の呼吸」をつくり上げることができた。

実施した感染症予防「天瀬の呼吸」



- 1の型 よりよい生活習慣
- 2の型 手洗い
- 3の型 うがい
- 4の型 換気
- 5の型 マスクの着用
- 6の型 ソーシャルディスタンス
(3密の回避)

今年度は昨年度の感染症予防対策を継続しながら、子供自身が積極的に心身の健康の保持増進を図っていく力を身に付け、生涯にわたって健康・安全で活力ある生活を送る礎を、構築させることが重要ではないかと考えた。そのために、心と体の健康づくりを主体的・協働的に実践させ、家庭生活でも健康な発達を促す指導を目指した。

2 視点と研究内容

- 【視点1】** 昨年度の取組を更に充実させ、主体的・協働的な活動に向けた工夫と実践

【視点2】 家庭での健康な発達を支える指導の充実

3 研究の実際

- (1) **【視点1】** 昨年度の取組を更に充実させ、主体的・協働的な活動に向けた工夫と実践

実践1 アクションプラン(体部会)の推進

学校教育目標を達成するために、徳知体部会を構成している。体部会では、重点目標を「たくましい子」として、以下の具体的方策を立てて取り組んだ。



自己肯定感は、想定外の事象や未知の事象に対しても、もてる力を発揮して主体的に解決するために必須の感情であると考えます。そのような子供を育てるため、昨年度から、自分のよさを発信する「〇〇マスター」の活動を実施している。縄跳びが得意な子供は「縄跳びマスター」、ピアノが得意な子供は「ピアノマスター」等と紹介し、自分のよさを認めることで、自分に自信をもてる子供が増えてきている。

今年度は、更に活動の幅を「自分」と「他者(フレンド)」、そして「他学年(ファミリー)」のよさ見付けへと視野を広げ、自分のよさを自ら発信することに恥ずかしさがある子供や、周りからの評価で自分のよさを再確認できる機会を増やすことに努めた。この活動を「ハッピーアール動画」と名付けて発信し、子供たち同士でよさを伝え合い、動画撮影に臨んだことで、子

供同士の関わる場面が増えた。

また、作った動画をChromebookやホームページ等で全校や保護者に見てもらふ機会を設けたことで、友達や保護者から称賛され、自分のよさをメタ認知することができた。

学期始めや学期末には教職員でしっかり共通理解を図り、全校で自己肯定感を高める取組を継続している。



【ハッピーアール(HAPPY PR)動画を撮影中の子供たち】

実践2 「いのちの教育」を核とした指導と可視化

「いのちの教育」を行うことは、自尊感情を高めるために重要な要素である。

今年度は、全校で「いのちの教育」の指導を実施した。上学年では、スクールカウンセラーの深澤大地先生に「ストレスとの上手な付き合い方」をテーマに、自分の心を大切にできる方法を学んだ。子供たちは「自分のことを大切にすることが、自分と相手の命を大切にすることにつながる」「嫌なことが起きたときは考え方(受け取り方)を変えることで、気持ちや行動を取り替えることができ、前向きな生活を送れること」を学ぶことができた。また、下学年では、発達の段階や学級の実態に合わせて、ソーシャルスキルトレーニングを実施した。



【スクールカウンセラーによる「いのちの授業」の様子】

「いのちの教育」は、日々の教育活動の中で、子供たちが、人や自然、社会と関わる体験を通して、自他の命がかけがえのないものであることを実感するための教育である。このことが学校全体で意識できるように、掲示に位置付けている。



【「いのちの教育」が各教科と関連付けていることが分かる掲示】

実践3 縦割り活動の再開

本校は単級であり、比較する学級がないため、学年の意識をもつ機会が少ない。そのため、自分の立ち位置を確認し、理解する場を、縦割り活動で補う必要がある。感染症の拡大で、教育活動も手探りの状況ではあるが、感染症予防対策の指針や市内の感染状況を見ながら、縦割り活動を再開した。

清掃活動の縦割り活動では、上学年はお兄さんお姉

さん、父母の役割を担い、下学年に優しく、時にそっと見守り、それぞれの関わりから、自身を見つめ直し、「自分も前は、そうだったかな」と、過去と現在の自分を比較している姿もあった。下学年は、上学年の姿を見て、これから自分がどのように成長していけばよいのかを確認する、道しるべとなっている。



【縦割り清掃の様子】

実践4 児童保健委員会活動の充実

委員会活動においては、子供が互いの意見を聞き合い、意見を比較したり精選したりしながら、解決方法を選択できるような指導を実践している。

①常時活動

常時活動の石けん補充では、委員会発足時に「なぜ石けん補充するのか」を考えさせ、感染症予防に自分たちの活動が大切であることを意識させたことで、継続して各階の担当者が責任感と使命感を持って補充している。



【石けん補充をしている様子】

②天瀬っ子HP記者活動

全校の健康と安全を守る推進者として、日常の中から健康に関する記事と写真をホームページに掲載する「天瀬っ子HP記者」としての活動を昨年度から継続している。子供自身が感染症対策等についての記事をホームページに載せることにより、感染症対策の見える化を図り、保護者も安心して子供を学校に送り出すことができているのではないかと考える。

③保健に関するデザイン募集と活用

心と体の健康への意識を高めて欲しいという思いから、保健に関するデザインの募集を行った。それぞれに個性が光るデザインの中から、「歯が大切に賞」や「感染症予防バッチリで賞」等を選び、歯みがきの啓発活動や手洗い環境の整備、換気グッズの作成などに生かしている。子供のデザインを積極的に活用したことで、子供たちは親しみやすく、普段何気なく見ている掲示物でも「これは、あの時のデザインだね」と話が出たり、



【募集したデザインを活用して換気グッズを作成している様子】

「手洗いをしっかりするんだ」とデザインを見て、意識をしたりする姿が多数見られた。

④感染症予防の継続とマンネリ化の防止

新型コロナウイルス感染症の感染者数が減少すると同時に、感染症予防の意識も薄くなったり、また「分かっているけど、面倒くさい」という姿が散見されたりしたため、少しでも子供たちが興味を持って感染症対策をしていこうと活動を更新し続けている。

手洗いでは、手洗いスタンプを活用し、「ごほうび」と称し、手を洗ってもらう作戦や、スタンプサントとなって学級を訪問し、スタンプが落ちる手洗いをするとおみくじを引けるといった活動を行った。また、昨年実施した「菌滅の刃」の続編を作ったり、歯を大切に作るオリジナルの物語を作ったりと活動は多岐にわたっている。



【手洗いの励行として実施した手洗いスタンプサントの活動】

その都度、感染症予防に有効であろう活動を考え、やってみて、やった経験から更に活動をアップデートしていこうとする主体的な姿が育ってきている。

また、活動の度に、「今、何が必要か」を考えながら子供たちが意見を出し合って活動した。

委員会の子供の意見を尊重し、それぞれが納得して活動することで、子供たちは達成感と成就感を味わい、活動をよりよくしようとする意識も高まっている。

1月には新型コロナウイルス感染症の第6波を受け、「天瀬の呼吸強化Week」を設定し、既習の経験から、おみくじのように1日のミッションを選ぶ方法を考え、取り組んだ後の称賛や啓発活動に至るまで、子供たちが主体的に意見を出し合い活動した。



【委員長を中心に意見を交わしている様子】

(2) 【視点2】家庭での健康な発達を支える指導の充実 実践1 養護教諭から情報発信の工夫と啓発

感染症予防対策の面から、保護者が来校して子供の姿を見る機会が少ない。そこで、保健だよりでは、子供たちの姿や、感染症予防対策等について本校が行っていることなど、つい読みたくなるような紙面づくりを心がけており、写真を多く取り入れるなど、見やすい工夫をしている。子供たちの作成した掲示物や委員

会児童がホームページ用に撮影した写真を保健だよりに使用することは、子供たちの達成感につながるはずである。また、紙面を見ることで感染症対策について各家庭でのコミュニケーションの一端を担っているとも考えられる。

学校での様子を、随時保健だよりや学校だより、ホームページ等で教職員や家庭に伝えることによって、子供たちのがんばりや対策を共有することができ、家庭での実践に結び付けられるのではないかと考えている。



【感染症予防対策について知らせている保健だより】

実践2 学校保健委員会の開催方法の工夫

及び家庭との連携

今年度2学期の始まりは、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、行事の延期や活動の制限など我慢を強いられる場面が多くあった。そこで、感染が落ち着いたことを確認した上で、家族のような役割を担う縦割り班を生かして、楽しく健康（いのち）について考えられる学校保健委員会にしたいと考えた。


また、保健委員会で今年度の学校保健委員会のテーマについて話し合うと、現在、様々な健康課題（心、運動、目、姿勢等）があり、他の委員会活動にもこの課題が結び付けられるのではないかと、協力を仰いだ。担当教諭をはじめ、委員会の子供たちは、この投げかけに快く賛同し、主体的に調べたり考えたりして、「大切な命を守るために、今、私たちができること」は何かを各ブースで発表した。

その様子を学習参観で保護者に公開し、発表を聞いたり、ブースに参加したりと参加型の学校保健委員会を開催した。

ブースによっては親子で取り組んだ。特に、体育委員会の親子体操ブースでは、親子で運動機会を確保するきっかけとなった。



【保健委員会の発表の様子
(学校保健委員会だより引用)】

<p style="text-align: center;">運営</p> <p>秋晴れの屋上で、声を出してストレス発散!その声を生かして気持ちのよい挨拶を保護者に評価してもらった。</p> 	<p style="text-align: center;">保健</p> <p>医療現場で働く看護師の先生に、手指消毒とマスクの置き方について教えてもらい、そのことをクイズにして、「正しい天瀬の呼吸講座」をした。</p> 
<p style="text-align: center;">給食</p> <p>自分の体幹のズレを確かめるための足踏みや、体幹を鍛える体操等、正しい姿勢について確認した。</p> 	<p style="text-align: center;">図書</p> <p>パソコンや本等から目を30cm離すためのグッズを作成。そのグッズを使って読書をして距離を確認した。特許?工作。</p> 
<p style="text-align: center;">体育</p> <p>委員会児童がそれぞれに考えた体幹を鍛えるトレーニングを紹介。親子やファミリー班でペアになって、筋トレに励んだ。</p> 	<p style="text-align: center;">環境</p> <p>目の健康について自分たちで調べ、みんなに知ってもらいたいたことを説明し、目の体操についても紹介した。</p> 

【各委員会のブースでの取組】

「心と体の健康」は、家庭の連携と協力が不可欠である。開催後に行った保護者アンケートから、子供が主体的に健康課題の解決に向けて行動に移そうとしている姿や、多様な他者（縦割り活動）と協働する姿を参観したことで、その重要性を保護者自身が実感することができた。このことから、家庭でも継続して心と体の健康について実践していく体制が整ったのではないかと感じている。

初めての参加型の学校保健委員会で、参観方法

には課題はあるが、発表する側も聴く側もとても生き生きと学習し、フェスティバルのような時間となった。子供たちの感想に、「楽しかった」という意見が多数あった。これは、一つ一つの知識がつながり、「分かったことが、おもしろい」や「楽しい」と思える活動になったと感じる言葉であった。「楽しさ」は同時に、今後も継続していこうとする主体的な姿に繋がっていると私は考えている。

4 研究のまとめ

(1) 成果

【視点1】について

新しい生活様式が求められる中で、教師自身が感染症予防対策を念頭に置きながら、心と体の健康について真摯に向き合い、教育活動の充実を図ろうとする姿勢が、子供たちの主体的に学ぼうとするにつながっている。

児童保健委員会活動では、子供が主体性をもって活動を取り組める手立てを講じることで、正しい知識を基に自分で考え、時には周囲と対話をしながら、課題解決に向けて活動することができた。このような活動を積み重ねていくことで、より子供の主体的・協働的な姿が高まった。

【視点2】について

学校での取組を、養護教諭が便りやホームページ等で家庭に知らせることで、タイムリーに家庭と情報を共有することができた。

学校保健委員会では、子供たちが主体的に活動する姿を保護者が参観・参加したことで、学校と家庭が連携して子供の健康課題の解決に向けての共通理解を図ることができ、家庭の協力体制が整い、実践に移すことができた。

2つの視点から、子供と教師、そして家庭の健康課題への意識が欠けることなく協働し、実践に移せたことで、心と体の健康づくりを主体的に実践していく子供の姿につながった。

(2) 課題

昨年度からの取組を効果的に継続していくために、どこまで子供たちの意識を維持させていけばいいのか、マンネリ化しないようにはどうしたらよいかなど、今後も手立てを講じながら進めていかなければならない。「自分で考え、行動する」という主体的な子供の姿を維持するために、子供たちと対話を重ね、更により取組を行っていく必要がある。このことが、将来困難なことにぶつかったときに、自分で考え行動する糧になるだろう。

* 令和4年度経営改善助成申請一覧

【学校部門】

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 テ ー マ
1	朝日町立あさひ野小学校	校 長	竹 内 静	教員の意識改革と業務改善の推進
2	入善町立ひばり野小学校	校 長	大 森 博 彰	郷土に誇りと愛着をもち、持続可能な社会の担い手となる心豊かな児童の育成を目指して
3	滑川市立寺家小学校	校 長	広 田 積 芳	「問いのある授業」を目指して
4	富山市立浜黒崎小学校	校 長	北 嘉 昭	生き生きとしたと「ありがとう」があふれる学校づくり
5	富山市立豊田小学校	校 長	麻 生 徹	教員がやる気・やりがいをもって働く「幸せな学校」を目指して
6	富山市立広田小学校	校 長	伊 藤 貢 三 子	主体的・対話的に自己の生き方についての考えを深め、よりよい生き方を求めようとする子供の育成
7	富山市立三成小学校	校 長	田 村 千 佳 子	子供のよさが生きる、活力ある楽しい学校を目指して
8	富山市立新庄北小学校	校 長	山 田 毅	教員一人一人が主体的に参画する学校経営の在り方
9	富山市立堀川小学校	校 長	荒 田 修 一	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための学校経営
10	富山市立熊野小学校	校 長	尾 崎 久 仁 子	読書好きな子供の増加を目指して
11	富山市立大沢野小学校	校 長	船 木 英 明	働き方改革
12	富山市立上滝小学校	校 長	杉 本 和 博	危機管理マニュアルの運用方法の改善
13	富山市立大庄小学校	校 長	中 山 隆 博	自ら考え、共に学ぶ子供の育成
14	富山市立神通碧小学校	校 長	三 日 市 寛	夢のある学校づくり
15	富山市立鶴坂小学校	校 長	土 田 泰 美	自ら考え、共に学びを深め合う子供の育成
16	富山市立保内小学校	校 長	長 谷 川 泰 久	進んで取り組み、本気でやりぬく子供の育成
17	富山市立寒江小学校	校 長	斉 藤 紀 子	主体的に学習に取り組む子供の育成
18	富山市立老田小学校	校 長	佐 藤 寛 子	学校・地域・家庭で共に挑戦する学校経営改善
19	富山市立中央小学校	校 長	松 浦 悟	質の向上を図りながら働きやすい職場づくりを目指して
20	射水市立放生津小学校	校 長	高 岡 陽 子	ふるさとを愛し、たくましく未来を切り拓くはとっ子の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 テ ー マ
21	氷見市立十二町小学校	校 長	指 崎 邦 久	豊かな関わりを通して、確かな学びをつくり上げる子供の育成
22	小矢部市立蟹谷小学校	校 長	宮 崎 靖	情報活用能力の育成を目指した指導を実施するためのチェックリスト活用の効果
23	砺波市立砺波東部小学校	校 長	井 澤 清 徳	みんなで学び、前向きに挑戦する学校づくり
24	砺波市立鷹栖小学校	校 長	砂土居 良 江	「仲間と共に高め合い、よりよいものをつくり出していく子供の育成」を目指し、同僚性を生かして教職員の資質・専門性を向上させる学校づくり
25	南砺市立福光中部小学校	校 長	棚 田 賢 也	「個別最適な学び」の実現を目指して
26	南砺市立井波小学校	校 長	松 永 和 久	学び続ける教員が育つ学校づくり
27	南砺市立上平小学校	校 長	中 町 寿 子	教員のキャリアステージに合わせた可能性の発揮を目指して
28	富山市立八尾中学校	校 長	横 野 誉 子	統合初年度の学校づくり
29	富山市立楡原中学校	校 長	作 道 正 也	ユネスコスクールを生かした主体的な生徒の育成
30	射水市立大門中学校	校 長	丹 羽 康 雄	伝統を尊重する中で、改善を進める学校経営
31	射水市立新湊中学校	校 長	京 角 輝 彦	生徒の主体的な学びを支援する教員の育成
32	高岡市立南星中学校	校 長	加 茂 雅 章	主体的に学びに向かう生徒の育成
33	高岡第一高等学校	校 長	南 修 朗	高一イノベーション

【個人部門】

	学校名（グループ名）	職 名	氏名（代表者名）	研 究 テ ー マ
1	富山市立堀川小学校	教 諭	森 田 みはる	自ら学ぶ力を育む 個別最適な体育科授業を目指して
2	富山市立上滝中学校	教 頭	岡 村 紀 子	生徒の主体性を生かした学力向上に関する取組
3	富山市立八尾中学校	教 諭	深 本 志奈乃	学力を高めるための授業改善と家庭学習の在り方
4	富山県立富山北部高等学校	教 諭	田 口 貴 彬	Google アプリを活用した生徒の主体的な学習に向けた授業改善
5	高岡第一高等学校	教 諭	高 田 考 太	放課後講座の運営について

◇ 課題研究奨励助成報告「優秀賞」

タブレット端末を活用した社会科授業の工夫

－ 第5学年 社会科「あたたかい土地の暮らし」の実践を通して －

黒部市立中央小学校 教諭 小川 陽 平

1 課題設定の理由

本単元では、我が国の国土の様子について、国土の気候に着目して、あたたかい土地の自然などの様子や人々の生活を捉え、国土の自然環境の特色やそれらと国民生活との関連を考え、表現することを通して、我が国の気候の概要や、人々は自然環境に適応して生活していること理解できるようにすることをねらいとしている。今年度整備されたICT環境を授業で有効に活用することによって、児童が主体的・意欲的に活動しながら学びを深めることにつながると考える。タブレット端末を活用しながら、互いに関わり、学び合いながら考えを深める授業を目指してこの課題を設定した。

2 研究実践

(1) 動画の活用

本時の導入では、3月の沖縄と富山を比べ、気候の違いを捉える学習に取り組んだ。その際、児童の興味・関心を高めるように、富山と気候が異なる沖縄の3月の海開きの写真を提示した。さらに、海開きの様子の映像を見せることによって、沖縄の暑さについてより具体的にイメージをもち、自分の考えを表現する児童の姿が見られた。全体で一つの画面に注目し、動画として見せたことで、主体的に学ぶ意欲につながったと考える。

(2) コミュニケーションツールの活用

複数のグラフから沖縄の気候の特徴を捉えた後、沖縄の家屋の工夫について考えた。沖縄の家屋の写真を見て気付いたことをワークシートに記入し、それをタブレット端末に入力させた。コミュニケーションツール「チームス」のエクセル共同編集によって、リアルタイムで互いの考えを共有することができた。早く作業を終えた児童は友達が入力した考えを見ながら自分の考えと比較する姿が見られた。自分の考えをなかなかもつことができなかった児童も、友達が入力した考えからヒントを得て、自分なりの気付きを入力しようとしていた。

1	どららの家にいるシーサーがいる	20	上の家はたかじんべんぼうがある
2	昔も今も家の壁の色は変わらない	21	上の写真は、木が濃い
3	土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	22	昔から家のたかじんべんぼう
4	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	23	名の事で、家を建てる
5	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	24	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
6	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	25	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
7	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	26	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
8	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	27	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
9	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	28	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
10	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	29	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
11	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	30	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
12	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	31	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
13	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	32	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
14	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	33	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
15	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	34	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
16	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	35	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
17	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	36	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
18	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	37	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が
19	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が	38	昔は土間と違って壁紙が、昔は土間と違って壁紙が

学級で考えを共有する
コミュニケーションツールの画面

(3) コミュニケーションツールを用いたグループ学習

資料を見て気付いたことを入力して話し合う際、グループ活動を取り入れた。画面を見るだけでなく、入力した考えを基にして話し合うことで、表現力やコミュニケーション能力等を高めることができると考える。友達と気付きを交流しながら考えを深め、学び合う雰囲気づくりができた。タブレット端末の操作について分からない児童がいると、グループの友達がさっと教える姿も見られた。共に学び合う意欲の高まりを感じた。



タブレット端末を使用した
グループ学習

3 研究の成果

- ・視覚的に見て分かりやすい図や写真、グラフ等をタブレットの活用の仕方を工夫して用いたことで、その後の学習活動も意欲的に取り組む児童が多く見られた。
- ・グループ活動やコミュニケーションツールの活用によって、友達と気付きを交流しながら考えを深めたり、自然な教え合いによってタブレット操作による学習への意欲を高めたりすることができた。

4 今後の課題

- ・資料の提示の仕方の工夫やタブレットの活用により、学習への意欲を高めることはできたが、児童の主体性を引き出すことは難しかった。タブレット端末の活用の仕方の工夫に継続して取り組んでいきたい。

理科における深い学びを生み出す教材開発

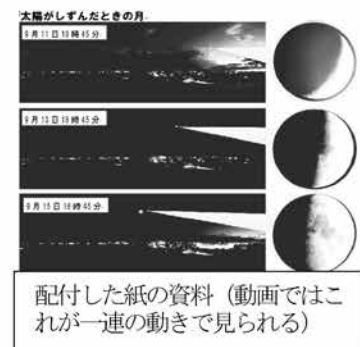
滑川市立田中小学校 教諭 武田 佳樹

1 課題設定の理由

「深い学び (authentic learning)」の原義は「その学問分野の専門家と類似した学習活動に取り組むこと」である。理科においては、科学者が現在も行っているように現象を統合的に説明できるモデルの更新活動が「深い学び」のひとつとされている。そこで、児童がモデルの更新をしていくための教材にはどのようなものがあるか、6学年「月の形と太陽」の実践から解明したい。

2 研究実践

この単元は、地球から見た月の見え方の違いを太陽との関係で追究していく学習である。そのための教材として次のようなものを10セット (9グループ分+教師用) 用意・作成した。



Aは地球儀の富山県の位置にカメラを内蔵した教材である。南極部分からUSBケーブルを出し、タブレットと接続できるようにしたことで、地球視点で月と太陽の関係を見ることができ、見え方を静止画や動画で記録できる。視野は左右145度、上75度で南向きに固定しており、南の空を東西にかけてほぼ同一視野でタブレットの画面に得ることができる。方位感覚がまだ不確かな児童への手立てとして、地球儀には方位を示した画用紙を貼り付けた。このことにより、児童は画面上で常に方位を確認できる。

児童のタブレットからは本校屋上から撮影した動画 (5日間の空の様子を2分に短縮したタイムラプス動画。月と太陽が動き、月の見え方の変化が分かる) をいつでも見られるようにした。動画は360度動画 (視野を自由に動かして方位感覚が掴みやすい。また、実際の見え方に近い) と180度動画 (南の空を東西にかけて同一視野に編集。地球儀のカメラの見え方に近い) の2種類作成し、紙の資料も同時に配付した。児童が実験で記録した動画は各々がTeamsにアップし、全体で共有した。本単元で

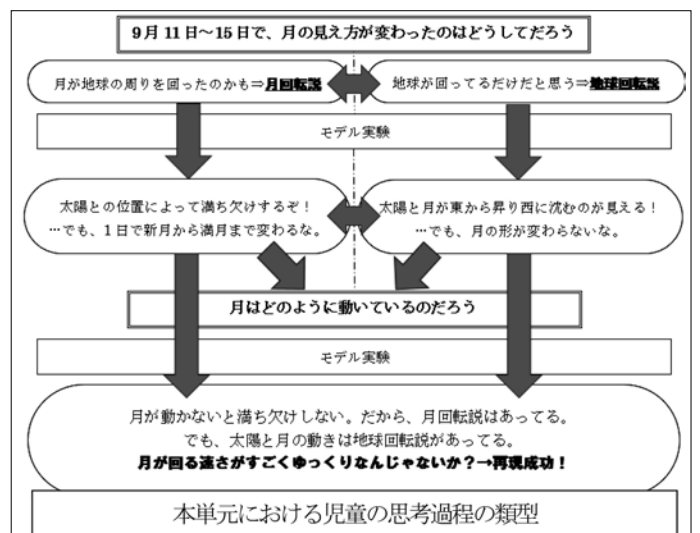
の児童らの思考過程は右のように類型化できた。

3 研究の成果

本物に近いモデル実験を可能とする教材を用意し、自然の事実と往還しながら実験することで、児童はより妥当な考えを構築していくことができる。

4 今後の課題

モデル実験をより容易なものとするため、カメラ内蔵地球儀の回転の自由度と視野の広さを高める。一人一人の学びの保証のため、より多くの実験セットを作成する。



豊かな経験を通して自分の考えや思いをもち、表現していく子供たちの育成をめざして

－ 第2学年 国語科「読んで考えたことを話そう『どうぶつ園のじゅうい』」の実践を通して －

富山市立大広田小学校 教諭 太田 風 紗

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは動物や植物への関心が高く、自然の中で出会った生き物や植物、家で飼っている動物等との関わりの中で経験したことを、友達に生き生きと語る姿が見られる。しかし、様々な生活経験をもってはいても、それらを学習内容と結び付けて考えることができない子供が多い。

そこで、遠足や家族との外出でよく訪れる「動物園」が題材になっている本教材文を通して、子供たちが、自分たちのもつ豊かな経験と文章の内容とを結び付けながら、読みを深めたり自分の考えや思いを形成したりする姿を期待し、この課題を設定した。また、説明的な文章に対して、「長くて難しい」「物語文のように感情移入することができないからつまらない」と感じ、苦手意識をもつ子供でも、前向きに学習に取り組めるよう工夫した。

2 研究実践

○ 自分の経験と文章の内容とを結び付け、獣医さんや動物に思いを寄せて考えるための学習活動の設定

本教材文は、獣医さんである筆者が「わたし」という一人称を用いて、1日の仕事を時間的順序に沿って、日記のように分かりやすく説明しており、筆者の目線になって文章を読み進めることができる。そこで、動物の命を守るために、使命感や責任感をもって日課をこなす獣医さんの仕事への熱意や、種類や個性の異なる動物に合わせて丁寧に治療をする獣医さんの深い愛情をより深く読み取るために、獣医さんの仕事を実演させた。例えば、怪我をしたにほんざるへの治療の場面の読み取りでは、実際にすり鉢を使って薬を粉にしたり、薬をバナナにはさんだりハチミツに混ぜたりする活動を行った。この活動により、子供たちは、頭がよく、味に敏感なにほんざるに適した対応をする獣医さんのすごさに気付くことができた。



〔文章の内容と類似する経験を付箋に書く活動〕

また、文章の内容と類似する経験を、付箋に書き溜める活動も行った。「私も薬の苦い味が苦手だから、にほんざるの気持ちがよく分かるな。」「ほくのお母さんは、薬をゼリーに混ぜてくれたよ。早く薬を飲んで元気になってほしいと思ってくれていたんだよ。」など、自分の経験と照らし合わせることで、動物や獣医さんに対してより共感的に思いを寄せることができた。

○ 学習を通して考えたり感じたりしたことを表現するための単元構想の工夫と言語活動の設定

単元全体を通して、子供たちの「すごい」「びっくりした」「初めて知った」などの素直な思いを大切に学習を進めた。まず、導入の初発の感想では、「思ったことカード」を使って、自分が獣医さんの仕事に対して、どのような感想をもったのか友達と交流したり、黒板に自分のカードを貼って意思表示をしたりした。この活動により、人前で発表するのが苦手な子供も、学習に参加しているという実感をもつことができた。



〔思ったことカード〕

また、単元の終末には、単元全体を通して一番心に残った獣医さんの仕事を「2年2組動物園ニュース」として発信するという言語活動を設定した。導入の際にあらかじめニュースを作ることを伝えておいたことで、子供たちは、学習に対して見通しと目標をもつことができた。最後には、Chromebookを用いてニュースを動画に残し、保護者に見せたことで、子供たちは学びの実感と達成感を得ることができた。



〔ニュースを動画に撮る活動〕

○ 子供たちの探究心を高めるための環境設定と校外学習

富山市ファミリーパークの獣医さん・飼育員さんに協力をあおぎ、文章の内容に関わる動物園の仕事や、動物の生態について詳しく話を聞いた。そして、直接聞いたことを子供たちにも伝えるために、「ファミリーパーク通信」を作成し、子供たちが毎日見ることができるよう掲示した。このように環境を工夫したことで、自分の経験に加えて、「ファミリーパーク通信」で知ったことも本文の内容と関連付けて話す子供の姿が見られた。また、校外学習では、子供たちと一緒にファミリーパークを訪れ、学習の中で気になったことを、子供たちが獣医さんや飼育員さんに直接質問した。このように、子供たちの知識や経験を増やすことで、学習への意欲がより高まった。



〔ファミリーパーク通信〕

3 研究の成果と今後の課題

文章に出てくる獣医さんの仕事を実演したり、自分の経験と照らし合わせて考えたりする活動は、文章の内容を深く読み取ったり、獣医さんの考えや動物の気持ちを共感的に理解したりすることにつながった。しかし、視覚的な情報を与えすぎるあまり、本文から遠ざかり、想像で話を進めてしまう場面が見られた。必ず本文に立ち返り、言葉の一つ一つにこだわって読むという国語科の基本姿勢を忘れてはいけないと感じた。

「考え、議論する道徳」の実現に向けた具体的手立てについて

富山市立八幡小学校 教諭 高野 昌幸
(R3 高岡市立能町小学校での実践)

1 課題設定の理由

私は、道徳科の授業が児童の人格の形成や学級経営に大きく影響を与えられると考えている。そのためには「考え議論する道徳」の実現が必要である。児童が自分事として主体的に「考え」、友達の発する多様な考えに触れて「議論する」ことにより、これまでの考えが覆るような気づきや、元々抱えている価値観が強化されるといった「深い学び」が実感できる道徳科の授業の実践を目指し、本課題を設定した。

2 研究実践

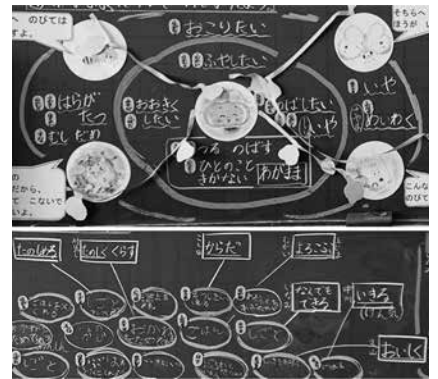
(1) 教材理解を深めるための具体物の提示と動作化の導入

1年生の発達段階では、教材の理解度が児童によって大きく異なっている。クラス全体の教材文の共通理解を図った上で授業を進めないと、考えをもつことができなかつたり、的外れな考えになってしまうことが分かった。そのため教師の範読だけでなく、具体物の提示や動作化を導入し、教材理解を図ることにした。『はしの上のおおかみ（親切、思いやり）』では、一人一人がやっと通れるくらい一枚板を用意し、その上で教師がくま役となり、おおかみ役となった児童を抱きかかえて橋を渡らせる動作をした。教材の場面を再現したことにより、おおかみの心情を考える手掛かりとすることができた。

(2) 視覚的な価値理解をねらった構造的な板書

『かぼちゃのつる（節度、節制）』では、わがままを続けるかぼちゃを中心に置き、その周りを登場人物が囲む形の二重円状の板書を試みた。わがままがいかに自分中心であり、他者を困らせる行為であることを視覚的に捉えさせることができた。

『大すきなぞく（家族愛、家庭生活の充実）』では、マッピング形式の板書を試みた。家の人や家族のためにしている行動と、その意図との繋がりを捉えやすくなるように示した。「他にもこんな考えに繋がるよ」とさらに多様な考えを引き出すことができた。



(3) 教科等横断的な指導から生まれた効果

他教科やその他の教材に関連させることにより、道徳科での学びがさらに発展すると考えた。『まりちゃんとあさがお（生命の尊さ）』では、生活科で行ったあさがおの栽培経験から登場人物の心情を結び付けて考えさせたり、「いのちのまつり」の絵本を用いたりして、生命の有限性と連続性を捉えさせることができた。「命って今までも繋がってきたし、これからも繋がっていくんだ」と、命がなぜ大切なのかに対する考えに深まりが生まれた。



(4) 内容項目自体をテーマにした中心発問

「本当にそうなのか?」「正しいと思っていたけれど、実は違うかもしれない」と児童の心情を揺さぶる発問をすることにより、主体的に考え、友達の考えを聞きたいと思えるようになる。内容項目自体をテーマにして発問することにより、そのような状況をつくり出すことができた。『虫が大すきーアンリ・ファブルー（自然愛護）』では、「観察をするためにたくさんの虫を捕まえることは、よいことでしょうか」と発問した。始めのうちは、生活科で虫探しをした経験からよいことと考える児童が多かった。しかし、次第に虫の立場になり「知らないところに連れて行かれる」「狭いところに閉じ込められる」と考える児童が出てきた。一つの視点だけでなく多様な視点で物事を捉えることが大切であることを児童自らが気付く機会となった。

3 研究の成果

- ・具体物の提示と動作化の導入により、場面を映像として捉えることができ、教材理解につながった。
- ・板書を構造的に構築することにより、人物の行動と心情の関係性がより深く捉えられたり、友達との考えの比較ができた。より活発な意見の交流ができた。
- ・教科等横断的な指導を工夫することで、学びの補充や発展に生かすことができた。
- ・内容項目をテーマにした中心発問により、当たり前だと思っていたことが覆られるような現象が生じ、多様な考えを出させることができた。

4 今後の課題

1年生の発達段階では、問い返しても答えに詰まったり、論点のずれた考えを出したりすることがあり、教師の問い返しに課題があると感じた。内容項目を自分なりに分析し、児童の実態に合わせた一時間のねらいを具体的に設定し、それを基にした発問を精選していくことが大切であると考えた。ねらいに迫った問い返しにより、児童の考えに深みをもたせて、更に「考え議論する道徳」の実現を目指していきたい。

児童が外国語を用いて生き生きとコミュニケーションを図ろうとする授業づくり

－「伝えたい」欲求を高めるためのChromebookを用いた実践から－

富山市立新庄小学校 教諭 上野 友里愛

1 課題設定の理由

本校の高学年児童は、外国語に関心をもち、楽しみながら歌やチャンツ、ゲーム等に取り組んでいる。また、外国語で話される短い紹介文や会話に耳を澄ませ、知っている言葉を聞き取ったり進んでメモをとったりする児童もいる。しかし、「話す」学習では、外国語を用いた発表ややりとりで自信がもてず、苦手意識や恥ずかしさを感じる児童もいる。そこで、外国語を用いて自分の言いたいことを発信したり友達の言いたいことを理解したりすることの面白さをどの児童も感じ、中学校への学習意欲につなげてほしいと考え、児童が外国語を用いて生き生きとコミュニケーションを図ろうとする授業づくりを目指した。さらに、児童の関心が高いChromebookを用いて、「伝えたい」欲求をより高めることができたかと考え、この課題を設定した。

2 研究実践

〈準備・発表の様子〉

(1) 本当に言いたいことを伝え合うためのGoogle検索、Googleスライドの活用

外国語科の言語活動で大切にされる、「児童が本当に言いたいことを伝えられる」ことをねらい、6年生Unit3「Let's go to Italy.」、Unit4「Summer Vacation in the World.」の単元末に、Googleスライドを用いた発表を取り入れた。

Google検索で知りたいことや伝えたいことの英語表現を調べることが容易になり、一人一人の「伝えたい」思いを反映した発表内容が可能となった。言いたいことを伝えるために、新しい単語を積極的に調べて取り入れようとする前向きな児童の姿が見られた。聞き手の児童にとっては知らない言葉が増えることとなったが、Googleスライドを用いて画像を提示しながら話すことによって、日本語の説明を介さずに友達の伝えたいことを理解することができた。話す児童、聞く児童、両者にとって達成感を得られる活動になった。



(2) 自信をもってよりよく話すことを目指し、繰り返し練習するための動画の活用

「伝えたい」欲求を高めてコミュニケーションの面白さを感じさせるためには、外国語で話すことへの不安を軽減させ、自信をもって話すことができる準備が必要であり、大きな課題でもあった。

そこで、聞き手を意識した話し方を考えられるように、自分が話す姿を動画で撮影することにした。撮影した動画を見ることにより、自分の発表がどのように聞こえているか、聞き手の立場に立って自分自身で振り返ることができた。さらに、納得できるまで何度でも繰り返し撮影・見直しができるという点で動画の活用は効果的だった。

外国語の学習に前向きに取り組んできた5年生A児は、動画を用いた練習を終えて「たくさん練習できてよかった」と振り返った。その後、休日の課題として提出した動画に教師がコメントをすると、助言した点を改善した動画を再び提出するなど意欲的に取り組んでいた。また、5年生B児は、人前で発話することに苦手意識があったが、動画練習を通して授業中や家庭で前向きに練習しようとする姿が見られた。発表後には、よりよく話せるようになった成長を実感し、次回への目当てをもつことができた。6年生C児は、動画を見返すことで自分の発音の正確さに対する気付きがあり、それを発表に生かそうとするなど、よりよい発表を目指して試行錯誤していた。外国語で話す児童のレベルは様々であるが、どの児童にとっても自分なりに成長を実感できる手立てとなった。

〈振り返りのワークシートより〉

5年生B児：

〔練習後〕 紹介を練習してちょっと覚えたので、家でいっぱい練習したいです。

〔発表後〕 前より大きな声でしゃべれたと思いました。次は相手の方を見てしゃべることをがんばりたいと思います。

6年生C児：動画を撮って見てみると、ateとeatがあやしかったり、カタカナの発音になっていたりしたので、次回は発音に特に気を付けて発表したいです。

3 研究の成果

- Chromebookを用いて一人一人が調べたり自分が本当に言いたい内容を工夫したりすることが、児童の「伝えたい」欲求を高めることにつながった。また、Googleスライドで視覚的な支援を取り入れることによりできる限り外国語のみを用いて伝え合い、児童が達成感を得られる活動となった。
- 動画撮影を活用することで、児童が自分の話し方を客観的に振り返り、自分なりによりよい話し方にしようと繰り返し練習することができた。成長を実感し、自信や今後の取組への意欲につながった。

4 今後の課題

- スライドを見せることで聞き手の理解を助けることができたが、小学校の外国語科で大切にされる「聞くこと」に集中しづらくなった可能性がある。スライドの取り入れ方を検討する必要がある。
- 画像を貼り付けるだけの簡単なスライドにする予定だったが、画像を増やしたり文字を入れたりしてこだわって作りたいと考える児童が多く、想定していたよりも発表準備に時間がかかってしまった。児童の希望を取り入れながらも、「外国語を用いて友達に伝える」という本来のゴールとのずれが生じないように計画を立てるべきである。
- 5年生児童に比べ6年生児童は、自分が話す様子を撮影することに恥ずかしさを感じている様子だった。動画を見返すことで発表をよりよくしようとする児童の姿を学級で積極的に共有し、そのよさを感じられるように促したい。また、教師がこまめに動画にコメントを返すことで、自信をもたせながら継続して取り組ませていきたい。

身体全体を使って造形活動に取り組むことで、主体的に学習する子供の育成

－ 第2学年図画工作科「海の中の生きもの」の実践から －

富山市立堀川小学校 教諭 長谷川 仁 義

1 課題設定の理由

本年度、2年生を担任することになった。子供たちは、これまでの経験を基に学習への意欲をもちながら、新しいクラスで仲間との関わりや自分の存在感を求めているようにしている。そんな子供たちが、身体全体を使って造形活動に取り組むことで、自分の造形への思いを深め、仲間の作品や仲間の存在を確かに感じ、大切にしながら主体的に学習しようとしていくことを願い、本課題を設定した。

2 研究実践 ー第2学年図画工作科「海の中の生きもの」ー

(1) 子供が身体全体を使って活動に浸ることのできる材と場の設定

海の中の生物は実に多様な形や色を有している。海の深度によってもその形や色は異なり、深海の生物や海洋の生物、熱帯魚等それぞれが多様で特徴的な形や色をしており、子供の造形を包みこむ懐の深さがある。本題材では3階の階段から1階まで、階段を活動場所として設定した。第1時では、3階から1階に向けて深い海に潜っていくことを子供が実感するよう、教師はシュノーケルを身に付けながら活動場所を案内し、場の設定の理解を図った。また、壁面に白模造紙を貼り、明度を変えた青系色の共同絵の具を用意した。子供たちは海の深度による色遣いを工夫し、青の中に様々な色があることを体感することで色に気付いたり、活動場所としての「海」を自分のイメージで作上げたりすることができた。

Nさんは、深さのある活動場所の設定から海のイメージを確かにしながら、広いキャンバスに身体全体を使って色をのせた。絵を描くことに苦手意識をもっていたNさんだったが、浅い海で活動を続け、浅い海ならではの明度の高い海の色や鮮やかな色をもつ魚を描く活動に取り組む中で、水彩絵の具の出す色の違いに気付き、意欲的に色と関わり、色の面白さを感じることができた。このように、深海の暗い色を塗ったり、深海魚を描いたり、浅い海で明るい色や海洋魚を描いたりするなど、それぞれの造形活動が展開された。

(2) 子供が自分の願う活動に取り組むための指導・支援の工夫

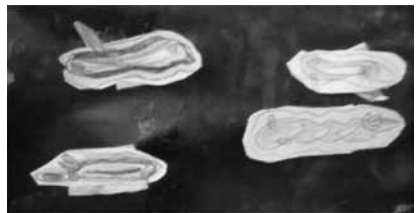
本題材では、毎回の活動後に思ったことや、次へに向けて考え始めていることをノートに書いて残していった。子供たちは蓄積されていくノートを読み返すことで、前回の活動を振り返り、目当てをもって活動に取り組むことができた。また、海の中の生物の図鑑を数冊置いたり、Chromebookで画像検索をしたりした。

Yさんは、初めはなかなか作品を作り出さず、活動場所を歩き回るだけだった。しかしYさんのノートを読みると、仲間の活動や作品、図鑑や画像等を見て、仲間の凄さや生き物の色、形を感じていたことが分かった。そこから、Yさんは能動的に鑑賞活動をしているのだと捉え、Yさんと仲間の作品について語り合ったり、見つけたことについて褒めたりするのを続けた。そして題材の中盤に、教室に設置したウミウシの図鑑を手に「私ウミウシつくる」と話したのであった。それまでほとんど作品を作らなかったYさんだったが、この時から休み時間も使いながら、意欲的にウミウシを描いていった。仲間からの刺激をもらいながら、じっくりと自分の表したいことを考えるといったYさんならではの取り組み方だったと考える。このように、多くの子供が自分らしく活動を進められるための材料を設置した上で、一人一人の願うことを活動中の姿やノート、日々のくらしから総合的に指導・支援していく。そうすることで子供は自分らしい歩みで学習に取り組むことができる。



今日、3階で色を混ぜて塗っていました。多めの白と、ほんっと少しの水色と青の色を混ぜて、水を普通より少なめで、そしたらただの水色のうすいものでした。今度は、青を少しだけ足してやりたいです。そしたら、どうなるかな。楽しみだな。色って面白いんだなあ。

【Nさんの作品の一つと5月18日(火)活動後のノート】



【Yさんの作品の一部】

3 研究の成果

- ・ 題材の特性を生かした場の設定を工夫することで、子供は身体全体を使って主体的に造形活動に取り組むことができる。
- ・ その子の願う造形活動を喚起するための指導・支援を行うことで、子供は自分らしい歩みで活動に取り組む。また、そうした経験の積み重ねが、子供の主体性を育むと考える。

4 今後の課題

- ・ 様々な場所で子供たちは活動していた。そのため子供一人一人の活動の様子や作品づくりの過程等における声かけや支援のタイミングを逸することがあった。

必要感の高まりから、学習の本質に迫る子供の育成を目指して

－ 第6学年 外国語科・総合的な学習の時間「People living in the world」の実践から －

富山市立堀川小学校 教諭 杉本 菜由

1 課題設定の理由

なぜ英語を学ぶのか。中学校への進学を控える6年生の子供たちにとって、実感を伴いながら英語の魅力や、英語を学ぶことのよさを見いだしていくことが、大切だと考える。そのために、英語を使う必然性や必要感が動機となって外国語科の学習を進めていけるようにしたいと考えた。そこで、世界の様々な文化を知り、そこに生きる人々との交流を通して、英語を学ぶ意義を実感していくとともに、自他を尊重し合う姿を願い、外国語科・総合的な学習の時間において「People living in the world (世界に生きる人々)」の単元を設定し、以下の実践を行った。

2 研究実践

(1) 総合的な学習の時間と外国語科を組み合わせた単元構想

学習の1時間目には、①単元名「People living in the world」(世界に生きる人々)、②世界地図、③協力してくれる5人の外国人(中国・タイ・インドネシア・ドイツ・ポーランドの5か国)を紹介し、そこから考えたことや想起したことを聞き合うことで、子供たち一人一人が、世界の国々や、そこに生きる人々について自分の興味をもった視点から学習を進めていけるようにした。総合的な学習の時間において世界について知る中で、外国の人と関わりたいという気持ちを強め、外国語科において、実際に関わっていくために英語を学ぶ必要感から英語の力を高めようとする姿を期待し、単元を設定した。(資料①)



資料① 提示した5人の協力員

(2) オンラインでの、外国人協力員との交流の機会の設定

世界の国々や人々について学習する中で生まれた、世界に生きる人々とつながって「話したい」「聞きたい」という思いや願いの高まりに合わせて、協力員とのオンラインによる交流の機会を設けた。子供たちは、協力員の人と話すために、今まで学習した英語を復習したり、新しい英語表現を調べて練習したりするなど、英語を使う必要感を高め、自ら言語学習を進めていった。(資料②)



資料② オンラインで協力員の外国人と話す子供

(3) よりよいコミュニケーションをしていくための工夫

子供と協力員の人のやりとりの様子は録画しておき、クロムブックのクラスルームでいつでも見られるようにした。そうすることで、何度も録画を見て英語を聞き、相手から話してもらったことを分かろうとしたり、自分の話がより相手に伝わるよう、英語と母国語の両方を紙に書いて伝えたりするなど、よりよいコミュニケーションを求めて工夫する姿が見られた。(資料③) また、協力員との関わりを通して、英語のよさを感じている子供も見られた。(資料④)



資料③ 相手に伝わる工夫をする子供

資料④ 子供のノート記述 (一部抜粋)

- ・私は、英語がもっている力はすごいと思います。私は英語を習っているのは、世界の人とつながるためだと考えています。
- ・英語を話すことで、世界の人とつながれると思ったので、授業などでしっかりと英語を学んでいきたいと思いました。自分の英語で通じることができるといいなと心配なところもありましたが、意外と通じましたし、外国の方と話すことは楽しいと感じました。
- ・私は外国人の人と英語でつながれるのはすごいと感じました。ポーランド語では全く聞き取れないし何を言っているかさっぱり分からなかったのに、英語になると両方の言っていることが分かって、会話できたからです。でも、その人の母国語で話すと親近感が湧くと思うのであいさつや自己紹介等は母国語で話してみようと思いました。

3 研究の成果

- ・5人の外国人との関わりを通して、英語という言葉の魅力を感じたことで、英語の力を付けていきたいという気持ちが高まったり、日頃の外国語の授業に意欲的になったりするなど、進んで英語を学ぼうという姿が見られた。
- ・自分や相手の国の言語や文化を大切にしながらも、国際的なコミュニケーションにおける「英語」という共通言語の有用性について、実感を伴いながら見いだすことができた。

4 今後の課題

「People living in the world」という単元名から、子供たちが世界の様々な文化や言語に関する内容に興味・関心を持ち、調べる活動が充実した一方、コミュニケーションをとる必要感が生まれづらい状況もあった。より外国の人との関わりから文化の違いを実感できるような場を充実させ、コミュニケーションへの意欲を高めていきたい。

子供たちが主体的・対話的に話し合うための教師の手立て

－ ICT機器を活用した生活科「わたしたちの野菜いばたけ」の実践から －

富山市立速星小学校 教諭 嶋津 弘文

1 課題設定の理由

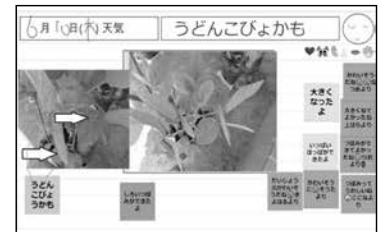
本学級には、生活科が好きな子供が多い。1年生の時には、朝顔を育て、その成長の変化を楽しみにしながら、毎日世話をしてきた。植物や野菜の世話を熱心に行う一方で、育てている植物や野菜に対する自分の考えや思いを友達に伝えることには苦手意識をもっている。また、友達の話聞いて自分の取り組みを見直したり、自分の取組に生かしたりしている子供は少ない。そこで、ICT機器を有効に活用して対話的な学びができれば、自分の考えや思いを進んで伝え合うことのよさを感じ、話し合ったことを今後の自分に生かそうと考えることができるのではないかと考え、この課題を設定した。

2 研修実践

(1) 自分の野菜に愛情を持つ導入の工夫

子供たちは、本やクロームブックを使って、夏野菜について調べ、その中から、自分の育てたい野菜を決めた。育てる野菜を決める際に、収穫したら誰と食べるのかを考えさせたことで、「妹が好きだからトマトを育てて食べさせたい。」等、収穫への思いをもって野菜の栽培を始めることができた。

校外学習で、校区内の園芸店に野菜の苗を買いに行き、買ってきた苗を自分の鉢に植える体験をした。「自分で選んだ野菜」を「自分で買いに行き」、「自分だけの鉢」に植えることで、「自分だけの特別な野菜」になり、愛情をもって育てることができた。



〈写真1 jambordでつける野菜日記〉

(2) ICT機器を活用した話し合いの工夫 (写真1,2)

野菜の日々の成長をクロームブックの写真機能とGooglejamboardを活用し、観察日記をつけた。写真を使うことで、野菜の様子を鮮明に記録することができ、絵で記録することが苦手な子供も日記をつけることができた。また、子供たちは、日記を見返すことで野菜の成長の変化に気付いたり、自分のしてきた世話の仕方を振り返ったりすることができた。そして、「野菜に虫がきて、葉が食べられた」等、子供が野菜の栽培をしていて困ったことについて観察日記の写真を見せながら話すことで、言葉の説明だけでは理解することが苦手な子供も話し合いに参加することができた。

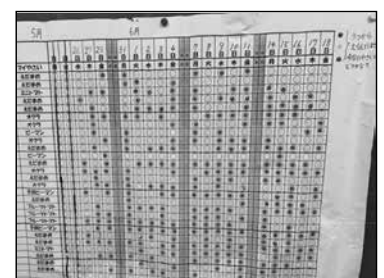


〈写真2 日記を使って説明する子供〉

(3) 友達の活動や思いに気付く掲示物の工夫 (写真3)

毎日、野菜の世話をした後に、その時の気持ちを3段階（赤…うれしい。黄…いつも通り。青…かなしい。）で、掲示物に表した。そうすることで、以下のような関わりが生まれた。

A児：赤シール(うれしい)だったけど、いいことあったの？
B児：虫が葉っぱにたくさんいたけど、虫がこなくなったよ。
A児：よかったね。なんかしたの？
B児：酢をかけたよ。



〈写真3 友達の活動に目を向ける掲示物〉

互いの取組の様子や、野菜に対する思いを知る関わりが生まれたことで、互いに成果を認め合ったり、励まし合ったりすることができた。

3 研究の成果

ICT機器を活用し、Googlejamboard上で意見を共有することで、自分の意見をもつことに苦手な子供でも、友達の意見を参考にして、考えることができた。観察日記をデータ化したことで、過去の野菜を見返したり、比べたり、友達に見せて説明したりすることができたと考える。

また、クロームブックの共有機能や、掲示物等で友達の意見や取組をすぐに見えるようにしたことで、友達の悩みを分かろうとしたり、一緒に解決するために考えたりする姿が見られた。

4 今後の課題

本実践では、野菜を育てている中で出てくる個人の悩みをICT機器を活用し、クラス全体で共有して話し合った。このことは、個人の悩みをクラス全体の課題として取り上げる際に、内容を理解する支援となった。しかし、悩んでいる子供の思いを引き出すためには、教師の切り返しや全体に広める手立てが必要であると実感した。今後は、ICT機器を有効に活用しながら個人の思いをクラス全体に広げ、課題として設定できる支援を追究していきたい。

大切な仲間と一緒に伸びる学級づくり

－ 主体的・対話的な学びのために必要な土台として －


富山市立八尾小学校 教諭 永原 枝里子

1 課題設定の理由 実態等

1年生の子供たちが、主体的・対話的な学びを実現するためには、誰とでも関われる関係づくりが土台として必要であると強く感じる。しかし、本学級の子供たちは、男女に分かれた特定の友達同士で関わるが多い。先行きが見えないコロナ禍の中、子供たちが思いを自由に伝え合い、大切な仲間と一緒に伸びることのできる、豊かな人間関係が形成された学級をつくりたいと思い、この課題を設定した。

2 研究実践

○は実践した活動、⇒は見られた効果

	日常生活でのつながり	学習でのつながり
1 学 期	<p>○「ぴかぴか！めざせあいさつ名人」 自分から進んであいさつができるよう、学級全体で取り組む。学校全体で取り組むあいさつ運動での振り返りを生かす。 ⇒誰とでも話せるきっかけづくり ⇒あたたかい雰囲気づくり</p> <p>○「友達のよいところみつけ」 一日に一人の友達の素敵なところを、学級のみんなで見付け合う。帰りの会でそれを発表する。 ⇒友達のよいところをまねしたいと思ったり、自分のよさに気付いたりするきっかけづくり</p>	<p>○「目ビーム！おへそビーム！心できこう」 話を聞くときは、体を向けて相手の顔を見て、話を聞こうという態度を示す。話すときは、はきはきと相手に届く声で話す。友達の伝えたいことが届いたときはうなずく。 ⇒学習の基本となる聞く態度、話す態度の育成</p>  <p>「友達のよいところみつけ」を通して交流する子供たち</p>
2 学 期	<p>○「さかせよう！ほかほかフラワー」 1学期に挙げた『学級に広めたい五つの言葉』を言うことができたなら、花びらにシールを貼っていく。 ⇒温かい言葉であふれる学級の雰囲気づくり ＝ステップアップ！</p> <p>○「スペシャル！友達のよいところみつけ」 毎朝、友達の名前のくじを引き、その友達に温かい言葉をかけたり、よいところを認めるような言葉をかけたりする。帰りの会で、何ペア見付かかったかを日々記録し、記録の向上をねらう。 ⇒誰とでも関われるきっかけづくり ⇒友達のよさに気付けるきっかけづくり</p>	<p>○「心と心で、きこう・つたえよう」 友達の発表後に、ハンドサインを出す。(そう思う、似ているよ、ちょっと違うかな) ⇒マスクをしていてもできる意思表示 ⇒友達の思いを聞こうという姿勢づくり ＝ステップアップ！</p> <p>○「キラキラさんを見つけよう」 学習の終末時に、発言や行動などから、学習に一生懸命取り組んでいた友達を見付けて発表する。 ⇒友達のがんばりに注目するきっかけづくり ⇒学習意欲を引き出すきっかけづくり</p>

①あたたかい雰囲気づくり
②誰とでも対話できるきっかけづくり
③毎日のグループアクティビティでつなぐ絆の重要性

3 研究の成果

休み時間の様子を見ていると、1学期と比べて特定の友達だけでなく、いろいろな友達と話している様子が見られるようになってきた。学校が楽しいかどうかのアンケートで、以前は「友達がいないから全然楽しくない」と言っていた子供も、「楽しい」と言えるようになってきた。このように友達との関わりが増えたことで、相手が誰でも自分の思いを伝えようとする姿が学習の中で見られるようになった。また、思いをうまく伝えられない子供は、周囲の子供の助けを借りながら自分の思いを表現しようとする姿を見せるようになった。

4 今後の課題

3学期に向けて、少しずつ上記の取組内容がステップアップしていくため、取組への難しさや抵抗感を感じている子供がいないかに配慮して観察する必要がある。また、築いた絆をもっと深められるように、あいさつ名人率アップや小テスト全員合格等、学級における成功体験を増やしていきたい。

聴き合いを通して、学びを深める子供の育成

－ 体育科表現遊び「海のすばらしい生き物たちになりきろう～スイミーを元気に～」の実践から －




富山市立新保小学校 教諭 小澤 昭 吾

1 課題設定の理由

本学級の子供たち(2年生)は、明るく友達と協働できる子供が多い。友達の考えに耳を傾け、聴き合うことができることが本学級の強みになりつつある。多様な見方や考え方に触れることができる聴き合いの場を生かして、子供自身が自分や友達のよさに気付くことで学びを深めていく姿を期待して本課題を設定した。

2 研究実践

(1) より実感を伴った聴き合いが生まれる場の設定

<p>ウォーミングアップの作成を通した聴き合い</p>  <p>色団ごとに、題材の特徴を捉えて表現するための跳ぶ、回る、這う等の技能が詰まったウォーミングアップを作成した。それぞれの技能に対する見方、考え方について試技を通して聴き合うことができた。</p>	<p>経験や思い出を基にした聴き合い</p>  <p>班ごとに表現活動を行う場所に掲示する海の世界が描かれた背景を作成した。水族館に行った経験や海で捕まえた生き物について語り合いながら、1枚の画用紙に海の世界を描いた。互いの海の生き物へのイメージを聴き合うことができた。</p>	<p>イメージしやすい題材で行う表現遊びを通した聴き合い</p>  <p>国語科教材「スイミー」に登場する海のすばらしい生き物たちの表現カルタで表現遊びをした。「顔を見る頃にはしっぽを忘れてるほど長いうなぎ」のカルタでは、一人では表現できないと話した結果、みんなで作って表現していた。</p>
--	---	--

(2) 聴き合いが、子供の学びの深まりにつながるための学習サイクル(下図)

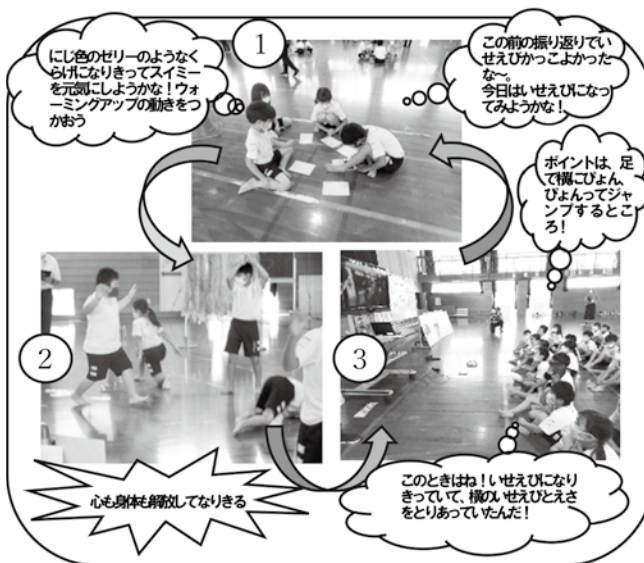
- ① イメージカルタを活用して生き物の特徴を自分なりに想像したり、班で共有したりする。
- ② スイミーを元気にするために、海のすばらしい生き物たちになりきる。
- ③ スイミー役の教師が撮影した動画を見て、なりきりポイントやすてきなところを聴き合う。

聴き合いが子供の学びの深まりにつながるためには、聴き合いで得た新しい気付きや感動を自分なりに表現できることが重要であると考えた。A児は普段、体育科に限らず自分を表現することが苦手である。特に表現遊びのように全身を使って、なりきることに没頭するような活動では、恥ずかしさや自分がどのように動けばよいかかわからない怖さから、固まってしまう姿が見られていた。そのようなA児の振り返りからA児の学びの深まりを考察する。

今日は、いせえびをするのが楽しかったです。Bさんがやっていたいせえびを真似するのが難しかったです。

今日はエイになるのが難しかったです。手を上に挙げてジャンプしました。これからもいろいろな動きをしたです。

A児は聴き合いの場を通して表現遊びに没頭する友達の表現や考えに触れてきた。単元の初めには、固まっていたA児であったが、③の活動でいせえびのなりきりポイントについて語ったB児の真似をしたことへの感想や次の活動への意欲の高まりが伺える記述から、自分なりに表現遊びに没頭し、表現することの楽しさを感じることができていたと考える。またA児のいる班がA児の真似をする等、A児の学びが他の子供へ広がる様子も見られた。①～③の活動を繰り返し行うことでA児のみならず、他の多くの子供の学びの深まりにつながった。



3 研究の成果

- ・実際に動きながら感じたことを話したり、経験や国語科等で共通のイメージのある話題を基に話したりすることで、より実感を伴った聴き合いの活動を行うことができた。
- ・実感を伴った聴き合いの先に、そこで得た学びを表現する場を繰り返し設けることでA児のように友達から学び、その学びを広げながら子供同士で学びを深めていくことにつながる。

4 今後の課題

学びの深まりを外から見てとることはできたが、子供自身がどのように感じているのか明らかにすることができなかった。聴き合いを通して、子供が学びを深めて行く中で子供自身が自分の学びをより実感できるような取り組みにしていきたい。

互いのよさを認め、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成



富山市立古沢小学校 教諭 麻生 有希
(R3 富山市立新保小学校での実践)

1 課題設定の理由

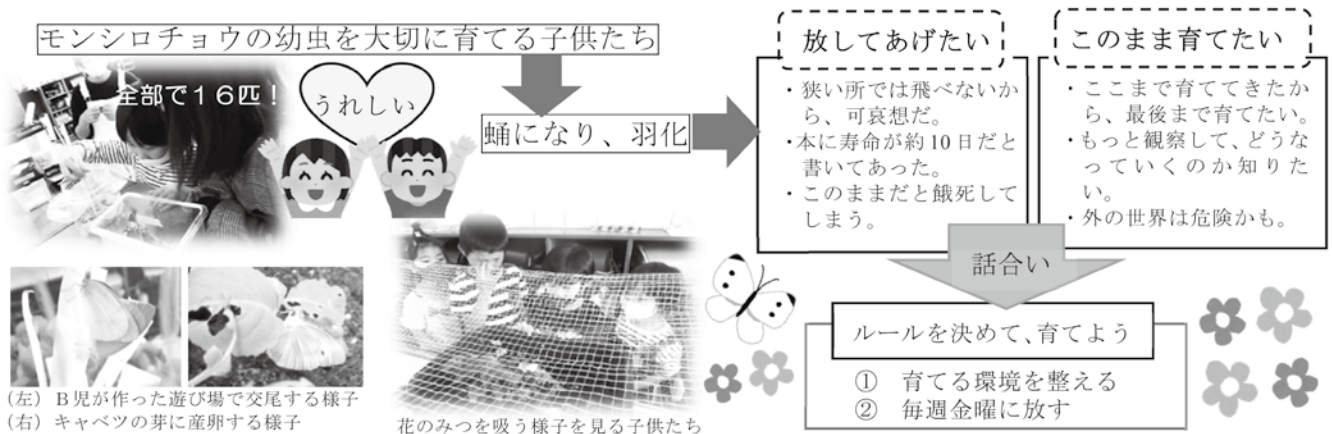
本学級には素直で明るい子供が多く、仲も良いが、声が大きく自分と異なる意見を最後まで聞かずに反発することのあるA児や、クラス替えによって、学校に不安が大きいB児のような子供もいる。温かい雰囲気の中で、子供同士がよさを認め合えれば、安心して考えを表現しながらのびのびと学び合うことができると考え、本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 関わることで自分や友達のよさに気づき、認め合うことができるための温かな雰囲気作り

「お話タイム」…子供たちは、1年生の時から朝の会などで行っている。気軽なテーマで行うことで、話すことや聴くことに慣れたり、友達により興味をもったりできるように今年度も続けている。		「3の2 花さき山」…道徳科で取り上げた教材「花さき山」になぞって、クラスで行っている。自分のがんばりや友達のよさを見つけたら花型の画用紙に記入して貼り、内容を帰りの会で伝え合う。	
---	---	--	---

(2) 主体的・協働的に学ぶための学習環境の工夫 (理科「チョウを育てよう」より)



羽化したチョウをどうするかで話し合いを行った。B児は、たまごの時から積極的に世話をしていた。そのため、人一倍「育てたい」という思いが強かった。一方、A児は放してあげることがチョウのためだと強い口調で発言し、なかなかまとまらなかった。話し合いを続ける中で、C児が、「ちょっとだけ育てて、何日かしたら放せばどうか。」と提案したことをきっかけに、「命なのだから環境は整える」ということを条件として育てることになった。

子供たちも休み時間に花を摘んできたり、キャベツの種をまいたりと主体的に行動した。B児はチョウのために遊び場を紙で作っていた。その遊び場で2匹が交尾したり、産卵したりする様子を間近で見ることができた。そして、そのたまごをまた育てるという経験から、命はつながっていくことを実感していた。さらに、五感を働かせ、アイデアを出し合いながら学習を行うことで子供たちは満足感や達成感を得ることができた。

3 研究の成果

(1)では、互いのことを大切にしながら関わる姿が多く見られるようになった。B児は、友達と関わる経験を多くもつことで、自分の思いを友達に話すことを好み、ペアやグループ活動でも、積極的に発言する姿が見られた。

(2)では、A児のチョウの学習の振り返りにおいて気持ちの変化を感じることができた。「最初は放してあげたいと思っていた。交尾が見られたのがうれしかった。育ててよかった。」と明るく発言したA児は、徐々に友達の意見や考えを受け入れ、さらに自分の考えを広げている様子が見られるようになってきている。さらに、B児作の遊び場には「すごい!」という声が多かった。B児は、自分のよさを生かしながら友達と関わる

中で、学校を「楽しい」と言うことが増えた。目の前の小さな命と向き合いながら、自分だけでなく相手のよさを感じる活動を続けることで、クラス全体としても、互いのよさに対して素直に反応し、つぶやく声が増えている。

4 今後の課題

チョウを育てたことは、A児にとっては考えが広がり、よい経験となったと思われる。また、B児にとっても学校に



話し合いで相手の目を見て聴くA児

伝えること、聞くことを通して、コミュニケーションを楽しむ子供の育成を目指して － 外国語活動「This is my favorite place.～ぼく・わたしの好きな場所に連れて行くよ～」の実践から －

富山市立奥田小学校 教諭 中村麻裕

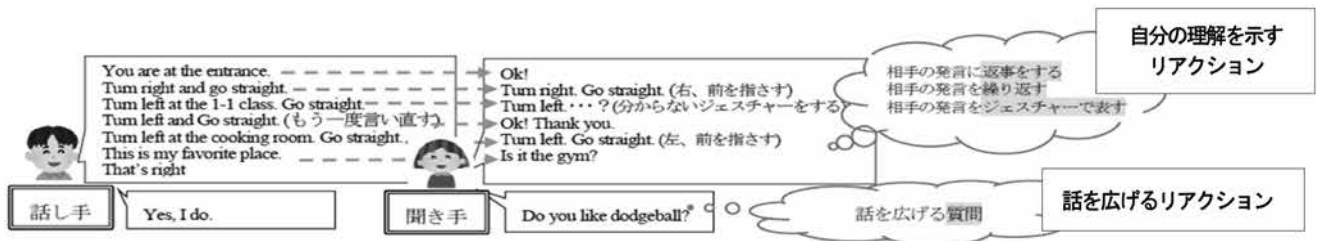
1 課題設定の理由

本学級の子供は、6つの目当て (clear voice/eye contact/smile/gesture/only English/Reaction) を全ての単元を通して意識し、学習してきた。しかし、やり取りの中のリアクションとしては“Wow!” “Nice!”等の一方的な反応に留まることが多く、話を広げる表現は見られなかった。またリアクションがなく、一方的な話になることもあった。そこで本単元では、リアクションに焦点を当て、互いの考えや気持ちを伝え合い、コミュニケーションの楽しさを実感できるようにしたいと考え、この課題を設定した。



2 研究実践

本単元では、下の図のように、「友達の話聞きながら反応し、さらに感想を伝えたり、質問をしたりして話を広げる子供の姿」を目指した。そのために、以下のような手立てを用意した。



① 自分の理解を示すリアクションの重要さに気付く場の設定

言語活動の前に、上の図のようなやり取りをした教師のデモンストレーションの映像を見て、気付いたことを話し合う場を設定した。子供たちは、聞き手のリアクションについて、ただ聞くだけでなく、“Ok.” “Yes.”と相槌をうつ、頷く、相手が言ったことを繰り返す、ジェスチャーで表す等のことをしていることに気付いた。また、それにより相手の話す内容を自分が理解できていることを示すことができるということにも気付いた。そこでこれらのリアクションを「分かっているよサイン」と名付け、子供たちと共有し、意識して活動に取り組めるようにした。



【分かっているよサインをする子供】

② 話を広げるリアクションが生まれるようにするための目的の設定

本単元では「お互いことをもっと知るためにお気に入りの場所について伝え合おう」という単元の課題を提示した。「お互いのことをもっと知るため」という目的を設定することで、「好きな理由を尋ねる」「自分の気持ちを伝える」等のリアクションをする必要感が生まれた。その結果、A児、B児は右のような振り返りをし、主体的にリアクションをして相手のことを知ろうとする様子が見られた。

<A児>
友達のことをもっと知るために“Why?”と聞いてみました。

<B児>
友達が“Me too.”と言ってくると、好きなことが同じだと分かって嬉しかったです。

【振り返りシートより】

③ 話を広げるリアクション表現を言語活動に繋げる中間指導

言語活動を2回に区切り、その間にコミュニケーションにおける友達のよさ、困り感、工夫等を共有し、後半の言語活動に繋げる場として、中間指導を組み入れた。そこでは、右図のような考え等が生まれた。知っている表現の中で、ジェスチャーを使う等の工夫をしながら話を広げようとする様子であった。



3 研究の成果

子供が一方的な発表に留まることなく、相手を意識し伝え合うことを楽しむためには、相手の話への理解を示すリアクションの重要さに気付く場、話を広げるリアクションをする目的、表現を広げる中間指導を設定することが有効であった。

4 今後の課題

学習したリアクションを他の外国語活動にも生かせるように、学級に掲示したり、繰り返し使える場を意図的に設定したりする必要がある。

聴き合い、伝え合って自ら学ぶ子供の育成を目指して

－ 国語科「スイミー」の実践から －

富山市立東部小学校 教諭 田村 優奈

1 課題設定の理由

本学級には国語の授業が好きな子供が多く、叙述や挿絵に基づいて、登場人物の気持ちや会話を想像したり、想像したことから音読を工夫したりすることができる子供が増えてきている。また、ペアやグループでの学習を重ねることを通して、友達と考えを伝え合う心地よさを感じている。一方で、友達の意見と繋げて自分の考えを発表しようとする姿はあまり見られない。そこで、友達の考えに共感して聴き合ったり、考えの違いに気付いて伝え合ったりすることを通して、友達と学ぶよさや楽しさを実感させたいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

【聴き合い、伝え合うための手立て】

物語を読み進めるにあたって、始めに一人読みを行い、その後、全体での話合いの場を設けた。その後に話合いを通して考えたことやよいと思った友達の考えをワークシートに書き加えていった。話合いの際には、「動作化」「図鑑・実物提示」等を積極的に活用し、一人読みでの発見や考えのよさが、どの子供にも伝わるように働きかけた。

友達の考えを聴くときには、「きいてますビーム」「わかってねビーム」を合い言葉に、聴いてもらう心地よさや友達の考えに触れる面白さを実感できるようにした。体の向きや顔つき、声の大きさを意識して、目と心を繋いで意見を聴き合い伝え合った。

「水中ブルドーザーみたいないせえび」という叙述では、「ブルドーザーだから、足はキャタピラみたいになっているのではないかな」という発言に対して、書画カメラを使ってブルドーザーの図鑑を提示した。



子供たちは、「なるほど、かっこいいね」「速く動きそうだね。いせえびも足が速いのかも」など、キャタピラから想像したいせえびの様子を次々とつぶやいた。

「ドロップみたいな岩から生えている」という叙述では、ドロップの実物を子供たちに見せたり触らせたりした。



「カラフル」「キラキラしている」「触ると結構ごつごつするね」など、様々な発見をし、「ドロップみたいな岩」について、具体的に想像を膨らませることができた。

「見えない糸で引っ張られている」という叙述では、「釣り糸で引っ張られていると思う」と捉えた子供がいた。そこで、イワシの群れが同じ方向を向いて泳ぐ動画を子供たちに見せた。それでも理解が難しい子供がいたが、「見えない糸だから、本当に引っ張られているんじゃないかと、1匹が動くとみんなが動くってこと」という子供の発言を基に、動作化を取り入れた。すると、「見えない糸で引っ張られているように見える程、動きが同じ」と、一人読みで「透明な糸がある」と考えていた子供も比喩表現を正しく捉えることができた。動画だけでは理解しづかった子供も、動作化を通して友達の意見を理解し、読みを深めていくことで、スイミーがだんだん元気を取り戻していく様子を想像することができた。

3 研究の成果

つぶやきから疑問が生まれたときには、ペア活動を取り入れたり、みんなで動作化したりすることで、共に学び合うことにつながった。教師と子供の1対1の対話ではなく、一人の子供の考えやつぶやきを全体に広げることによって、子供同士で考えを聴き合い、伝え合うことに繋がったのではないかと思います。低学年に分かりやすい「きいてますビーム」等の言葉は、子供たちが考えを聴き合い、伝えやすい環境をつくることに繋がった。動作化や実物の準備は、子供が自ら学ぼうとするために有効な手立てであると説明することができた。

4 今後の課題

話合いにおいて、子供同士で自分の考えを的確に伝えたり、相手の意図を汲んで考えを繋げていったりすることは難しかった。子供が話しやすいとされるペア活動のタイミングを吟味したり、1人1台端末を活用するなど考えを共有できる手段や場を広げたい。そして、子供たちが聴き合い伝え合って、自ら学んでいくことができるように支援していきたい。

自信をもって自分の思いや考えを伝えられる児童の育成

射水市立歌の森小学校 教諭 中山 麻 優

1 課題設定の理由

「伝える」ことは、今だけでなくこれから人と関わりながら生活していくために非常に重要な力であり、幼いころから経験を積み重ねていくことが大切だと考える。また、曖昧な表現でなく自分の思いを適確な言葉で表現して伝える力も必要だと感じている。児童には1年生のうちから練習し、力を伸ばして行ってほしいと考え、この課題を設定した。

2 研究実践

(1) 話型の提示

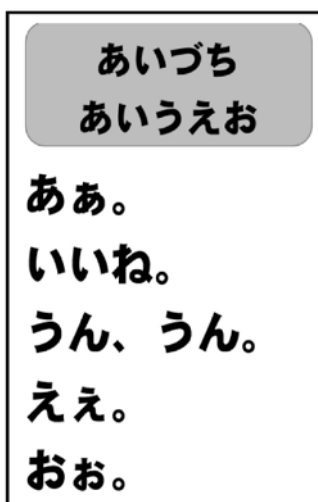
国語科で学習した発表の仕方をもとに話型を提示し「こんなときはこう言ったらいいね」と例示や助言を繰り返した。その際、最後まで言い切ることや、「思います」「～でした」等、様々な表現ができるようにした。

(2) 「あいづちあいうえお」やハンドサインの活用による聴くスキルの定着

「あいづちあいうえお」やハンドサイン、拍手、聴くときは話し手に体を向けることが身に付くよう、授業中や帰りの会の発表の際に声をかけた。よい反応をしている児童はすぐに褒め、教師も児童も、発言を否定することなく、認めながら過ごしていけるようにした。

(3) みんなの前で話す場面の設定

全体の前だけでなく、ペアやグループでの活動も多く取り入れ、友達と意見を伝え合う機会を多く設定した。また、「早口言葉選手権」や「音読発表会」等、楽しみながら友達の前で発言する場面を積極的に設け、徐々に慣れることを目指した。



3 研究の成果

(1) 実践する中で、言葉で話すことが難しいと感じる児童が多いことが分かった。助言や提案を繰り返したことで様々な伝え方を身に付けることにつながった。話し方の例があることで、自信をもって伝えられる児童が増えた。悩んでいる様子を見た周りの児童が、助言したり言葉をつなげて話したりする場面もあり、伝え合おうとする意識の向上が見られた。

(2) 「あいづちあいうえお」やハンドサインは、慣れるまでに時間を要したが、反応する児童を褒め続けることで、クラス全体で取り組むことができるようになってきた。合わせて、「聴くときは手を止め、話し手に体を向ける」「頷きながら聴く」等の、話し手がうれしいと思う聴き手の姿勢をクラスで出し合い、ルール化したことで、友達の考えをしっかりと聴こうとする姿勢が身に付いてきたと感じる。その結果、発表者が安心しながら発表することができたり、みんなに伝えたいと努力したりする様子が見られるようになった。

(3) 小さなことでも伝え合う機会を設定すると、その成功体験から自信が付き、次もがんばろうとする児童が増えた。聴く力が身に付き、発表するとみんなから反応がもらえる環境であるため、挑戦しようとする児童にとって、伝え合う機会を多く設定したことは有効であったと感じる。また、言葉で伝えられなくてもノートに考えを書くことや、ペアの友達と一緒に言うことを認めていった。このように児童の様子を認めながら活動したことで、自分の力に合わせて少しずつ挑戦することができたと思う。

4 今後の課題

伝える力が身に付き、自信をもって話したいという児童が増えた。今後は、自分の考えばかりを伝えるのではなく、友達の考えも大切にしながら聴くという力をより身に付けられるようにしたい。静かに聴いたり肯定したりすることはできるようになってきたが、友達が伝えたいことを分かろうとしながら聴いているとは言えない状態である。ただ賛成するのではなく、話を聴いて付け足したり、質問したりしながら、児童同士が関わり合える授業づくりを行っていきたい。

主体的に社会的事象に問い続けていく学習過程の工夫

－ 第3学年 社会科「高岡自慢認定委員 ほうれん草の巻」の実践から －

高岡市立川原小学校 教諭 柳 澤 紗也佳

1 課題設定の理由

現在小学校社会科では、「知識及び技能」「思考力,判断力,表現力等」「学びに向かう人間性等」の三つの資質・能力を育成するために、児童が自ら課題を追究、又は解決する活動の一層の充実が求められている。そこで、学習課題を毎時つくり、話し合っただけの内容を整理とまとめるような学習ではなく、児童が自らの疑問や考えに則って主体的に調査活動を進める個別的な学習をすることで、上記の三つの資質・能力を育成できると考え、この課題を設定した。

2 実践内容

(1) 学習意欲を高める単元導入(高岡自慢認定委員への任命と認定依頼の手紙)

主体的に学習に取り組むためには、題材との出会いが大切であると考えた。そこで、導入では学習への意欲付けを図るために主に二つのことを行った。一つ目は、児童を「高岡自慢認定委員」に任命することである。「高岡市の自慢を認定する」という目的が明確になることで、意欲的に学習に取り組む姿勢がみられた。顕著だったのが第三時の話し合いである。右のように自らを「認定委員として大丈夫か」と問うことによって、責任をもって学習に取り組もうという意識の高まりへとつながった。二つ目は、ほうれん草農家の方から「自慢認定の依頼の手紙を受ける」ことである。児童は、初めての認定依頼に「畑を見たい」、「しっかり調べよう」と学習への期待を膨らませた。手紙には、調査してほしいこと・見学に来てほしいこと・調べたことを発信してほしいということを記すことで、初めての一人学習を中心とした授業においても見通しをもって学習を進めることができた。

【第三時の話し合いより】

T : みんな見学に行きたいって、言っているけど、もう準備ばっちりの。
C1 : うん。大丈夫。
T : 何聞いてくるの。
C1 : ほうれん草の作り方。
T : どんなほうれん草の作り方しているの知っているの。
C : 分からない。
T : それで認定員として大丈夫かな。
C2 : だめ。(ほうれん草の)本当の作り方知らないよだめだよ。
T : どうして。
C2 : いろんなこと知らなかったら、農家さんにクイズ出されたら答えられなくて、(認定委員として)疑われるかもしれない。
C3 : なにも準備してないかないと農家さんに適当やと思われる。
T : 依頼されているのに、それはまずいね。
C3 : 普通のほうれん草の作り方知らんと自慢認定できるはずないよ。
C4 : 知らんがやったら、調べてみればいいよ。
C1 : それなら、宿題にしてみんな調べてくればいいよ。

(2) 児童一人一人の問いや思いを大切に調査活動

調査活動では、児童が主体的に調査を進められるようにするために、問いに応じた資料選択ができるようにした。全員で一つの資料について考えるのではなく、一人一人が自分の問いに合わせて資料を選択することで、知りたいことが調べられるという充足感を味わいながら学習を進めることができた。そのため、授業の終わりには「もっと調べたい」「えーもう終わるの」と言う児童が多く、追究意欲の高まりを感じた。学習が進むと、学校での調査活動に限界を感じた児童から「実際に見に行かないと自慢認定できないよ」という声が上がった。このタイミングで、見学を行うことで、「教師から与えられた見学」ではなく、「自分たちで手にした見学」かつ「自慢できるかどうか確かめに行く」という主体的な学習となった。



〈調べ学習の様子〉

3 研究の成果

授業中の学習の進め方だけでなく、授業外においてもスーパーで高岡産と県外産のほうれん草を購入して実際に食べ比べたり、地場産物を取り扱うスーパーを見学したりという姿が見られたことから、学習意欲を高めることによって、児童が自らの疑問や考えに則って主体的に調査活動を進めることができた。また、導入時の自慢認定委員への任命や農家の方からの自慢認定依頼といった工夫をすることで、新たな課題を見出しながら追究を継続できたことは大きな成果であったと考える。



〈見学の様子〉

4 今後の課題

本単元を振り返り、課題は大きく二つあると考える。一つ目は、児童全員が学習内容を網羅できるように構成したが、学習の進捗や内容の理解度に個人差が出たことである。ただし、この点については、教師が児童一人一人に応じた学習支援を行うことで補うことができた。二つ目は、学習意欲を維持し続けることの難しさである。主体性を重視した進め方となっているため、教師の介入が相対的に少なくなり、調査活動が失速する児童がいた。本単元では上記のような工夫をすることで学習意欲を最後まで維持できたが、今後継続的に取り組みを進める中では更なる手立てが必要だと感じた。

一人一台端末を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方

富山市立芝園中学校 教諭 岡本 奎一

1 課題設定の理由

「GIGAスクール構想」の基、今年度より一人一台端末の活用が本格化した。これに伴い、本校においても、実際の授業場面においても活用する機会が増加している。そこで、日々の授業実践において、一人一台端末をどのように活用することが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に繋がるかを追究したいと思い、本課題を設定した。

2 研究実践

1学期間を中心として、授業での端末の使用頻度を高めた。実際の実践(表1)を基に、ここでは、「繰り返し取り組める小テスト」、「ベン図の作成」の2つの事例を挙げる。

まず、「繰り返し取り組める小テスト」は、Googleフォームのテストモードを活用した。従来の小テストは、「用紙を配布→問題を解く→回収→採点→返却」という流れで行っていた。生徒の到達度を測る点では有効ではあるが、生徒からすると「やりっぱなし」という意識が拭えない点は改善点だと感じていた。特に、社会科学に苦手意識をもつ生徒ほど、繰り返し取り組むことを嫌う傾向があり、返却された答案を見るだけの生徒や、その結果に落ち込む生徒もいる。この点を補えるのが、繰り返し取り組める小テストである。生徒は一問一答形式の問題に取り組み、解答を送信した直後に、自身の点数が表示される仕組みにするだけでなく、同じ問題に何度も取り組めるようにすることで、間違えた問題にも再度挑戦しようという意欲に繋がることが分かった。この取組を授業開始の5分間程度で行うと、自分のペースで、学習に取り組むことができた。また、問題を、前時の学習内容を中心に構成することで、本時の学習にも意欲をもって取り組むことができた。

活用場面	活用した機能	内容
導入	Google フォーム	・繰り返し取り組める小テスト
展開	Google ドキュメント	・ワークシートの記入
	Google スプレッドシート	・表にまとめる活動 (日本のさまざまな自然災害)
	Jamboard	・ベン図の作成 (防災:自助・共助・公助)
終末	Google フォーム	・授業のまとめ、振り返りの記述
全体	Google スライド Google Meet	・写真、図表等の提示(画面共有) ・重要事項の整理(板書の簡略化)

表1 実際に活用した機能と活用場面及び内容

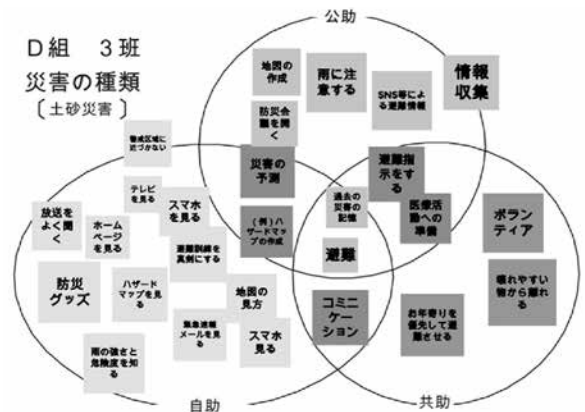


図1 作成したベン図

次に、「ベン図の作成」は、地理的分野の防災に関する学習で、津波や洪水等、数種類の災害に関するハザードマップ等の資料をグループごとに読み取り、jamboardを活用して「自助」「共助」「公助」の3つに分類し、ベン図を作成する学習を行った(図1)。一人一台端末を用いることで、共通の資料を個々で読み取ることができるほか、1つのベン図に複数人で同時に書き込みができるため効率的である。また、他のメンバーの活動の様子を把握することができ、自然と会話が生まれ、疑問点や分かったこと等を共有する様子が見られた。そのため、自然と全員が活動に集中して取り組むことができていた。

3 研究の成果

一人一台端末の活用は、適切な場面で適切な方法で活用することで、生徒にとってよりよい学習に繋がることが分かった。端末の活用を通して、生徒自身が「自分にもできそう」「分かった」といった気持ちを味わうことや、仲間と共に学習に取り組んでいる実感をもつことが、主体的に学習に取り組む姿勢にも繋がることが生徒の姿から感じ取れたことが大きな成果だった。

4 今後の課題

常に生徒に軸足を置いた端末の活用方法を模索していくことが必要である。また、生徒自身が主体的に取り組む、学びを深めるための手段として、さらなる実践を重ねる必要があると考える。

外国語科における音読・スピーキング指導の工夫

富山市立楡原中学校 教諭 宮 井 杏 理

1 課題設定の理由

今年度、小中の円滑な接続を目指して本校と併設する富山市立神通碧小学校で6学年の授業を担当することになった。そこで、小学校外国語科における「読むこと」「話すこと」の基礎・基本の充実に重点を置いて指導を行った。当該学習グループの児童は、英語の歌やチャンツ、リスニング問題等に意欲的に取り組んでおり、英語を「聞くこと」や「話すこと」に対する抵抗は少ないと考えられる。しかし、文字を意識して英語を読んだり、まとまりのある文章を英語らしいリズムで発音することはまだ難しい。そこで、児童にとって負担の少ない形で、文字を読むことを意識しながら、習った表現を活用して主体的に自己表現ができるような活動の充実を目指したいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

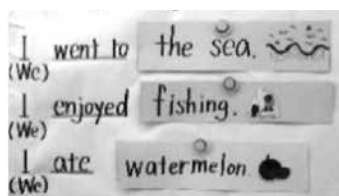
① 段階的に文字を意識させるためのチャンツ指導の工夫

小学校の外国語科では、単元(1時間)を通して1つのチャンツに取り組む。チャンツとは、一定のリズムに英単語や英文を乗せて発音する指導である。チャンツには単元で習得したい重要表現が含まれており、毎時間繰り返し練習することで表現の定着につながる。授業では、デジタル教科書とチャンツの歌詞を模造紙に書いたものを適宜使用して、段階的に文字に意識が向くように工夫した。

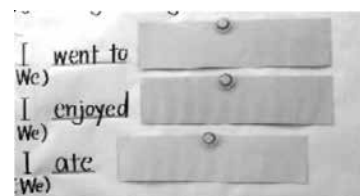
ステップ①デジタル教科書を使用し、映像や音声から意味を確認させ、音声に親しませる。

ステップ②十分に音声に親ませた後、歌詞を提示し、少しずつ文字に意識を向けさせる。徐々に音声がない状態で文字を頼りにチャンツが言えるように指導する。

ステップ③歌詞の一部を変更したり、空欄にして児童たちに自由に考えさせたりして、オリジナルチャンツを創作させる。(写真1、2)



<写真1 ステップ③一部変更>



<写真2 ステップ③空欄>

② 相手意識を高めるスピーキング指導の工夫

チャンツや歌等を通して児童たちは「I went to～」「I enjoyed～」「I ate～」等の表現を繰り返し練習した。これらの表現を使用して、児童たちが主体的に自己表現できるように、ペアやグループでインタビューやメモリーゲーム等の言語活動を行った。インタビューでは、学級の全員分の名前が入ったインタビューシートを活用したことで、積極的にクラスメイトと対話する様子が見られた。また、メモリーゲームでは、児童全員で円をつくり、時計回りに発言させ、自分の前に発言した人の内容を覚えて、「He/She ate～」というように繰り返したり、さらに「I ate～」という自己表現を付け加えたりする活動を行った。

3 研究の成果

チャンツ指導では、音声十分に親ませた後に歌詞を提示したことで、児童からは「普通に読めた!」「全然難しくない」という感想があった。小学校外国語の授業では「話すこと」「聞くこと」の指導を重要視しており、「読むこと」の指導はあまりされていないため、「自分は英語が読めない」と思っている児童が多い。しかし、日常的にアルファベットの音の指導やチャンツや歌の指導を行っているので、文字を見て発音する力は着実に育っている。そこで、十分な音声指導の後に文字に意識を向けた時間をつくったことで、児童の学習段階を「なんとなく読める」から「しっかり読めた」に上げることができたと考えた。また、スピーキング指導で行ったメモリーゲームでは、「聞き手を意識した話し方」や「相手の発言を注意深く聞き取る姿勢」が見られ、より実践的なコミュニケーションに近づけたのではないかとと思われる。

4 今後の課題

中学生になると文字で読む英語の量が格段に増えるため、中学校入学後にそのギャップで英語嫌いにならないように、小学生の頃から少しずつ英語を読むことを意識付けさせ、継続的に指導を行っていく必要がある。また、実践的なコミュニケーション力を育むために、授業では「相手意識」と「必然性」を伴った言語活動を工夫して、実践していきたい。

柔道の授業における安全で効果的な投げ技の指導の工夫

－ ジャンケン柔道を活用して－

高岡市立福岡中学校 教諭 竹内 優香

1 課題設定の理由

中学校1・2年生では武道の学習が必修とされており、多くの学校で「柔道」の学習が行われている。しかし、生徒は柔道に対して「怖い」や「痛い」などの負のイメージを抱くことが多く、特に投げ技の学習ではその傾向が高いと考えられる。そこで、安全で楽しくかつ効果的に柔道を学習するために考案された「ジャンケン柔道」を活用した指導法の工夫を行い、実践したいと考えた。さらに、コロナ禍でも行うことができる柔道の授業の工夫についても研究することにした。

2 研究実践

「ジャンケン柔道」とは、互いに右組みで組んだ状態で足ジャンケンを行い、勝った方が負けた方を投げるという約束練習である。本単元では、「グー」で勝った場合は出足払い、「チョキ」で勝った場合は大腰、「パー」で勝った場合は体落としで相手を投げ、負けた方は受け身をとることとした。このような工夫により、柔道の技能や体格の差に関係なく、誰もが「投げる」「投げられる」という機会を得ることができ、かつ安全に投げ技の学習をすることができる。

第1学年では柔道衣を着用せずに、礼法や受け身、抑え技を学習した。第2学年では、柔道衣を着用して投げ技の学習を行い、「ジャンケン柔道」を活用して投げ技の「崩し」「体さばき」「技のかけ」を身に付け、相手の動きに応じて基本動作や基本となる技をかけたり受け身を取ったりすることができるようにする指導に重点を置いた。加えて、学習の中で常に礼法を意識し、安全に留意することで、相手を尊重する態度を身に付けさせることを単元の目標とした。また、本単元ではコロナ禍でも行うことができる柔道の授業の工夫として、相手と直接組み合うのではなく、互いにフラフープをつかんだ状態で約束練習等を行うこととした。



〈フラフープを用いた約束練習の様子〉

3 研究の成果

「ジャンケン柔道」を用いることで、「受け」と「取り」の役割が明確になった。また、始めに両足ジャンプをしながら「最初はグー、ジャンケンポン」とかけ声をかけるため、お互いのリズムを合わせやすく、生徒は楽しみながら安全に投げ技をかけたり受け身を取ったりすることができていた。フラフープをつかんだ状態で「取り」が投げ技をかけても、「受け」に力が伝わっており、投げ技の「崩し」「体さばき」「技のかけ」を経験することができていた。誰もが分かりやすい「ジャンケン」で勝敗が決まり、かけられる技が予測できるので、生徒は意欲的に約束練習に取り組んでいた。

4 今後の課題

本単元では安全性を考慮して、投げられた際に「後ろ受け身」を取る「大内刈り」等を用いず、「前回り受け身」を取ることができる「体落とし」と「大腰」を投げ技として用いた。しかし、フラフープをつかんだ状態で技をかけると、2つの技の違いが分かりにくいと感じる生徒が多く見られた。生徒の技や受け身の習得状況や学習状況、特に「後ろ受け身」が十分に習得できている場合は、「後ろ受け身」を取る技を用いさせることも検討し、今後も継続的に研究に取り組みたいと考えている。

主体的な態度を育てるためのICTの効果的な活用法の模索

富山県立中央農業高等学校 教諭 橋本 樹

1 課題設定の理由

これまでの理科の授業の中で、授業内容の説明や映像提示等ICTを活用し、分かりやすく、興味を持たせるような授業の工夫を行ってきた。しかし、教師からの情報提供にとどまり、生徒自身の積極的な活動や知的好奇心の高まりにつながっていない場合が多く、ICT活用の効果を十分活かしているとは言えない。本校の生徒は情報機器への関心が高く、効果的な活用により、主体的な学びが期待できる。そこでICTを効果的に活用することで、生徒の主体的な態度を育てたいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

① 学習内容に対する内発的動機付けを高める工夫

電磁波の学習をする際に「なぜ電子レンジで卵を温めると危険なのか」や「アナログ放送からデジタル放送へと移行した理由は」という問いに対してタブレットを用いた調べ学習を行った。また調べた内容をPowerPointにまとめて、Googleのclassroomで共有し、発表する機会を設けた。ICTを用いて科学的な概念を日常生活に結び付けて普遍化することで、生徒自身の知的好奇心や探究心を喚起し、学習の功利性を見出すことができたり、また生徒自身で調べて共有することで、新たな発見につながり、さらなる学習意欲を高めたりすることができた。

② ICTの活用で主体的な実験・観察にする工夫

実験データをExcelで整理する表を予め用意しておき、classroomで共有することで、視覚的に分かりやすく各グループの実験結果が共有できた。また計算やグラフ化などのデータ分析の作業が容易になり、生徒自らデータを分析して自分の考えを導きだそうとする姿勢が多く見られるようになった。さらに、実際に学校の敷地内の樹木をタブレットで写真を撮り、Googleの画像検索を用いて、樹木を同定し、学校の樹木図鑑を作成する活動を行った。画像という情報だけで、容易に同定でき、様々な情報から新たな発見にもつながり、知的好奇心の向上につながった。



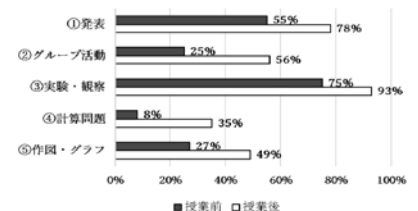
【図1：樹木図鑑】

③ 自己の活動を振り返って次につなげる工夫

classroomで単元前に評価規準を示すことで、単元の目標が明確になり、見通しをもって取り組むことができた。また授業後の振り返りシートで自己評価や相互評価を行い、自己の活動を振り返り、次の授業のやる気につながることもできた。

3 研究の成果

生徒自らによるICT活用を効果的に授業に取り入れることで、概念的な内容や計算等で理科を苦手とする生徒も抵抗感が軽減され、学習に粘り強く取り組む姿勢が見られた。classroomを利用して行ったアンケートでは、図2の①～⑤の項目に関して、実践前に比べ、「積極的に取り組んでいる」と答えた生徒が多くなったことから生徒自身の中でICTの有効性に気付き、主体的な態度へと変容していったと考えられる。



【図2：授業に対する態度の変容】

「積極的に取り組んでいるか」に対して「強くあてはまる」及び「あてはまる」の回答の割合

4 今後の課題

生徒のICT活用におけるスキルの向上やICTの特長と学習課題の関連付けをより一層明確にしていくために、段階的・継続的に実践を重ねていきたい。

GISを用いた地理Aの授業展開

富山県立中央農業高等学校 教諭 大井 裕 介

1 課題設定の理由

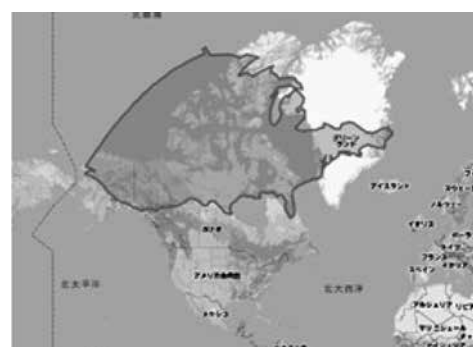
GISとは、Geographic Information Systemの略で日本語では地理情報システムと訳される。GISは地図と地理情報（位置情報を含むあらゆる情報）を、情報通信技術を使って結びつけたものであり、カーナビやスマートフォンの地図アプリなど誰もが日常的に利用するようになっている。

本校では2学年で地理Aと日本史Aのどちらかを選択している。地理Aの学習を進める中で、メルカトル図法や正距方位図法といった地図の図法による見え方の違いや、地図の等高線や土地利用について正確な読み取りができない生徒が多いことに気づいた。そこで、次年度からの地理総合でも活用を求められているGISを用いて地図の図法についてより視覚的にわかりやすく、読図の技能をつけることを目標に課題を設定した。

2 研究実践

①地図の図法を直感的に理解する工夫（資料1）

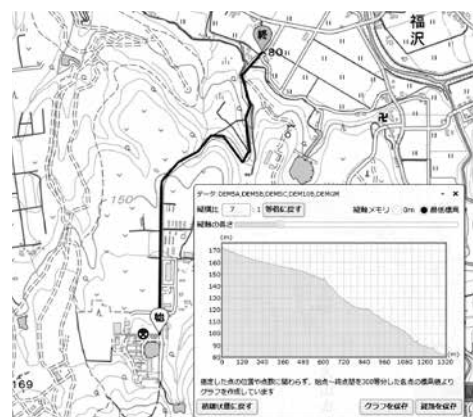
生徒はメルカトル図法と正距方位図法の使用する場面、特徴、見え方の違いの説明を受けた上でweb上で公開されているメルカトル図法の緯度による見え方の違いをしめす地図【the true size of】を操作した。生徒はアメリカや日本などなじみ深い国を地図上の様々な場所に置き換えることでメルカトル図法の特徴を直感的に理解できたようであった。



資料1 アメリカを高緯度に動かした際の見え方

②国土地理院地図（電子国土web）で読図の技能を身につける工夫（資料2）

生徒は等高線の粗密から傾斜を読み取るイメージがつかないようであったので一人一台のタブレットを用いて国土地理院地図の機能の「断面図」を作成する機能で校舎の前の1キロに渡る坂の断面図を作成させた。等高線をグラフに置き換えたものを見ると生徒は「ここはなだらかだから間隔があいているんだ。」と地図の読み方に改めて気づいた様子であった。また、その他にも機能を用いて校舎から坂の下までの距離を計測したり、自宅の土地利用を見たりしている生徒も見られた。読み取れたことをgoogleformでまとめ、それぞれが地図から読み取ったことを共有した。



資料2 電子国土webで作成した断面図

3 研究の成果

地図は生徒によってつまずきポイントになる。今回は一人一台タブレットを用いて一人一人が操作をし、直感的に理解し、読図の技能を身につけることを目標に研究を行った。地図アプリなどを使い慣れている生徒にとってはタップやドラッグ&ドロップの操作は苦でもないようで教員よりも飲み込みが良かったように感じる。GISを有効に活用することで直感的な理解につなげることができた。

4 今後の課題

今回行った地図の見方や読図は地理の技能の基本的な力である。GISの魅力はGISを活用しての身近な課題の解決につなげ、生徒の主体的で深い学びを引き出すことだと感じる。防災教育や資料の読み取りの活動により取り入れていけるように工夫をしていきたい。

◇ 課題研究奨励助成報告「優良賞」

学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
入善町立入善小学校	教 諭	村 井 美 里	自分の思いや考えをもち関わり合いながら学ぶ児童の育成
魚津市立道下小学校	教 諭	丹 保 慧 紀	主体的に学び合い、考えを深めていく授業づくり
滑川市立東加積小学校	教 諭	寺 井 涼	課題に対して多角的に考え、意欲的に自分の考えを追究できるための授業づくり
滑川市立南部小学校	教 諭	飯 野 真 由	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
富山市立針原小学校	教 諭	加 藤 綾 乃	低学年における1人1台端末の活用実践
富山市立豊田小学校	教 諭	奥 沢 綾 香	歴史的事象に興味をもち、話し合い、多角的に考える社会科の指導
富山市立豊田小学校	教 諭	水 口 沙也加	思いや考えを伝え合うことができる子供の育成を目指して
富山市立倉垣小学校	教 諭	倉 橋 萌 子	ICT 機器を活用して、仲間と関わり合いながら主体的に課題解決に取り組む子供の育成
富山市立倉垣小学校	教 諭	堺 明 希	自分の考えをもち、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
富山市立保内小学校	教 諭	宮 川 彩	一人一人が自分の考えをもち、表現できる子供の育成
富山市立宮野小学校	教 諭	岩 本 加 奈	関心をもって聞き、多様な考えを認め合う子供の育成
富山市立鶴坂小学校	教 諭	小 林 由 莉	伝え合い、学び合い、主体的に考える子供の育成
富山市立鶴坂小学校	養護教諭	高 木 実 空	生活に運動を取り入れようとする子供の育成
富山市立桜谷小学校	教 諭	水 上 颯 斗	仲間の考えを聴き合い、自己の考えを深められる授業を目指して
富山市立老田小学校	養護教諭	松 井 恵理香	メディアコントロールへの支援の在り方
富山市立老田小学校	教 諭	波 間 拓 己	知的障害学級における学習の定着を図る指導の工夫
富山市立光陽小学校	教 諭	早 苗 桃 子	自他の思いを大切に、学びを深める子どもの育成
富山市立光陽小学校	教 諭	木 村 真 樹	いろいろな感覚を活用し、遊びを生み出す子供の育成
射水市立中太閤山小学校	教 諭	依 田 智 美	望ましい食生活を身に付け、よりよい自分を育む活動の工夫
高岡市立福岡小学校	教 諭	有 島 千 紘	主体的な学びにつながるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
高岡市立福岡小学校	教 諭	馬 淵 和 可	子供の自己肯定感を高め、学校生活を楽しいと感じる工夫
高岡市立高陵小学校	教 諭	大 村 麗 奈	主体的・対話的に学び、家族の一員として生活をよりよくしようとする子供の育成
高岡市立下関小学校	教 諭	久 湊 愛 佳	主体的に話し合い、互いに高め合うことができる学習の工夫
高岡市立南条小学校	教 諭	福 尾 尚 久	対話的に学び、考えを深めるための指導の工夫
小矢部市立石動小学校	教 諭	岩 村 瑞 希	仲間と関わり合い、運動を楽しむ子供の育成
小矢部市立大谷小学校	教 諭	松 永 深 月	主体的に学び、考えを形成する子供の育成
小矢部市立津沢小学校	教 諭	沼 田 健	子供が主体的に運動に取り組み、動きの高まりを実感できるマット運動の授業づくりについて
砺波市立出町小学校	教 諭	清 水 雄 斗	主体的に社会的事象に関わり、学んだことを社会生活に生かしていく子供の育成
砺波市立鷹栖小学校	養護教諭	渡 邊 南	コロナ禍における感染症予防について
富山市立大泉中学校	教 諭	清 崎 凌 太	社会科における、「多面的・多角的」な考え方を深める1人1台PCを活用した授業の実践

* 令和4年度課題研究助成報告一覧

	学校名	職名	氏名	研究課題
1	朝日町立さみさと小学校	教諭	廣 清 香緒里	主体的に言語活動に取り組む児童の育成を目指して
2		教諭	鹿 熊 康 平	豊かに学習や運動に取り組む子供の育成
3	朝日町立あさひ野小学校	教諭	清 水 颯 太	「学び合い」のある授業を目指したICT活用の工夫
4		教諭	沼 田 峻	互いの考えを聞き合い、意欲的に話し合うことができる子供の育成
5	入善町立上青小学校	教諭	戸 島 えりこ	子供の思いを引き出す授業の工夫
6		教諭	横 田 智 哉	自分の考えを深めることができる学び合いの場の工夫
7	入善町立桃李小学校	教諭	能 村 美 悠	すべての児童が自分の考えをもち、主体的に学びたい授業づくり
8		教諭	坂 藤 有 梨	主体的に言語活動に取り組む授業づくり
9	黒部市立村椿小学校	教諭	山 崎 優 菜	互いに認め関わり合うためのツールの効果的な生かし方
10		教諭	清 水 立	子供の思考の流れに沿った算数の授業づくり
11		教諭	吉 江 純 菜	互いに尊重し合い、多様な考え方を認め合える学習を目指して
12	黒部市立中央小学校	教諭	小 川 陽 平	共に学び合う楽しさや自らの学びを実感できる児童の育成
13		教諭	荒 川 佳 帆	自他の考えを比較し、自分の考えを広め深めていく児童の育成
14		教諭	山 本 真 綾	一人一人の児童に確かな学力の定着を目指した授業
15	黒部市立宇奈月小学校	養護教諭	長 谷 洋 子	主体的にメディアコントロールを実践しようとする子供の育成
16		教諭	沼 田 美 咲	「分かる」「できる」喜びを味わうことができる授業づくり
17		教諭	宮 部 亜 弓	特別支援級における「できた」「わかった」が実感できる支援や手立て
18	魚津市立星の杜小学校	教諭	扇 谷 元 基	読む道徳から考え議論する道徳への転換について
19		教諭	西 村 幸 柚	児童が楽しく意欲的に学習できる支援の在り方
20		教諭	宮 崎 勇 斗	安心できる学級づくり
21		教諭	大 森 玲 央	分かる・できる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付ける子供の育成
22		教諭	難 波 情	分かる・できる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
23	魚津市立清流小学校	教諭	松 田 恵里佳	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
24		教諭	野 尻 美 里	分かる・できる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
25		教諭	渡 邊 直 喜	多様な考えに触れ、自分の考えを深めるための授業づくり
26		教諭	佐 渡 菜 月	分かる・できる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付ける子供の育成
27		教諭	富 居 美 加	主体的な学びを進める授業づくり
28	魚津市立道下小学校	教諭	川 原 美 冬	互いに関わり合う中で考えを深める社会科の授業づくり
29		教諭	丹 保 慧 紀	主体的に社会的事象について問い続ける社会科の授業づくり
30		教諭	高 橋 梨 奈	一人一人が自分の考えをもち、表現できるようにするための支援について
31		教諭	小 泉 遥	学び方を自ら選択し、意欲的に学びを進める子供の育成
32	滑川市立寺家小学校	教諭	寺 崎 綾 乃	学習の個別化を通して、自らの学びを深める子供の育成
33		教諭	岩 田 唯	自分に最適な学びを計画し、自ら学ぼうとする子供の育成
34	滑川市立田中小学校	教諭	金 坂 向 真	叙述を大切に、「考える楽しさ」「分かる嬉しさ」を友達と実感できる国語科の授業を目指して
35		教諭	丸 本 瞳	学級活動を通して認め合い助け合いながら問題解決能力を育む集団づくりを目指して
36	滑川市立北加積小学校	教諭	千 代 悠 太	学級活動を通して認め合い助け合いながら問題解決能力を育む集団づくりを目指して
37		臨任講師	浅 野 翔 馬	学級活動を通して認め合い助け合いながら問題解決能力を育む集団づくりを目指して
38	滑川市立東加積小学校	教諭	中 澤 祥 恵	課題に対して主体的に追究し、多角的に思考するための授業の工夫
39		教諭	寺 井 涼	課題を自分事として捉え、主体的に追究していくための授業づくり
40	滑川市立南部小学校	教諭	島 谷 怜 佑	主体的・対話的に学び合うことを通して、自分の考えを変容を楽しむ子供を目指して

	学校名	職名	氏名	研究課題
41		教諭	松井 桃花	主体的・対話的に学び合うことを通して、自分の考えを変容を楽しむ子供を目指して
42	滑川市立南部小学校	教諭	飯野 真由	子供の「強み」を生かし、「分かった」「できた」を積み重ねることで、自信をもって生活する子供の育成を目指して
43		教諭	福島 菜乃子	子供の「強み」を生かし、「分かった」「できた」を積み重ねることで、自信をもって生活する子供の育成を目指して
44	滑川市立西部小学校	教諭	森谷 虹太	話す・聴くことを通して自分の考えを伝え合う子どもの育成
45		教諭	谷口 結香	子供たちが関わり合い、主体的に学びを深めていくための支援の在り方
46		教諭	中田 和帆	動きの高まりを求めて、問いを見つけ、主体的・対話的に運動に取り組む子供の育成
47		教諭	山林 耕大	子供たちが関わり合い、主体的に学びを深めていくための支援の在り方
48		教諭	藤澤 舞奈	子供たちが関わり合い、主体的に学びを深めていくための支援の在り方
49	上市町立上市中央小学校	教諭	村井 大輔	主体的・対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
50		教諭	筒井 佑気	主体的・対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
51		教諭	魚 躬啓佑	主体的・対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
52	上市町立陽南小学校	教諭	瀧川 尚未	ふりこの運動の規則性を粘り強く発見していく授業づくり
53		教諭	松田 立樹	数理的な事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
54	立山町立立山北部小学校	教諭	朝倉 寛	体験を基に自分の考えを表現し考えを深める子供の育成
55		教諭	寺林 誠大	自分の考えをもち、主体的・協働的な学びを促すための指導や支援の工夫
56		教諭	布一 優美子	自分の思いを表現しながら、音楽と豊かに関わろうとする子供の育成
57	立山町立立山中央小学校	教諭	大岩 慧斗	子供が社会的事象を多角的に考えるための授業づくり
58		教諭	大浦 匠	子供が自らの考えを伝え合い、対話的な状況を生み出すための教師の働きかけ
59		教諭	佐々木 愛花	「聞きたい」「話したい」という思いをもち、互に関わり合いながら学ぶことのできる指導や話し合いの場の設定の工夫
60		教諭	三原 良心	問題解決の見通しをもたせるための支援の在り方
61	富山市立針原小学校	教諭	加藤 綾乃	図画工作科における一人一台端末の活用実践
62	富山市立浜黒崎小学校	教諭	内山 寛弥	学びを深める単元構想の工夫
63		教諭	勝島 貴士	子供同士が関わり合いながら学びを深めていくための指導の工夫
64	富山市立大広田小学校	教諭	手操 宙志	友達の話に関心をもって聴き、自分の考えを深めることができる子供の育成を目指して
65		教諭	村西 司	言語活動を通して、深く考える子供の育成
66		教諭	藤元 茉南	主体的に言語活動に取り組み、言葉の力を高めるとともに考えを深めていく子供の育成
67		教諭	太田 凧紗	自分の考えや思いを豊かに表現する子供の育成を目指して
68		教諭	柳 瀬 亮	子供の実態に合わせ、スモールステップやジャンプステップを使い分ける授業づくり
69		教諭	今村 友香	「分かる」喜びを感じ、自ら学び考えることができる子供の育成
70	富山市立豊田小学校	教諭	氷見 瑞基	共に学び・高め合う子供を育成するための学級経営の在り方
71		教諭	松谷 愛美	伝え合い・聞き合いができる子供を育成するための話し合いルールのある在り方について
72		教諭	清水 遼大	子供同士の関わり合いを生み出す教材・題材の工夫
73		教諭	平山 結貴	自分の考えに自信をもち、伝え合うための言語活動の在り方
74		教諭	安田 陽子	友達との関わりを通して学ぶことを楽しむ子供を育むための学習活動の場の設定の在り方
75		教諭	嶋 拓哉	探究的に学習する子供を育成するための学習支援の在り方
76		教諭	水口 沙也加	思いや考えを伝え合うことができる子供を育成するための言語活動の在り方
77		教諭	宮部 成矢	実体験を基に考えを伝え合う子供を育成するためのペア・グループ活動の在り方
78		教諭	荒城 菊乃	共に学び・高め合う子供を育成するための学級経営の在り方
79		教諭	神田 愛望	関わりを通して主体的に学ぼうとする子供を育成するための学習指導の工夫
80		教諭	田中 みのり	社会的な見方・考え方を確かめ合いながら社会的事象についての理解を深める単元構成の在り方
81		教諭	田中 仁郭	子供が自ら考えを構築し、伝え合える学習支援の在り方
82	教諭	大久保 翔太	関わり合いながら学びを深めようとする子供を育成するためのグループ活動等の場の設定の在り方	

	学校名	職名	氏名	研究課題
83	富山市立豊田小学校	教諭	中松 静花	対話を通して学びを深めるための学習活動や振り返りの工夫
84		教諭	奥沢 綾香	子供同士が共に学び合うペア・グループ学習
85	富山市立四方小学校	養護教諭	深谷 花桜里	自分を見つめ、心身の健康づくりを実践する子供の育成を目指して
86		教諭	藤田 智子	主体的に自分の生き方を見つめる子供の育成
87	富山市立八幡小学校	教諭	二橋 萌莉	家庭をよりよくするために、家族の一員として、進んで考え取り組む家庭科の実践
88	富山市立草島小学校	教諭	三浦 柚稀	思いやりのある子供を育てるための学級経営
89		教諭	西村 京香	主体的に課題に取り組み、関わり合いを通して自分の考えを深める授業の在り方
90		教諭	村井 展	思いや考えを伝え合い、主体的に学ぶ子供の育成
91	富山市立倉垣小学校	教諭	堺 明希	友達と関わり合いながら、進んで学習する子供の育成
92		教諭	大塚 哲	興味・関心をもって課題解決に向かうための教師の手立て
93		教諭	水嶋 亜衣	友達と関わりながら主体的に学習に取り組むための授業の工夫
94	富山市立藤ノ木小学校	教諭	平野 里歩	友達と関わり合いながら主体的に学び続ける子供の育成
95		教諭	毛利 真史	主体的な関わり合いを通して、楽しみながら学習する子供の育成
96		教諭	松倉 実希	自らの課題の解決に向かって主体的に学び続ける子供の育成
97		教諭	大野 正侃	仲間との関わりの中で自分の思いや考えを深めていこうとする子供の育成
98		教諭	寺坪 美穂	仲間と関わり合いながら主体的に学び続ける子供の育成
99		教諭	金山 恭平	協働的な活動を通して、自分と他者との考えの違いに気づき、互いを認め合おうとする子供の育成
100		教諭	水口 凌哉	数学的活動に粘り強く取り組み、考えを深めていく子供の育成
101		教諭	横山 友香	自分と他者の考えを比べながら、主体的・対話的に自己の生き方についての考えを深めようとする子供の育成
102		教諭	岩野 絢斗	子供が互いに自分の考えを表現することができる授業構想
103		富山市立広田小学校	教諭	中里 英恵
104	教諭		牧野 圭佑	子供の多様な考えを引き出し、ねらいに迫るための発問の工夫
105	教諭		平吉 泰之	道徳科における子供たちが話し合いたくなるような発問の設定
106	富山市立水橋東部小学校	教諭	遠藤 理沙	自分の思いや考えをもち、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
107		教諭	水上 瑞紀	自分の考えをもち、主体的に学び合おうとする子供の育成
108	富山市立水橋中部小学校	教諭	有澤 俊希	主体的・対話的に問題解決に取り組むための授業づくり
109		教諭	野村 亮太	思考を広げ、深めていくためのタブレットの活用
110		教諭	大久保 里奈	自分に自信をもち、進んで活動する子供の育成
111	富山市立水橋西部小学校	教諭	風呂谷 淳史	仲間と関わり合いながら学ぶ子供の育成
112		教諭	團野 奏愛	仲間と関わり合いながら学ぶ子供の育成
113	富山市立三成小学校	教諭	横澤 英公	「やってみよう」と思える授業の工夫
114		教諭	田中美玖	子供が確実に理解しながら意欲的に課題に取り組むための手立て
115		教諭	水野 晴香	子供が教材と関わりながら、主体的に言語活動に取り組むための工夫
116	富山市立新庄北小学校	教諭	戸嶋 玲歌	子供が主体的に課題に関わることができる教具の工夫
117		教諭	新谷 誠也	子供たちが主体的に関わり合える話合いの場の設定
118		教諭	田中 はる佳	思いや願いをもち続けながら主体的に活動する子供の育成
119		教諭	森 あゆみ	対話の必要感を生み出すための授業づくり
120		教諭	荒井 優弥花	子供が主体的に学習に取り組むための単元構想の工夫
121		教諭	廣野 かおり	基礎学力の定着を目指して主体的に取り組む子供の育成
122	教諭	新田 一咲	学習したことを生活に生かそうとする子供を育成するための授業づくり	
123	富山市立堀川小学校	教諭	番匠 拓也	安心して自信をもって取り組めるスタートカリキュラムを目指して
124		教諭	杉本 茉由	英語を使う必要感を高めながらコミュニケーションの本質に迫る子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
125	富山市立堀川小学校	教諭	長谷川 仁 義	図画工作科の学びを通して自分らしく学習に取り組もうとする子どもの育成
126		教諭	伊 藤 千 尋	よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む子どもの育成を目指して
127		教諭	押 田 彩 華	仲間と温かな関係を築き、共に高め合う子どもの育成
128		教諭	高 橋 ゆり野	自分の思いや願いを大切にしながら、仲間との関わりを広げる子供の育成
129	富山市立山室小学校	教諭	村 井 伸 次	互いのよさや違いを認め合い、共に学び合う子供の育成
130		教諭	吉 田 光	子供たちが意欲をもち、思いや考えを伝え合う授業づくり
131		教諭	松 岡 尚 哉	子供が自ら考え、主体的に課題を追究していこうとする学習の工夫
132		教諭	弓 部 真 惟子	学習課題を自分事として捉え、自分や友達との対話を通して学びを深めていくための授業の工夫
133		教諭	佐 山 結	子供が興味をもって説明的文章を読むことができる授業づくりの工夫
134		教諭	松 森 璃 乃	主体的に問題解決に取り組み、互いに学び合う子供の育成
135		教諭	古 市 健	主体的・協働的かつ継続的に運動に取り組む子供の育成
136		教諭	定 塚 和 也	主体的に学び合い、考えを深めていくための授業の工夫
137		教諭	立 野 健 翔	子供が主体的に考え、楽しみながら学習に取り組むことのできる学習環境・教具の工夫
138		教諭	大 田 知 佳	子供の話す力・聞く力を育てる授業の工夫
139	富山市立蜷川小学校	教諭	山 本 将 也	一人一台端末を活用し、全ての子供が進んで参加できる授業づくり
140		教諭	堀 江 美 里	よい聞き手を育てる国語科「話すこと・聞くこと」の授業づくり
141		教諭	金 代 悠 輔	資料を通して情報を調べまとめ、関連付けて考えるためのICT支援
142		教諭	青 島 龍 平	全ての子供が自分の課題と向き合いながら活動できる体育科の学習
143		教諭	中 島 彩 香	全ての子供が楽しいと思える授業づくり
144		教諭	角 谷 早 紀	子供たちが自分で学び方を選び、主体的に取り組むことのできる授業づくり
145		教諭	水 上 瑞 菜	集団生活を通して、主体的によりよい生活や人間関係を築こうとする子供の育成
146		教諭	古 谷 友 宏	算数科におけるUDLの視点を取り入れた授業の工夫
147		教諭	小 川 圭 介	困難を改善するための自立活動を目指して
148	富山市立太田小学校	教諭	若 田 翔 暉	主体的・対話的に学び、確かな学力を身に付けていく子供の育成
149		教諭	田 組 ちはる	主体的・対話的に学び、確かな学力を身に付けていく子供の育成
150		教諭	松 祥 子	主体的・対話的に学び、確かな学力を身に付けていく子供の育成
151		教諭	飛 田 順 平	主体的・対話的に学び合い、よさを認め合う子供の育成
152	富山市立新保小学校	教諭	前 真 子	生き生きと学校生活を楽しむ子供の育成
153		教諭	上 田 ありさ	子供同士が話し合い、聴き合いを通して、学び合う子供の育成
154		教諭	小 澤 昭 吾	聴き合いを通して、主体的に学びを深める子供の育成
155		教諭	草 島 あさひ	学級全体で達成感を得るための活動の工夫
156	富山市立熊野小学校	教諭	鈴 木 龍 平	自分の思いや考えをもち、友達に伝わるよう表現し合う話し合いを目指して
157		教諭	本 江 佑 衣	学ぶ楽しさを味わうことのできる授業を目指して
158		教諭	野 崎 友 晴	関わりを大切に、子供が相互によさを認め合う学級を目指して
159		教諭	長 島 智 大	個人のよさを生かした学級経営を目指して
160		教諭	伊 藤 心 笑	分かる授業・楽しい授業を目指して
161	富山市立月岡小学校	教諭	阿 閉 令 奈	子供の主体的な学びを実現させるための、理科における授業支援の工夫
162		教諭	古 野 滉 大	子供の興味・関心を引き出し、学習意欲を高めることのできる教材開発
163		教諭	佐々木 玲 奈	子供たちが主体的に取り組む、楽しく学ぶことのできる指導の在り方
164	富山市立堀川南小学校	教諭	小 嵐 湧 仁	自分の考えをもち、互いに認め合える子供の育成
165		教諭	荻 田 真 菜	一人一人が生き生きと活動し、互いのよさを認め合える学級づくり
166		教諭	小 林 知 可	一人一人に居場所がある温かい学級づくり

	学校名	職名	氏名	研究課題
167	富山市立堀川南小学校	教諭	松原悠真	子供が「学びたい」と思う授業づくり
168		教諭	河原幸佑	一人一人が伸びる指導・支援の在り方
169		教諭	堀芳聡	主体性を育み、自らの高まりを実感することができる支援の在り方
170		養護教諭	藤井春菜	保健室から発信する保健指導のあり方
171		教諭	中田有花	一人一人が生き生きと学ぶ子供の育成
172		教諭	谷口悠	自分の考えを大切にしながら他者を認め合う学級づくり
173		教諭	川瀬具視	様々な方法で表現し、友達と交流を通して学習する子供の育成
174		教諭	寺林あゆみ	一人一人が意欲的に学習に取り組み、考えを深める子供の育成
175	富山市立山室中部小学校	教諭	森本柚	学習意欲を高めるための導入や活動の工夫
176		教諭	大野真依	達成感を味わいながら、自発的に取り組む子供の育成
177		教諭	長谷田詩織	「分かる・できる」楽しさを感じられる学習指導
178		教諭	木村祐希	自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成
179		教諭	白崎弘宣	認め合う集団づくりとやる気を引き出すための教育実践
180	富山市立大沢野小学校	教諭	市川真亜久	自ら課題を見付け、主体的に学ぶ子供の育成
181		教諭	藤井李保	子供たちが意欲的に活動できるための工夫
182		教諭	坂木裕一	子供たちが主体的に取り組む家庭学習を目指して
183		教諭	小林ゆり	主体的に他者と関わり合う子供を目指して
184		教諭	高山暉夢	子供同士が互いを認め合い、自らの成長を実感することができる学級経営
185	富山市立大久保小学校	教諭	山出陸	子供たちが生き生きと過ごせる学級づくり
186		教諭	綱島斗真	一人一人が意欲的に取り組む授業の在り方
187		教諭	辻本理紗	子供たちで学びを深め合い、主体的に取り組む授業づくり
188		教諭	大林里南	仲間と共に活動し、互いに認め合う学級づくり
189		教諭	中川功太郎	主体的に考え、仲間と共に学び合う授業づくり
190		教諭	柳田朱音	分かったできたに喜びを感じ、自ら進んで学ぶ子供の育成
191		教諭	岡崎奏斗	主体的に学ぶための手立ての在り方
192	富山市立上滝小学校	教諭	中野裕美子	子供の学ぶ意欲を高める支援の在り方
193		教諭	中山朋音	仲間の考えを聞き、主体的に学ぶ子供の育成
194	富山市立大庄小学校	教諭	高田真優	互いのよさを認め合い、友達と関わり合いながら共に高め合う児童の育成
195		教諭	茂住絵莉菜	子供が意欲的に取り組みたいと感じることのできる授業の工夫
196		教諭	按田栞奈	友達との関わりを通して、よりよい自分を目指すために、考えて行動する子供の育成
197		臨任講師	堀越静那	友達と考えを共有しながら、新しい学習内容に積極的に取り組む子供の育成
198		養護助教諭	植野未久	心身ともに健康な生活を送る子供の育成を目指して
199	富山市立神通碧小学校	教諭	加茂俊輔	自分と友達の間をつなぎ、「分かった」「できた」と学びを表現することができる授業づくり
200		教諭	安部浩庸	一人一人の「知りたい」を引き出すための授業づくり
201		教諭	安田汐里	子供たちの学習意欲を高める教材の工夫
202		養護教諭	小澤彩	月経に関する正しい知識の普及とセルフケア行動の習得
203	富山市立鶴坂小学校	教諭	久住英子	自ら問いをもち、主体的に学ぶ子供の育成
204		教諭	平田侑次朗	子供一人一人が自分の考えをもつための授業づくり
205		教諭	小林詠美	子供たちが自分の考えを主体的に表現する授業の工夫
206		教諭	廣瀬謙太郎	聴き合いを通して、学ぶことが楽しいと子供たちが実感するための教師の手立てについて
207		教諭	桑野穂子	よりよい生活を築くため、自分の役割や責任を果たそうとする子供の育成
208		教諭	森隼人	自他のよさを認め合い、共に学びを深め合う子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
209	富山市立鶴坂小学校	教諭	高木実空	自らの心身の健康について考え、実践する子供の育成
210		教諭	早崎菜美	子供一人一人が自分の考えをもち、ねらいに迫るための教師の働きかけ
211		教諭	西田莉彩	相手の気持ちを考え、自分にできることを考えられる子供の育成
212		教諭	赤尾純平	理科教育における子供の主体的な学習を支えるための手立て
213		教諭	松村秀哉	子供が主体的に学習に向かうための教師の手立て
214	富山市立朝日小学校	教諭	蔵本果菜	進んで思いを伝えたり、考えを深めたりするための支援のあり方
215		教諭	竹村勇希	低学年の基礎・基本の定着を図る教師の支援と工夫
216	富山市立宮野小学校	教諭	小幡拓馬	互いの考えを聴き合いながら、自分の考えを深めたり広めたりする児童の育成
217		養護教諭	瀬野ひかり	健康課題の解決に向け、主体的に取り組む子供の育成
218		教諭	島倉拓朗	児童が主体的に学級をよりよくなる活動を目指して
219		教諭	宮田有香	互いの考えを聴き合いながら、自分の考えを深めたり広めたりする児童の育成
220		教諭	竹中彩乃	「分かりやすい」「簡単にできる」を実感できる算数科の授業づくり
221	富山市立古里小学校	教諭	濱健	自分事として考える授業づくり
222		教諭	竹内拓哉	子供同士が関わり合い、学び合う授業の工夫
223		教諭	西澤拓哉	主体的に学習に取り組む子供の育成
224		教諭	佐伯千歌	主体的・対話的に追究し、自身の高まりを実感できる指導の工夫
225	富山市立神保小学校	教諭	小林夏月	子供同士が温かい関わり合いができる声かけや学習指導の工夫
226		教諭	田中里奈	子供たちが主体的・対話的に追究し、自身の高まりを実感できる指導の工夫
227		教諭	大宅裕紀	社会的な見方・考え方を深める社会科の授業づくり
228		教諭	新保拓実	追究意欲を高める事象との出会いの工夫と、主体的に問題を解決するための学習過程の工夫
229		教諭	中野晃希	互いの思いを聴き合い、主体的に学び合う子供の育成
230	富山市立音川小学校	教諭	大浜惇	自分の考えを表現できる授業づくり
231		教諭	清水美帆	自分の学びや成長に気づき、学ぶ楽しさを実感できる授業づくり
232		教諭	元尾海渡	読む力を育むための物語文の指導の工夫
233	富山市立八尾小学校	教諭	永原枝里子	学力向上に向け、見通しをもって学習に取り組む子供の育成
234		教諭	早崎和基	互いに認め合い、励まし合いながら学びを深める子供の育成
235		教諭	金丸咲希	子供が「分かる・楽しい」と感じる授業の在り方
236	富山市立杉原小学校	教諭	虎谷優希	他者とともに学び合うよさを実感できる授業づくり
237		教諭	谷口綾乃	関わり合いを通して、自分の考えを主体的に深めていく子供を育てる
238		教諭	宮本翔平	関わり合いを通して、自分の考えを主体的に深めていく子供を育てる
239	富山市立保内小学校	教諭	柳楽真吾	一人一人が自分の考えをもち、進んで表現することを通して、楽しさや多様性を感じられる授業づくり
240		教諭	宮川彩	「できる喜び」や「分かる楽しさ」を感じながら、自分の考えを表現できる子供の育成
241		教諭	清水優作	仲間と話し合い関わり合う中で、自分の考えを深めていく子供の育成
242		教諭	若瀬彩芽	子供たち一人一人が自分の考えをもち、学ぶ楽しさや喜びが実感できる授業づくり
243	富山市立山田小学校	教諭	武部光志	一人1台端末の活用による、主体的、協働的な学び
244	富山市立桜谷小学校	教諭	長島幸	個々のちがいを認め合い、よさが広がっていく授業を目指して
245		教諭	水上桃子	一人一人が自分の考えをもち、学び合おうとする授業づくりを目指して
246		教諭	川村壮生	互いの個性を生かし、学びを創造する授業を目指して
247	富山市立五福小学校	教諭	谷口凌太	子供が学級に愛着をもつための学級づくり
248		教諭	茂住真由	互いに助け合い・励まし合い・認め合う学級を目指して
249		教諭	牧野健吾	友達との「関わり」「繋がり」を大切に学級づくり
250		教諭	土田早紀	考えること、思いを伝えることを楽しみ、互いのよさを認め合う学級を目指して

	学校名	職名	氏名	研究課題
251	富山市立神明小学校	教諭	若林良輔	主体的・対話的に深く学ぶ子供の育成
252		教諭	小島春奈	主体的・対話的に深く学ぶ子供の育成
253	富山市立呉羽小学校	教諭	天野夏瑞	自分の考えをもち、関わり合いながら学びあうことのできる授業の工夫
254		教諭	森本海羽	子供が自分の成長を自覚し、次の学習への見通しをもつための自己評価・他者評価の工夫
255		教諭	石田真奈美	一人一人が自分の考えをもち、主体的に学ぶ支援の在り方
256		教諭	旅家美晴	自分の考えをもち、主体的に学び合う子供の育成
257		教諭	島崎彩音	考えや意見を比較・検討するための一人一台端末の活用
258	富山市立寒江小学校	教諭	石垣風海	子供の思いに沿った単元構想の工夫
259		教諭	前馬裕樹	自分の思いや考えをもち、友達と一緒に学ぶ楽しさを感じる子供の育成
260		教諭	鶴岡綜一	学級会における論点整理のための板書の工夫
261	富山市立老田小学校	教諭	北島聖也	自分の考えをもち、互いの考えを大切にしながら学び合う授業を目指して
262		教諭	波間拓己	児童が自主的に学習に取り組むための指導の工夫
263		教諭	藤田有実	児童が主体的に学習に取り組むための指導の工夫
264		教諭	城山羽菜	児童が主体的・対話的に学習に取り組むための指導の工夫
265		養護教諭	松井恵理香	健康で安全に学校生活を送るための保健指導
266	富山市立古沢小学校	教諭	麻生有希	子供が進んで他者と関わり、考えを広げ、深めるための学習活動の工夫
267	富山市立池多小学校	教諭	佐伯真栄	主体的に学び、自ら問題を解決しようとする子供を育てるための授業の在り方
268	富山市立芝園小学校	教諭	広瀬勇都	子供が問題解決に向けて主体的に取り組むことのできる学習活動や学習形態の工夫
269		教諭	古谷萌	子供が自分に合う学習方法を選択し、主体的に学ぶことができる支援方法の工夫
270		教諭	北陽一朗	子供が主体的に学ぶ理科の授業づくり
271		教諭	黒川麻衣子	子供が主体的に仲間と学び合える学習展開と、自らの学びを調整し発展させていくための振り返りの工夫
272	富山市立西田地方小学校	教諭	中島雅国	子供が主体的に問題解決し続け、個別最適で協働的な学びを生む単元構想の工夫やICT活用
273		教諭	臼澤真優	「なりたい自分」を思い描きながら、自分の思いや願いを確かにしていくことができる単元構想の工夫
274		教諭	窪田裕子	子供が学びを広げ、考えを深めるための関わり合いの場の設定と方法の工夫
275		教諭	番匠真子	仲間と共に認め合い、自分の学びを主体的につくっていく授業の実践
276	富山市立西田地方小学校	教諭	大澤京子	自分らしさを発揮して、生き生きと活動する子供の育成を目指して
277		教諭	二木貴久子	自分の思いや考えをもち、友達と関わり合いながら学びを深める子供の育成
278		教諭	大岩真子	自分の考えをもち、互いに認め、何事にも挑戦する子供の育成
279	富山市立中央小学校	教諭	橋本和代	児童の想像力や表現力を高める授業づくり
280		教諭	新國茜	自分の思いや考えを表現し、共に学び合う子供の育成を目指して
281		教諭	上嶋壮汰	子供が学び合う体育科の授業を目指して
282		教諭	徳永裕樹	主体的・対話的に学びながら「生きる力」を身に付ける子供の育成
283		教諭	入船晴日	主体的・対話的に言語活動に取り組み、自分の思いや考えをまとめる子供の育成を目指して
284		教諭	雨宮直弘	未来を切り拓く意識を持続させていく人材の育成を目指して
285	富山市立柳町小学校	教諭	一間理紗	一人一人が思いや願いをもち、互いに学び合う授業の工夫
286		教諭	山口彩希	主体的・対話的に学びながら「生きる力」を身に付ける子供の育成
287		養護教諭	長越由莉	よりよい健康づくりを実践しようとする子供の育成
288		教諭	真島大輔	子供たちが主体的に学ぶ学習指導の工夫
289		教諭	岩黒拓人	やってみよう、分かるようになりたいという意欲を引き出す交流の場の工夫
290	富山市立奥田小学校	教諭	中田悠揮	学習用デジタル教科書の効果的な活用の仕方
291		教諭	梅本和樹	教材や仲間と主体的に関わり、協働的な学びによって考えを深める授業を目指して
292		教諭	池上舞子	全ての子供が聴き合うことを楽しみ、仲間と学び合うよさを感じられる授業を目指して

	学校名	職名	氏名	研究課題
293	富山市立奥田小学校	教諭	中村麻裕	子供がコミュニケーションの達成感・満足感を味わうことができる授業を目指して
294		教諭	大西凜	自分の考えをもって他者と関わり、心身を解き放って、子供同士が達成感を共有できる授業を目指して
295		教諭	田辺拓実	一人一人が互いの意見を聴き合い、進んで自己表現できる子供の育成
296		教諭	有山陽子	仲間と協力して主体的に学び合う楽しさを実感できる授業を目指して
297		教諭	太田千佳	友達や教材と主体的・対話的に関わり、粘り強く考える子供の育成を目指して
298	富山市立奥田北小学校	教諭	嶽千尋	表現活動を通して、主体的に学び合う子供の育成
299		教諭	野村早希	子供が主体的・対話的にコミュニケーションを図るための授業の工夫
300		教諭	上野右京	子供一人一人が主体的なコミュニケーションを図るための授業の工夫
301		教諭	高瀬真希	児童が互いに学び合う授業の工夫
302		教諭	谷成望	積極的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
303		教諭	北妃奈乃	子供が、主体的・対話的に言語活動に取り組みやすいような単元構成と課題の工夫
304	富山市立東部小学校	教諭	中野茜里	自分の考えをもち、表現していく子供の育成を目指して
305		教諭	田村優奈	自らの課題を見つめ、目標に向かって粘り強く努力できる子供の育成を目指して
306		教諭	永瀬由華	子供たち同士で学び合う授業「なかま学習」の工夫
307		教諭	伊藤百花	子供たちが主体的に取り組める音楽科の授業づくり
308		教諭	石尾誠一	児童が主体的に活動に取り組むための手立て
309		教諭	雨宮真夕	児童が興味・関心をもって学習に取り組むことができる学習活動の工夫
310		教諭	中橋亮太	子供たちが主体的に学ぶための学習活動の工夫
311		教諭	石川遥裕	別室登校をしている児童への支援
312	教諭	中田祐貴	子供一人ひとりが自信をもって学校生活を送るための支援の在り方	
313	富山市立光陽小学校	教諭	早苗桃子	関わり合いながら主体的に学ぶ子供の姿を目指して
314		教諭	中野明美	願いや思いの実現に向けて生き生きと活動し、互いのよさを認め合える学級を目指して
315		教諭	藤林健梧	主体的に外国語を用いて友達と関わろうとする子供の育成
316		教諭	荒井莉奈	友達の多様な考えに触れ、主体的・対話的に学ぶ子供の育成
317		教諭	中村優良	自ら問いを見だし、主体的に追究する子供の育成
318		教諭	吉田広輝	ICT機器等を活用して、主体的・協働的に学ぶ子供の育成
319		教諭	木村真樹	思いや願いの実現に向けて粘り強く取り組む子供の育成
320		教諭	荒城光	教材を通して、主体的に生活と結び付けて考える子供の育成
321	射水市立小杉小学校	教諭	竹島貴子	自己有用感を高めながら、楽しんで学習に取り組むための工夫
322		教諭	木村友也	一人一人がもつ困感を解決に近づける通級指導の工夫
323		教諭	道谷俊輝	授業内容を自分事として捉え、主体的に学ぶ子供の育成
324		教諭	日高茜	「分かった」「できた」という思いをもち、主体的に学ぶ子供の育成
325		教諭	針山美稀	社会科における資料活用力、思考力・判断力の育成を目指して
326		教諭	八島志歩	学級の課題を自分事として捉え、主体的に学ぶ子供の育成
327		教諭	高井尚子	子供の主体的な学びを支える教師の手立て
328		教諭	上田純平	主体的・対話的に学び「分かった」「できた」喜びを実感できる授業づくり
329	射水市立金山小学校	教諭	島英浩	対話を通して学び合い、考えを深める子供の育成
330		教諭	三島永吏	対話的に学び合い、高め合う子供の育成
331	射水市立歌の森小学校	教諭	飯田花純	仲間とつながりながら、自分の考えを表現する児童の育成
332		教諭	大岡拓海	主体的に課題解決に向かう児童の育成
333		教諭	佐々木友那	児童同士がつながる話し合い活動を取り入れた授業の工夫
334		教諭	林大登	児童が主体的に話し合う学級活動のための手立て

	学校名	職名	氏名	研究課題
335	射水市立歌の森小学校	教諭	渡辺雄貴	話す・聴く力を身に付けるための指導の工夫
336		教諭	中山麻優	進んで思いを伝え合う児童の育成
337		教諭	村中ひかり	主体的によりよい学級を築いていこうとする児童の育成
338	射水市立中太閤山小学校	教諭	橋本誠	「なりたい自分」を豊かに思い描く「総合的な学習の時間」の在り方
339		教諭	竹腰友紀	一人一人が「できた」「分かった」を実感できる指導や支援の在り方
340		教諭	金森凌	子供の主体性を育む楽しい授業づくりを目指して
341		教諭	八尾妃名子	「国語が楽しい」と思える主体的・対話的な指導の実践
342	射水市立大門小学校	教諭	三辺将大	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
343		教諭	森田奈美	社会科における効果的な「伝え合い」を生む学習過程の工夫について
344		教諭	千葉優	SDGsについて考える授業実践
345		教諭	安養隼	物語の叙述から登場人物の心情の変化を捉える手立て
346		教諭	神名寛朗	数理的な事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
347		教諭	中尾彩華	自分の考えを伝え合うことのできる学級集団を目指して
348		教諭	渋谷絢子	作品を深く読み味わい、自分の考えをまとめることができる子供の育成
349		教諭	清雄大志	自ら問いをもち、主体的に学ぼうとする社会科授業の工夫について
350		教諭	青井真生	ICTを使用した伝え合いの授業について
351		教諭	深川真優	説明文の内容理解を深めるための手立てについて
352		教諭	菓子瑞季	伝え合いを通して、思いや考えを深めるための支援の工夫
353		養護教諭	萩中睦月	伝え合いを通して、心と体の健康づくりを主体的・対話的に実践していく子供の育成にむけて
354		射水市立下村小学校	教諭	一守愛
355	射水市立堀岡小学校	教諭	浜谷ひかり	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
356		教諭	津田泰希	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
357		教諭	輪達光司	外国語による言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
358	射水市立東明小学校	教諭	荒木弥	心と体の健康づくりを主体的・対話的に実践していく子供の育成
359		教諭	竹村優子	子供たち一人一人のやる気を引き出す教師の手立て
360		教諭	原田梨央	子供たち一人一人が「分かった・できた」と実感できる指導の工夫
361		教諭	三谷和可菜	心と体の健康づくりを主体的・対話的に実践していく子供の育成
362		教諭	山崎彩佳	心と体の健康づくりを主体的・対話的に実践していく子供の育成
363	高岡市立五位小学校	教諭	縄井航太	一人一人が考えをもち、進んで話し合うための授業づくり
364		教諭	上愛実	動作化を通して楽しく学び、「わかった」「できた」につながる授業づくり
365		教諭	新田初	互いの考えを共有し、学びを深め合う授業を目指して
366		教諭	吉倉奈央	互いのよさを認め合い、安心して学び合う児童の育成
367	高岡市立福岡小学校	教諭	東井一真	興味・関心をもって学習に取り組み、進んで表現しようとする児童の育成
368		教諭	西村実夏	社会的な事象について多角的に考える学習指導の工夫
369		教諭	有島千紘	主体的な学びにつながるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
370		教諭	橋本笑佳	主体的・対話的に学び、考えを深めていく授業の在り方
371		教諭	稲餅優佳	一人一人が考えをもち、学ぶ楽しさを実感できる授業づくり
372		教諭	石野友希	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習指導・支援の在り方
373		教諭	馬淵和可	主体的に考え、友達と関わり合って学ぶ子供の育成
374		教諭	杉江真弥	児童の実態に合わせた指導・支援の在り方
375		教諭	中川拓	思いや考えを表現し安心して活動に取り組むことのできる学級を目指して
376	高岡市立横田小学校	教諭	武内俊輝	主体的に問題解決に取り組み、考えを深める子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
377	高岡市立横田小学校	教諭	後谷良大	主体的に関わり合おうとする児童の育成
378	高岡市立博労小学校	教諭	野原由衣	主体的に取り組み、学ぶ楽しさを味わうことのできる子供の育成
379		教諭	安居純	主体的・対話的で深い学びを通じて、思考力・表現力が高まる児童の育成
380		養護教諭	林美月	心身の健康に関心を抱き、持続可能な健康づくりを実践していく児童の育成を目指して
381		教諭	吉川あかり	自己の理解と行動の調整を促す支援について
382	高岡市立木津小学校	教諭	堺井美優	互いのよさを認め、楽しく学ぶことができる児童の育成
383		教諭	茶木紀依子	自分事として課題を捉え、主体的に学習する子供の育成
384		教諭	齊藤綾乃	特別支援学級における「こと育」
385		教諭	後藤威	OneNoteを活用した「たしざん」「ひきざん」の授業
386	高岡市立川原小学校	教諭	樋口菜音	相手意識をもち、主体的に関わり合う子供の育成
387		教諭	柳澤紗也佳	主体的に学ぶ社会科の授業づくりの在り方
388		教諭	西村千鶴	自信をもって自分の思いや考えを伝え合う道徳科の授業づくり
389		教諭	浅谷康太郎	生活単元学習における人間関係の形成
390	高岡市立能町小学校	教諭	水谷健志	友達と関わり合いながら、主体的に学ぶ児童の育成
391		教諭	大石里夏	友達の話をよく聞き、共に学び合う児童の育成
392		教諭	北川彩香	児童が主体的に活動する授業づくりの工夫
393		教諭	延澤呀香	自分の考えや思いをもち、進んで表現しようとする児童の育成
394		教諭	大久保晶	友達のよさを認め合いながら、主体的に活動しようとする児童の育成
395		高岡市立高陵小学校	教諭	西野綾花
396	教諭		矢谷厚史	友達と関わり合い、学びを楽しむ児童の育成
397	教諭		岸野一	友達と関わり合いながら、学び合う授業の工夫
398	教諭		塚田真由	自分の思いや考えを伝える力を身に付けるための指導の在り方
399	教諭		大村麗奈	主体的・対話的に学び、学ぶ楽しさを味わうことができる授業づくり
400	教諭		茶橋涼夏	自分の考えを伝え、進んで人と関わろうとする児童の育成
401	教諭		番匠萌花	児童が楽しく自信をもって外国語で表現できる授業づくり
402	教諭		杉高正紀	クラス全員がベースボール型運動の楽しさを実感できる授業づくり
403	高岡市立下関小学校	教諭	久湊愛佳	友達と関わりながら楽しく学び、自らを高めようとする児童の育成
404		教諭	石田佳子	音の高低感覚を養うための実践
405		教諭	折田絢音	互いのよさを認め合う学級をつくるための工夫
406		教諭	亀井璃子	主体的に学び、音楽の面白さを味わうことができる授業の在り方
407		教諭	牧野光貴	互いの考えのよさを認め、自分の考えを確かなものにする授業の工夫
408		教諭	笠原有真	児童が主体的に学習したくなる授業を目指して
409		教諭	藤田千里	豊かに音楽科の学習に取り組む児童の育成
410		教諭	山口三耶子	自閉症・情緒障害特別支援学級におけるSSTの工夫
411	高岡市立二塚小学校	教諭	濱元大輝	共に関わり合い、進んで表現しようとする児童の育成
412		教諭	済田佳菜子	互いのよさを認め合い、自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成
413	高岡市立野村小学校	教諭	熊木侑蘭	互いのよさを認め合い、自分の考えを進んで表現できる児童の育成
414		教諭	橋本美咲	互いのよさを認め合い、楽しく学び合う児童の育成
415		教諭	大谷絵吏	互いのよさを認め、楽しく学び合える学級集団の育成
416		教諭	向井幹城	児童が興味・関心をもって学習に取り組むことができる社会科の授業の在り方
417		教諭	松尾瑛莉	互いのよさを認め合い、安心して過ごせる学級集団の育成
418		教諭	近藤雄喜	互いのよさを認め、よりよい学級を目指して活動する児童の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
419	高岡市立野村小学校	教諭	竹内 佳那	関わり合いながら学ぶ高学年外国語科の授業づくり
420		教諭	市村 夏菜江	互いのよさを認め合い、自己肯定感を高める児童の育成
421		教諭	宮崎 完司	一人一人のよさを引き出し、伸ばすための支援の在り方
422		教諭	高橋 大吾	叙述をもとに感想を書き、自分の考えをもつことができる子供の育成
423		教諭	大崎 航志	他者と関わりながら、自分の考えを深める児童の育成
424	高岡市立伏木小学校	教諭	中田 博之	カウンセリング技法を生かして多面的に児童を理解するための実践
425	高岡市立古府小学校	教諭	高橋 明澄	主体的に学習に取り組み、共に伸びようとする学級づくり
426		教諭	林 涼太	友達の話をよく聴き、自分の考えを深める児童の育成
427		教諭	北村 麻衣	友達と関わり合い、自分の生活を見つめ直そうとする児童の育成
428		教諭	細川 百花	友達と自分のよさを認め合い、共に楽しんで学ぶ学級づくり
429	高岡市立戸出東部小学校	教諭	渡邊 惣一朗	思いや願いをもち、自分らしい生き方を探究する児童の育成
430		教諭	桶 隆太郎	探究的な学びに生かす学習専用端末の活用
431		教諭	中谷 実郁	思いや願いを実現する生活科の授業について
432	高岡市立戸出西部小学校	教諭	四十九 葉月	児童が安心して学校生活を送るための支援の在り方
433	高岡市立中田小学校	教諭	村藤 早紀	対話的に自分の考え方を深め合う道徳の授業の工夫
434		教諭	小島 杏菜	児童一人一人の考え方を尊重し、関わり合う力を高める学習指導の工夫
435	小矢部市立東部小学校	養護教諭	野村 麻由	自分の健康に関心をもち、進んで健康づくりに取り組む子供の育成
436		教諭	安田 達広	自立解決を促す授業実践と改善に関する研究
437	小矢部市立大谷小学校	教諭	松永 深月	主体的に考え、共に学ぶ子供の育成
438		教諭	関口 拓真	社会的な見方・考え方を働かせることを通して、主体的・対話的に学ぶ子供の育成
439		教諭	前馬 悠聖	造形的な見方・考え方を働かせ、豊かに関わりながら創造していく子供の育成
440	小矢部市立津沢小学校	教諭	石黒 綾子	子供が主体的に学習に取り組むことができる指導方法の工夫
441		教諭	蒲 愛子	よりよい生活や人間関係を築こうとする子供の育成
442		教諭	嶋田 陽菜	共に学び、考える楽しさを味わう子供の育成
443		教諭	竹島 萌江	共に学び、考える楽しさを味わう子供の育成
444	砺波市立砺波東部小学校	教諭	棚田 千夏	音読を通して場面の様子を具体的に想像することができる子供の育成
445		教諭	土野 三紀子	既習事項を活用し、問題を自力解決するための授業の在り方
446		教諭	荒見 真唯	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
447		教諭	牧山 香菜子	主体的・対話的に言語活動に取り組み、読みを深める授業の工夫
448		教諭	金子 真弓	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
449		教諭	槻尾 瑞希	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
450		教諭	大橋 光貴	ICT機器を活用した「速く走れるようになった」と実感できる授業づくり
451		教諭	澤田 彩可	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
452	教諭	犀川 真衣	主体的・対話的に学ぶ子供の育成	
453	砺波市立砺波南部小学校	教諭	勝原 昌宗	子供の実態に応じた支援の在り方について
454		養護教諭	井波 涼花	正しい手洗いへの意識を高め、習慣付けるための学校保健活動について
455		教諭	棚田 朱音	主体的・対話的に言語活動に取り組み、考えを深めていく子供の育成
456		教諭	前山 智世	主体的・対話的に言語活動に取り組み、考えを深めていく子供の育成
457	砺波市立砺波北部小学校	教諭	河西 徹	主体的に活動し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
458		教諭	窪田 稔彦	数学的な見方・考え方をフルで働かせる授業づくり
459		教諭	滋野 岬	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
460		教諭	宮田 知菜実	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
461	砺波市立砺波北部小学校	教諭	星野花奈	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
462		教諭	石黒光	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
463		教諭	坂井佑	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
464		教諭	西岡優夏	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
465		教諭	川合美希	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
466		教諭	前澤嗟亮	主体的に表現し、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
467	砺波市立鷹栖小学校	教諭	荒井光貴	主体的・対話的に言語活動に取り組み、学びを更新していく子供の育成
468		養護教諭	渡邊南	1人1台端末の利用と目の健康について
469		教諭	山秋千遥	伝え合い、聴き合いながら、考えを深めることのできる子供の育成
470		教諭	嶋倉響子	主体的・対話的で深い学びの実現のための授業改善
471	砺波市立庄川小学校	教諭	練合拓人	事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
472		教諭	原野友香梨	事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
473		教諭	篠原天馬	事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
474		教諭	種部真理	言葉と図、式を関連付けて思考の過程を説明することができる子供の育成
475	南砺市立井波小学校	教諭	酒谷眞美	自分から学ぼうとする子供の育成
476		教諭	勝原朋未	1年生における学習規律を意識するための手立ての在り方
477		教諭	木田泉	生き物との関わりを通して、学習意欲を高めていく子供
478		教諭	山本南穂	子どもが主体的に学習に取り組むための支援
479	南砺市立城端小学校	教諭	砂土居裕貴	物語の全体像を捉え、考えたことを伝え合う授業づくり
480		教諭	高口和士	数理的な事象に主体的・対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
481		教諭	島岡見佳	子供の聞き合いがうまれる授業づくり
482		教諭	石塚千里	子供の「聞きたい」を支える授業づくり
483		教諭	尾田一翔	子供がより達成感を感じられる授業の工夫
484	南砺市立上平小学校	教諭	本田千尋	主体的に学び、自他の考えを比較しようとする子供
485		教諭	朝日志穂	互いに助け合い、支え合っていく地域をつくろうとする子供の育成
486		教諭	蓮川陽子	主体的に学び、自分の考えを伝え合う子とができる子供の育成
487	南砺市立福野小学校	教諭	河野穂乃可	自他の考えの違いやよさに気づき、自己の生き方について考えを深める道徳科の授業の工夫
488		教諭	畠山薫	日本語指導が必要な児童への個別指導の工夫
489		教諭	愛宕竜生	学び合うよさを感じながら、主体的に学ぶ子供の育成
490		教諭	齊藤遥	互いの考えを聞き合い、よさを感じ合う授業を目指して
491	南砺市立福光中部小学校	教諭	本多翔	外国語を進んで使おうとする児童の育成
492		教諭	杉本愛華	算数科と生活のつながりを実感できる子供の育成
493		教諭	真栗一嘉	主体的に学習に取り組む児童の育成
494		教諭	中島昇平	自立活動における主体的によりよくコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指して
495		教諭	豊田侑未	学級目標に向かって自ら考え行動できる子供の育成
496		教諭	河合郁音	構成的グループエンカウンターを通じた低学年児童の人間関係の形成
497		臨任講師	今村伸平	児童の学習内容理解につながる支援
498		教諭	畑腰征志	自分の課題を選択し、友達と関わりながら課題の達成を目指す児童の育成
499	南砺市立福光南部小学校	教諭	大原真帆	主体的・対話的に学び、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する子供の育成
500		教諭	小川美紀	主体的に学習に取り組む子供の育成
501		教諭	鈴木駿太郎	子供同士が高め合う学級づくりを目指して
502	南砺市立福光東部小学校	教諭	太田千秋	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、自分の考えを表現する子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
503	南砺市立福光東部小学校	教諭	田中 慶	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、自分の考えを表現する子供の育成
504		教諭	水口 恵美子	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、自分の考えを表現する子供の育成
505		教諭	中村 優太	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、自分の考えを表現する子供の育成
506		養護教諭	栗原 愛	疾病が生じた際に、発生した状況や程度を伝えることが出来る子供の育成
507	朝日町立朝日中学校	教諭	岩田 寿浩	ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業モデルの作成
508		教諭	舟本 祐	英語でのコミュニケーション力を高める多様な学習形態の工夫
509		教諭	小坂 健太	生徒が自らの考えを言語化して表現できるワークシートの工夫
510		教諭	濱田 将平	自ら考えて理解したり、他者との対話で学びを深めたりすることができる学習形態の工夫
511		教諭	大瀧 まみは	国語科における「主体的・対話的で深い学び」を図るための工夫
512	入善町立入善中学校	教諭	池原 沙織	英語科におけるICT機器を利用した「学び合う」授業の実践
513		教諭	西川 ゆりの	ICT活用の授業実践
514		教諭	佐藤 直也	探究の過程に進んで関わり、粘り強く挑戦する態度を身に付ける指導の工夫
515		教諭	魚谷 光	ICTを生かした主体的な学びの実践
516	入善町立入善西中学校	教諭	惣万 紗千乃	生徒がアサーティブにまた主体的に英語を学ぶことができるための授業工夫
517		教諭	高森 茂	科学的思考力の向上のための日常生活での体験を生かした授業の工夫
518		教諭	田村 諭士	ICTを活用したグループ学習等の授業の工夫
519		教諭	大和 跳治郎	生徒が成長を実感できる授業の工夫
520		臨任講師	大島 光葵	学びが深まるICT活用の授業実践
521	黒部市立明峰中学校	教諭	片桐 遼平	話し合いを伴った書く活動を通して、生徒が自分の考えを進化・発展させられる授業展開の工夫
522		教諭	長谷 悠太郎	話し合い等の意見を交流する活動により、自分の考えを深められる授業展開の工夫
523		教諭	舟根 慎	理科の見方・考え方をはたらかせながら、深い学びにつなげる授業展開の工夫
524		教諭	吉崎 治	身近な自然科学について、興味・関心をもてるような学習課題の設定
525		教諭	金山 文香	生徒一人一人が課題意識をもって言語活動に取り組むための課題設定の工夫
526	魚津市立西部中学校	教諭	植木 惇	生徒の主体性を高める工夫
527	滑川市立滑川中学校	教諭	堀 瑠	ペア・グループワークを用いた学級経営の工夫
528		教諭	小田 凜乃	自治的・自主的な生徒会活動の在り方
529		教諭	新沼 優里	物事を広い視野から多面的・多角的に考える道徳の授業づくり
530		教諭	酒井 遼太	保健体育科「現代的なリズムのダンス」におけるICT機器を利用した効果的な授業方法について
531	滑川市立早月中学校	教諭	渡邊 慎也	SDGSを取り入れた、社会科授業の工夫
532		教諭	山田 怜志	ICTを活用した理科の授業の工夫と実践
533		教諭	高野 佳之	ICTを活用した授業の工夫と実践
534		教諭	海見 陽	授業への効果的なグループワークの取り入れ方
535		教諭	雨宮 実貴子	生徒が主体的に学び、表現の工夫や技能を高めるための手立てと実践
536	舟橋村立舟橋中学校	教諭	黒坂 翔子	「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する学習過程を充実させるための発問や板書、ワークシート、提示資料の工夫はどうあるべきか。
537	富山市立芝園中学校	教諭	五十嵐 大輔	生徒が主体的・対話的な学びを通じて、理科の見方・考え方を養う授業作りについて
538		教諭	上田 七海	生徒の主体性を育む特別活動
539		教諭	寺崎 宏昭	生徒が主体的・対話的に取り組むことを目指した授業
540	富山市立堀川中学校	教諭	河野 未奈	生徒の興味・関心を惹く社会科授業の工夫
541		教諭	寺元 一馬	基礎定着のための、体験的で対話的な授業展開の工夫
542		教諭	竹橋 彩乃	生徒の主体的な学びを促す保健体育科授業の工夫
543		教諭	川上 馨	生徒が主体的に英語を用いて活動できる授業の工夫
544		教諭	砂田 健	深い学びにつながる数学科授業の工夫

	学校名	職 名	氏名	研究課題
545	富山市立西部中学校	教 諭	岩 脇 英 理 子	説得力のある文章の書き方を習得するための授業づくり
546		教 諭	中 川 智 子	語彙力(言葉力)を育む授業作りについて
547		教 諭	野 村 奈々花	効果的な「振り返り」の追究とその取り組み
548	富山市立南部中学校	教 諭	加 藤 麻里奈	生徒の考えを引き出す教師の問いかけの工夫
549		教 諭	村 本 奈々	保健体育科の授業における個に応じた指導の在り方
550		教 諭	川 内 さゆり	特別な支援を要する生徒への学習指導の在り方
551		教 諭	高 尾 尚 多	生徒全員が積極的に参加できる英語科の授業の工夫
552		教 諭	朽 木 百 花	生徒一人一人の個性を引き出す授業の工夫
553	富山市立新庄中学校	教 諭	鈴 木 沙 樹	主体的に学ぶ生徒を育てる理科の授業づくり
554		教 諭	北 村 晴 奈	特別支援教育における数学の教材の工夫
555		教 諭	浅 野 友 紀	保健体育におけるクロームブックの効果的な活用について
556		教 諭	丸 山 遥	中学国語科における古典を身近に感じさせるための工夫
557		教 諭	西 本 晴 哉	授業におけるクラウド教材の活用方法について
558		教 諭	鈴 木 雄 大	主体的に学習に取り組む態度を育む授業づくり
559		教 諭	金 川 未 蘭	生徒の主体性を伸ばす授業の工夫
560		教 諭	片 岡 南	身近な材料を用いた授業実践
561		教 諭	森 紗矢香	社会科におけるICT機器を活用した授業づくり
562		教 諭	竹 田 周 生	学年生徒会を通したリーダー育成の実践
563		教 諭	松 井 暉	生徒が自ら考え、行動するためにはどうしたらよいか
564	富山市立山室中学校	教 諭	杉 本 裕 美	面白い道徳の授業を持続可能なものにするために
565		教 諭	中 井 蛭	国語の授業における、生徒のやる気を喚起する学習課題や教材の工夫
566		教 諭	池 田 若 奈	生徒が「できる」ことを実感し、意欲的に取り組む技術・家庭科の授業づくり
567		教 諭	穴 戸 勝 哉	運動が得意な生徒も苦手な生徒も楽しめる授業づくり
568		教 諭	山 崎 模 菜	課題発見から目的に応じた実験を計画できる授業づくり
569		教 諭	坪 川 華 乃	美術の鑑賞の授業における想像力を膨らませるための工夫
570	富山市立呉羽中学校	教 諭	高 橋 泰 臣	学習意欲を高めるICT機器の活用
571		教 諭	奥 澤 敦 子	仲間と共に学び合う生徒の育成を目指して
572		教 諭	荒 谷 明日香	自己有用感を高める指導の在り方の工夫
573		教 諭	米 林 侑 香	数学への苦手意識を克服・改善するための学習活動・授業内外の工夫
574	富山市立興南中学校	教 諭	山 本 千 尋	明確な学習課題に基づく授業展開の工夫について
575	富山市立藤ノ木中学校	教 諭	高 倉 笙 子	言葉に触れる楽しさを実感できる国語科の授業づくり
576		教 諭	中 川 大 輔	体育授業で生徒が技能を身に付けるための手立て
577		教 諭	森 澤 悟	生徒が主体的に学習に取り組むための授業の工夫
578		教 諭	柳 健 太	Chromebookを活用した実験レポート作成の考察
579		教 諭	戸 島 健 太	学級目標を達成するための話し合い活動の工夫
580		教 諭	中 村 有 希	少人数授業を生かした、全員が積極的に考える授業づくり
581	富山市立大沢野中学校	教 諭	服 部 雄 大	スポーツの見方を増やす実践
582		教 諭	中 田 雄 也	切磋琢磨し、互いに高め合う授業展開の実践
583		教 諭	茂 木 茉 里	生徒の生活と学びが繋がる授業の工夫
584		教 諭	室 早 織	主体的で活発に学習する生徒を育てるための授業活動づくり
585		教 諭	岡 田 春 子	基本的な知識・技能を活用する能力を高める授業
586		教 諭	酒 井 ももこ	「対話」を組み込んだ授業の工夫

	学校名	職名	氏名	研究課題
587		教諭	石川 卓	集団活動による生徒の成長
588	富山市立大沢野中学校	教諭	鬼頭 克典	「わかる・楽しい」授業を目指して
589		教諭	清水 晶夫	生徒が学び合える授業の工夫
590	富山市立城山中学校	教諭	鈴木 友之	互いに認め合い、楽しみながら主体的に表現ができる授業の工夫
591		教諭	岡田 一鷹	1人1台端末を活用した、生徒の学習意欲を高める英語の授業の実践
592	富山市立八尾中学校	教諭	畑 佐知 弘	仲間と共に、意欲的に学習に取り組む子供の育成を目指して
593		教諭	江 尻 小 春	生徒の関心・意欲を高めるための授業実践の工夫
594		教諭	鎌 田 聡 美	男女が協力して何事も一生懸命取り組むことができる学級づくり
595		教諭	眼 目 京 佑	学校に来なくなる学級づくり
596		教諭	小 野 真 実	学習意欲向上を図るための授業展開の工夫
597		教諭	松 居 彩陽香	学び合う理科の授業を目指して
598	富山市立山田中学校	教諭	和 田 直 也	1人1台端末を活用した1次方程式の授業の工夫について
599		教諭	松 尾 湧 斗	ICTを活用したインタラクティブな授業の在り方
600		教諭	石 黒 雄 大	論理的な実験レポートを書くための授業の工夫
601	富山市立楡原中学校	教諭	宮 井 杏 理	SDGsの意識を高める生徒会活動の工夫
602	射水市立大門中学校	教諭	黒 川 雄 介	協働的な学習活動を通じた概念的知識の獲得を目指して
603		教諭	梶 川 まるみ	社会科における特別な支援を必要とする生徒の学習意欲を高める授業づくり
604		教諭	豊 島 湧 大朗	生徒一人一人が道徳的なものの見方や考え方を深める指導の工夫
605	射水市立射北中学校	教諭	水 戸 真美子	1人1台端末を活用し、自分の思いや意図を表現するための工夫
606		教諭	笹 嶋 裕	楽しいソフトボール授業の在り方について
607		教諭	京 谷 知 季	ICT機器を活用した保健体育科授業の工夫
608		教諭	坂 下 洸 斗	理科における課題解決型学習(PBL)を取り入れた授業の工夫
609		教諭	杉 本 千 里	ICT機器を生かした活発な話し合い活動の実践
610		教諭	島 田 紘 希	ICTを活用した社会科の授業における実践
611	教諭	宮 崎 由 衣	美術科における造形的な視点を働かせる鑑賞の授業の工夫	
612	高岡市立伏木中学校	教諭	森 戸 志 保	ICTや端末を効果的に用いて、生徒が主体的に考えたり表現したりできる授業づくり
613		教諭	渡 邊 鈴 香	ICT機器を活用し、音楽表現に対する思いや意図の質を高める授業づくり
614	高岡市立福岡中学校	教諭	松 田 陸	「深い学び」を実現させるための学習専用端末と振り返り表の活用
615		教諭	松 代 弘 樹	社会科「ジグソー学習」を用いた授業づくり
616		教諭	竹 内 優 香	生徒が「分かった」「できた」と感じるための効果的なICT機器を活用した授業展開の工夫
617		教諭	川 渕 俊 輔	生徒が自ら課題を解決できる授業の工夫
618		教諭	開 澤 晴 香	生徒が意欲的に学習に取り組むことのできる効果的なICT機器活用の工夫
619	氷見市立北部中学校	教諭	石 野 実加子	保健分野「応急手当」の学習における実践の工夫
620		教諭	石 川 智 大	生徒の数学的な理解と興味・関心を高める中学校数学科の授業実践
621		教諭	西 森 友 和	コミュニケーションを楽しみ、主体的・対話的に学習しようとする生徒の育成
622	小矢部市立津沢中学校	教諭	中 嶋 孝 文	ICTを活用した数学科の指導について
623		養護教諭	花 島 杏 菜	自主的に健康な生活を実践しようとする態度を育てる保健室経営
624	砺波市立庄西中学校	教諭	荒 俣 雄 輝	「科学的な思考」を育成する学び合い活動の工夫について
625	砺波市立般若中学校	教諭	中 村 圭 吾	保健体育の授業に於ける「視覚化」の有効性
626		教諭	野 口 満 成	生徒が主体的に学ぶための授業の工夫
627		教諭	小 池 裕 太	生徒が理科的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶことができる授業の工夫について
628		教諭	川 越 玖 瑠 実	生徒が学ぶ楽しさを味わうことができる指導の工夫

	学校名	職名	氏名	研究課題
629	南砺市立吉江中学校	教諭	北村 颯士	運動を豊かに実践していくための指導過程はどうあればよいか
630		教諭	藤信 万里奈	自分らしさを探そう!
631		教諭	種村 栞里	生徒の主体的な学びの姿勢を育む授業の工夫
632	高岡市立国吉義務教育学校	教諭	島林 未夢	主体的な学びを支える授業づくり
633		教諭	老田 稜平	生徒の意欲向上につながる授業展開の工夫
634		教諭	近藤 雄哉	ICTを活用した算数科における基礎的・基本的な学力の向上
635		教諭	四日 優希	多様な考えにつながる課題設定と授業展開の工夫
636		教諭	高田 菜摘	対話を通して主体的に解決に向かおうとする子供の育成
637		教諭	尾田 勇哉	他者との関わりを通して、豊かな表現力を育む授業の工夫
638	南砺市立南砺つばき学舎	教諭	澤川 雄太	外国語科における主体的・対話的に活動する子供の育成
639		教諭	五十嵐 彩夏	子供が意欲をもって音楽科の学習に取り組むための手立て
640		教諭	沼田 涼平	系統性を踏まえた算数科教育
641		教諭	坂井 月花	国語科における話す力・聞く力の育成を目指す指導の工夫
642		養護教諭	田中 和果	心と体の健康づくりを主体的に実践していく子供の育成
643	富山県立福岡高等学校	教諭	荒井 琢巳	授業ごとの課題を意識した「書く力を高める」指導
644	高朋高等学校	教諭	大道 輝緒	興味を持たせる社会科の授業
645		教諭	渡邊 慎	ICTを授業に活用した場合の効果
646		教諭	小池 拓斗	身体特性とパフォーマンスの関係について
647		教諭	小坂 順子	基礎学力を身に付けさせるための数学の実践授業
648		教諭	堀 千鈴	語彙力をつける授業について
649		教諭	滝上 圭子	観点別評価を踏まえた授業の工夫
650		教諭	星野 英伸	生徒が積極的に取り組める体育の授業の工夫
651		富山県立富山視覚総合支援学校	教諭	吉村 真由子
652	富山県立富山聴覚総合支援学校	教諭	宮岡 恵美	遊びをとおして興味・関心を広げ、人とかかわる力を高める支援の在り方
653		教諭	山下 結希	生徒が意欲をもって自分の考えを伝える、相手の考えを聞く数学の授業の工夫
654	富山県立しらとり支援学校	教諭	斉田 大輝	学級目標を生かした「日常生活の指導」の工夫
655	富山県立高岡高等支援学校	教諭	加茂 拓馬	実生活に生きる数学科の授業づくり

令和4年度
実践報告集

編集・発行 令和5年2月1日発行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
〒939-8084 富山市西中野町1-1-18
オフィス西中野内
TEL 076-464-3703 FAX 076-464-9818

印刷 株式会社 中村
